始

323
736

帝國圖書館藏

和文英譯規範

ゴールデン・デイージ

大正
15. 12. 13
内交

323-736

緒　言

本書の目的は我國の英學生等が最も難んする所の和文英譯の規範を示し特に中學卒業後諸官立高等學校に入學せんとする者の受驗參考書たらしめんとするものである。

和英兩文とも其文體は成るべく平明なるを選び中學卒業程度の學生に適するものたらしめ、又密かに彼等の文學的趣味の啓發を期して居るのである。

題材を人口に膾炙したる快傑名僧及烈婦の逸話に取りたるは讀む者をして盡きざる興味の內に覺わず知らずして其難んする所の和文英譯の呼吸を習得せしめんとする予が用意の外他意あるものでない

脚註は本書の最も重視せられんことを欲する所にして予が多年教授の實驗に徴し我學生の常に陷り易き錯誤の要點を擧げて之れを正し且説明を附したる者である。

尙附するに練習問題を以てして學生各自の自修に供し且各問題に對して悉く二樣の解答を附し彼等をして更に其譯法に熟達せしむるの資に供したり。

大正十五年十一月

村井知至識

帝國圖書館藏

目次

		頁 Page.
第一章	劍士 荒木又右衛門 Araki Matayemon, a Fencing Master.	2
第二章	淸僧 白隱禪師 Hakuin-Jenji, a Hater of Hypocrisy.	22
第三章	俠客 幡隨院長兵衛 Banzuiin Chōbei, a Friend of the Weak.	50
第四章	烈女 春日局 Kasuga-no-Tsubone, a Heroine.	96
第五章	義士 藤堂仁右衛門 Tōdō Niyemon, a Loyal Friend.	140
第六章	明將 北條早雲 Hōjō Sōun, a General of High Character.	164

附錄 和文英譯練習問題及解答

第一章の部……1
第二章の部……11
第三章の部……26
第四章の部……45
第五章の部……66
第六章の部……84

GOLDEN DEEDS

第一章

劍士

荒木又右衛門

荒木又右衛門は1)劍道の2)達人で御坐いました、此人に就ては兼ねてより荒木の前に荒木なく、荒木の後に荒木なからんと稱せられて居りまして、實に3)無敵の勇者で御坐いました。

玆に御話申す事柄は其趣味深き生涯の唯一節を述ぶる迄で御坐います。

又右衛門の 4)劍道漸く上達して參りました時、

1) 【劍道】=此の道の字は術といふ意味であるから art と譯するのが適當である、道の字を直譯して way だの course だの doctrine だのいふ字を用ゆるは滑稽の極である、初學者は兎角邦文を英譯するに當り文字に拘泥する處から英文としては頗に無意味な文章を作るに至るのである。

2) 【達人】=a man well versed in. 此の well versed in といふ adjective phrase は必らず名詞（こゝでは a man）の後に附するので決して a well versed man in とは云はないのである。彼は何々の達人といふことは此處に用ゐた譯語の外に a man skillful in 或は a man clever at とも譯することが出來る。

3) 【無敵の勇者】=之を可成文字通りに譯すれば a man of matchless valour である、然し前文の行きがゝりから意譯して a peerless fencer としたのである、無敵とは邦文で無雙ともいい又は無二ともいふ如く英文でも peerless 又 matchless の外に unparalleled; unequalled 等色々の同意義の言葉がある。

4) 【劍道漸く上達す】=日本文を英文にする時原文の文法を全く變更しても差支ない場合がある、其一例として此文章の如き「上達す」との動詞を變へて名詞となし when he became an expert（名人）in fencing とすることが出來る。

5) 【將軍の御勝元】=これは無理に英譯をすれば出來ないことはないが注釋めいた文句となりて變に間へるから the stage of

"KŌDAN" IN ENGLISH

CHAPTER I

Araki Mataemon, a Fencing Master.

ARAKI Mataemon was *a man well versed in* the *art of fencing*. It was said of him that there was no Araki before Araki and there would be no other Araki after Araki. He was indeed *a peerless fencer*.

The following story gives only one passage of his very interesting life.

When he became an expert in fencing, he left his

彼は故郷を後にして[5]將軍の御膝元にて一旗上げんものと心得まして江戸に向つて旅立ちました。

東海道の道中半にして [6]嚢中既に空しくなり、富士川に達しました時には[7]鐚一文も殘つて居らぬ仕末で御坐いました、成程服裝は立派で大小も差して居りましたから、其衣服なり大小を[8]賣り拂へば[9]多少の金を得ることは譯もない事でありましたが、左樣な事を致さず[10]平氣に構へて居りました。

原來東洋的の豪傑は金錢を眼中において居りません、又[11]貨殖の道は全く不案内で御坐います。又右衞門も亦其仲間で御坐いましたから、さて富士川を渡ると云ふ段になつて勿論渡し人足を傭はねばならぬ、人足を傭へば必らず賃錢を拂はねばならぬ事は分り切つた事で御坐いますが、[12]先生

the metropolis（都會の槍舞臺）と意譯したのである。

6) 【嚢中空しくなる】=to ~~become short of~~ money. ~~short of~~は不足といふ意味で short of capital; short of means 等はよく用ふる熟語である、砲彈が目的地に届かないのも to fall short of.....といふ、「嚢中段々と空しくなつて來た」とは His money ran short ともいひ又は He ran out of moneyと譯することが出來る。

7) 【鐚一文も殘らぬ】=これは餘程強い expression であるからたゞ no money 位では物足りない英語の penniless は鐚一文もないとの意に當る、之に literally（文字通りに；眞に）の

native place ~~for Edo~~ to make his appearance on *the stage of the* ~~*metropolis*~~.

In the midst of his journey through the Tokaido he *became* ~~*short of*~~ *money*, and was *literally penniless* by the time he reached the Fuji river. True, he was fairly well dressed and carried two swords, so that *he could easily raise some money if he would dispose of* some of his garments or his swords. But he would not adopt such a device, *nor would he worry about* the matter.

To oriental heroes money was nothing, and they were utterly ignorant of *money cares*. Mataemon was such a man. In crossing over the Fuji river he had to engage some coolies and must pay some money for their services. *Heedless* as *it may seem*, he engaged a few *coolies* and crossed the river by

字を附すれば原文の日本語と殆んど同一の力ある文句となると思ふ。

8) 【賣り拂へば】=if he would dispose of 此の dispose of は手放す；賣却す；片付けるとの意味を有する熟語であるからここでは sell といふより寧ろ此の熟語を用いた方がよい。

9) 【多少の金を得ることは譯もないこと】=He could easily raise some money.「譯もない事である」を It was an easy thing とか It was easy for him とかいふても文法上間違いではないが He could easily.....といふ方が面白い、raise money は金を作る；金を工夫するといふ意味の熟語として常に用ゐらる「多少の」は some の一字に表はれて居る。

前後の頓着なく兩三人の渡し人夫を使役して一文なしの身で渡つて仕舞いました。

渡り終つて又右衞門は人足共に向つて、さて遣はすべき賃金がないと切出したからたまりません忽ち大騒動が持ち上がりました、[13]氣荒の人足共どうして左樣で御座いますかと引込まない、又右衞門に向つて無錢渡河をやつた者には極りの仕置があるからソー思へと詰め掛けた。此仕置と云ふのは掟を破つた者をば居合はす人足共が[14]總出で一つ宛拳骨を喰はすと云ふ定めで御座いました。

又右衞門は仕方がないから勝手に計らへと諾ふた、ソーなると六十人計の人足共が群がり來つて拳を堅めて打擲した、[15]又右衞門は自若として打擲を受けて居りましたが餘り柔和で手向ひも仕ないものですから、人足共は[16]からかい始めて法外にも[17]いたづら半分に一人で三つ四つも張り飛

10) 【平氣に構へて居りました】=この日本文は肯定的の云い方であるが譯文には之を否定的にして *nor* would he worry about the matter とかへたのである、文章の勢いで此の如く affirmative sentence を negative sentence と變ゑても意味さへ同じことであれば少しも差支ないのである、因に言ふ nor の後に clause が來る時はこゝに示す如く文の順序が變つて nor would he.....となるのである。

11) 【貨殖の道】=之を money cares と譯したのはチト不當かも知らぬがこゝではかくいふても差支ないと思ふ。貨殖とは英語で money-making 又は the way to become rich といふ而して money cares の中には之も含蓄して居つて又た其上に

their help, though he had no money to pay them.

After crossing he told his coolies that he had no money at pay them and was at once involved in serious trouble. The coolies *would not excuse him* and told him that there was an established regulation concerning those who crossed the river without payment. The regulation was that the offender had to suffer a blow of the fist *from each coolie*.

There being no other way, Mataemon consented to submit to this custom. All the coolies, about sixty in number, gathered around him and struck him with their hard fists. Mataemon *sat calm and quiet* and endured the punishment. As he appeared so gentle and harmless, the coolies began *to make fun of* him

金錢に關する一切の心配を總括した言葉である。

12) 【先生前後の頓着もなく】=Heedless as it may seem. これも意譯である、此の譯文の意味は「如何にも不注意な樣ではあるが」である、凡て文の首に形容詞、副詞、動詞等があり て其次に as を置く時は此の as は although と同意義を有するのである。

13) 【氣荒の人足共どうして左樣で御座りますかと引込まない】=此の文をくだ々々しく譯せず其意を取つて The coolies would not excuse him としたのである。

14) 【總出で一ツ宛】=これを from each coolie と譯するは何だか言葉が不足の樣に思ふ讀者があるかも知れぬが英語の

ばす奴も出來ました。

スルト今度は 18)局面一變して又右衞門の方で人足共の 19)無禮を赦さない、軈て立上つて「貴樣等は一人が一つ宛打つのだと云つたが一人で三つ四つも打つた者がある、サー余は玆で其餘計に打つた奴に仕返しをせねばならぬ」と云ふや否や、一人の人足を引捕えた、併し人足共は又右衞門がドンナ豪い人であるか知らぬものですから 20)ナンの此奴がと高をくゝつて又もや一拳をくれた。

又右衞門も最早耐え兼ねた「ヨシ其儀ならば 21)眼にものみせてくれんずと云ふより早く手近の二三人を打倒した。

22)「スワ狼籍者」と叫びつゝ 23)數十人の人足共各各棒、掉を振り翳して、又右衞門に向つて打つて

each は斯樣な時其意味を充分に表はすのである。

15) 【又右衞門は自若として打擲を受けて居ました】=自若として を He sat calm and quiet と譯したが之を邦文の如く副詞として譯さんには calmly; composedly なる言葉を用ゆ、次の句の「打擲を受」も直譯すれば「打擲」を blow; striking とし「受ける」を receive とせねばならぬのであらうが玆の打擲は刑罰としての打擲ゆへ之を the punishment とし「受けた」を endured 我慢した; 辛抱した; とかへて譯したのである。

16) 【からかひ始め】=began to make fun of him. 又は they began to make a joke of him と譯してもよい、之に類似の熟語で to make a fool of him (馬鹿にする) といふのがある。

and some of them struck him *by way of* amusement three or four times, thus overstepping the rule.

Then *the tables were turned*, and Araki *would not excuse* their impudence. He stood up and said to them, "Though you said that each man would strike me once, some of you struck me three or four times, so I will now return the extra blows." With these words he laid hold of a coolie, but the others, not knowing what kind of a man Araki was, still went on *slighting him* and struck him again.

Mataemon could no longer stand it, and said to them, "If such is your attitude, *I will let you see what kind of a man I am.*" No sooner had he said this than he felled two or three of them to the ground.

"Ah!", shouted they, "*Here is a troublesome customer!*" And *several scores of coolies* came to attack

17) 【いたづら半分に】=by way of amusement. 此の by way of も一ツの熟語にして何々半分にとか何々旁とかいふ意味である。

18) 【局面一變して】=the tables were turned. これも屢々用ゐらるゝ文句にして其意味は二者の位置が反對になる時に用ゆるのである例へば攻者が守者に轉じ富者が貧者と入り代りなどする時等である、此「局面一變」を尙ほ他の英語で面白く云ひ變へれば Then the boot was put on the other leg ともいひ又は The business took a different complexion ともいふ。

19) 【無禮を赦さない】=*would not* excuse thier impudence. この樣の tense に注意せよ。

掛つたが、元より劍道熟達の荒木又右衞門少しも驚がず刀を拔かねば鐵扇も用ひず、[24]柔術の極意によつて人足共を [25]手玉の如く投げ棄てた、其働らき誠に目醒ましかつたものですから、サスガの人足共も初めてコハ並々の人間でないと知つたものですから [26]蜘蛛の子を散らす樣に逃げ去つて仕舞ました。

[27]其時恰も近傍の茶店に憩ふて居りました武士があつて、又右衞門の働らき振を見て、其力量を驚嘆し、之れ正しく當代の達人ならんと思ひましたから、ツカツカと前に進み出で慇懃(ねんごろ)に挨拶し、[28]其鮮かなる腕前を稱贊して又右衞門を以前の茶亭に伴ひました。

偖て其武士は又右衞門に向つて [29]「非礼(よしつけ)ながら

20) 【なんの此奴がと高をくゝつて】=此類の文句をサア譯さうとすると一寸困難を感ずるのである、高といふ字を和英辭典によりて調べると Quantity とあり、高の知れたの句は trifling, inconsiderable などいふ譯語が與へてある、之を知つても此等の言葉を如何に使ふてよいかゞ分らないものである、予は此等和英辭書の敎ゆる言葉を用ゐず slighting him (彼を輕蔑して、彼をみくびつて) と譯して見た、此の一言で原文にある意味が充分表はれて居ると思ふ。

21) 【眼に物見せてくれんずと】=此句は日本語では一ツの phrase となつて居るが英語に之と同一の phrase があるやなきや、I'll let you smart for it などいふ句もあるようだが之も卿

Araki, equipped with clubs and poles. Araki Mataemon being an expert at fencing, was not a bit afraid of them, and did not even draw his sword nor use his iron fan. He handled them *after the art of jujutsu* and threw them about *like so many balls.* It was indeed a remarkable sight and the coolies, realizing for the first time that he was not an ordinary man, *ran away in confusion.*

It so happnend that another *samurai*, while resting at a tea house near by, had observed Araki's activities. He was greatly struck *by his feat* and believed that he was the master-hand of the age. So he came out and saluted him politely, expressing admiration for his remarkable achievement, and invited him into the tea-house.

The *samurai* said to Mataemon, "I understand

か不滿足な譯語である、矢張りこの邦語は其意味を取つて I will let you see (又は I will prove to you) what kind of a man I am と譯するのがよいと思ふ。

22) 【スワ狼籍者】=a troublesome customer. これも何だか物足らぬ樣感ずる人があるかも知れぬが英語風に書けばこれで充分だと思ふ、彼我習慣の違ふ所を玩味せねばならぬ。

23) 【數十人の人足共】=several scores of coolies. score は二十といふことであるから several scores は數十人に當る、英語では score とか dozen とかいふ數字代用語をよく用ゆるのである。

24) 【柔道の極意によつて】=after the art of Judō. この「よつて」

貴殿は道中の御仕度に御困りと見受け申すが、[30]武士は相身互と申せば失禮ながら御合力申上度存ずる、[31]就ては貴殿は何處へ御越し相成るかと尋ねました、處が兩人共江戸下向の際でありましたから、[32]茲によき道連れと相成りました、此武士は渡邊靱負と申して其時より互に[33]刎頸の交はりを結ぶ間柄となりました。

斯くて又右衞門は江戸に道場を開き大に名聲を揚げましたが、餘事は措置いて斯く昵懇の間柄になりましたる渡邊靱負の事に就て申上げますが、不幸にして此人は[34]同僚の嫉みにより暗殺に遇ひました。

又右衞門は曩日の恩誼を忘れ難く何とかして此恩を報じたゐものと決心致しました。ソコデ靱負の一子數馬と相携えて[35]仇討の旅に上ることゝ

は普通 by といふのであるがこゝでは after とするのが適當である、即ち此の after は……に從つてとの意である、「極意」なる字を正確に譯せば the secret ; the mysteries といふべきであるが the art の中にも其意が表はれて居るのである。

25) 【手玉の如く投げ棄て】=threw them about like so many balls. 原文にては so many の句がないのであるが英語では like balls といふよりこういふ場合には like so many balls といふ方がよいのである、此の so many とは澤山といふ意味でなく同數といふ義である、他の例で云へば There are five people and so many (5) bicycles といふが如し。

that you are in want of money for travelling expenses. *Mutual help is a canon of Bushido.* Allow me to offer you assistance. *By the way*, where are you going?" They were both on their way to Edo, and each *found in the other a good travelling companion.* This *samurai* was Watanabe Yukie, and he became *an intimate friend* of Araki's.

Afterwards Mataemon opened a fencing hall in Edo and became famous. Omitting the rest of the story, let us follow him in his relations with his friend, Watanabe. The latter was unfortunately murdered by one of his fellow *samurai from mere jealousy.*

Mataemon remembered gratefully what Watanabe had done for him, and made up his mind to repay his kindness. So he started out in company with

---

26) 【蜘蛛の子を散らす樣に逃げ去つた】=ran away in confusion. 蜘蛛の子を散らす如くとは日本流の比喩であつて之を其儘英譯した所で面白くないから簡單に ran away in confusion と譯したのである。

27) 【其時恰かも】=It so happened that……邦語の恰かも丁度とか偶々丁度とかいふ處にはいつも英語では it so happened that の句を用ゆ、邦語では副詞にいふのを英語では動詞 (happened) にて表すのである。

28) 【其の鮮かなる腕前】=直譯的にいへば his display of ability であるが寧ろ一言で feat となす方がよいと思ふ、feat とは藝といふ字であるが武藝を巧に現はす行動を意味するの言

なりました。

友誼の爲めに立つ仇討の旅とは云へ其道中の千辛萬苦は實に[36]言語に絶したる者が御座いました、特に相手は旗本の庇護を受けて居りましたから又右衞門の一味は之れが爲めにも屢危難に陷つた次第で御坐いましたが、併し天祐は彼等の上にありましたから終に伊賀の上野において其本懷を遂げたので御座います。

此勝負の際仇は三十六人の劍客を從へて居りましたが又右衞門はまだ若年なる數馬と其一僕を伴ふて居りました計り、併し又右衞門は[37]劍道の祕術を盡くして相手を塵に致しました。

サウなると又右衞門の名聲は天下に傳はり諸大

葉である、故に鮮かなる腕前は丁度 feat に當る。

29) 【非躾乍ら】=これは一ツの敬語であつて無理に英譯すれば Allow me とか If you will allow me となる、然しこゝでは直ぐ次の文にこの Allow me を使ふ必要があるから態と省略したのである。

30) 【武士は相身互と申せば】=Mutual help is a canon of Bushido. これは無論意譯である、mutual help とは相身互に當る、a canon of Bushido は武士道の典例即ち武士の常に守るべき道といふ意味であるから Mutual help is a canon of Bushido はまづ原文の意に適ふて居ると思ふ。

31) 【就ては】=これは話題を他に轉ずるの際にいふ合間の言葉で

Yukie's only son named Kazuma, with the purpose of slaying his dead friend's enemy.

Words can not possibly describe all the hardships and trials that he encountered during this expedition of love and kindness on behalf of his friend. The murderer secured the assistance of some *Hatamoto*, and so Mataemon and his party were often in danger of being assassinated by them. But the blessing of Heaven was upon them and they at last realized their object in a town called Ueno in the province of Iga.

In that final fight the murderer was assisted by thirty six swordsmen, while Araki had only Kazuma, the little boy, and a servant ; but Mataemon making *the best use of* the secret art of fencing destroyed all his opponents.

Then his reputation spread all over the country,

或時は時に何々..... 一體何々...ともいひ又それはそうと... ...ともいふ英語では之を by the way 又は by the by 又は and now ともいふ場合がある。

32) 【茲によき道連れと相成りました】=初學者は之を they became very pleasant companions in travelling と譯するであらうがそれは甚だ拙ない譯し方であつて寧ろ each found in the other a good travelling companion と譯する方が idiomatic で巧な譯し方である。

33) 【刎頸の交りを結ぶ間柄となつた】=刎頸の交りは a life-long friendship, 結ぶは to contract であるが斯くいへば餘り直

名は[38]爭ふて之を召抱へ樣と致し一方にて千石にて抱へ樣と云へば一方より二千石を與へ樣と云ふ、サラバ三千石扶持し樣と云ふ者が出て來ると云ふ勢で[39]始めは扶持の競爭で御座いましたが漸次に干戈を以て爭ふと云ふに至りました。幸に又仲裁する者も出でゝ大事に到らず事濟みに相成り又右衞門は因州侯に奉へる事になりました。

荒木又右衞門の名は國中に喧傳せられ、兒童走卒も其傳記を知らぬものなく[40]古今に絕した武勇者と一般に認められて居るので御座います。

一體此話にある一人で三十六人を相手に鬪ひ然かも之れを塵殺したと云ふ樣な事は全く[41]虛構の樣に聞えませうが事實に於て劍道の達人は此位の事は何んの造作もなくやるので御座います。

譯的でゴツ々々するから平易に he became a most intimate friend とした。

34) 【同僚の嫉みにより暗殺に遇ひました】=murdered by one of his fellow samurai from mere jealousy. 嫉みによりましての「より」は原因を意味するのであるから from と譯さねばならぬ邦語の「より」は何時でも by と譯することは出來ないのである、たゞ此の「より」ばかりでなく「から」とか「の」とかいふ語も何時も前者を from 後者を of と譯する譯にいかない例へば高等商業學校の入學試驗といふ場合の如き此の「の」は of といふよりは for 又は to の方が適

and several Daimyos *earnestly desired to secure his services.* One offered him an income of a thousand *koku* of rice, another two thousand *koku*, and still another bid three thousand *koku*. *First, competition, and by and by, serious fighting, took place* among the Daimyos. The dispute was at last settled by the mediation of a certain other Daimyo, and Mataemon was employed by the lord of Inshū.

Henceforth the name of Araki Mataemon spread all over the country, and even children are familiar with his story. He is universally esteemed *as a hero without an equal* both in ancient and modern times.

Now it *may sound utterly incredible* that one man could match thirty six men and destroy them all as told in this story. As a matter of fact, however, this is almost nothing to a master of fencing.

當である、the entrance examination for (to) the Higher Commercial School.

35) 【仇討の旅に上る】=仇討の爲めと云へば for vengeance であるが英文では此の言葉を省いても context の中に充分其意味が表はれて居るから寧ろ之を省略する方がよい。

36) 【言語に絕した者がある】=words cannot possibly discribe. 此の句はまだ幾何でも他に言ひ表はし樣があるであらうと思ふ、例へば words are inadequate to describe とも云ひ又は No words can properly describe とも云へる。

37) 【劍道の秘術を盡くして】=making the best use of the secret art of fencing. 尙ほ之を言ひ換ゆれば putting to its best use

之れを本朝の歴史に徴するに一人以て百二百の衆に膺り勝を制したる例は少なく御坐ゐません。

豐臣秀吉の朝鮮征伐に當つて秀吉は多數の劍客を使用致しましたが、其際彼等劍客が 42)一騎當千の手柄を現はしたとは歴史上の事實で御座います。

關ヶ原の戰ひに際しても斯樣な奮戰は屢々あつたとで御座ゐました。今日でも 43)劍道の達人に就て之れを實見せば直に分ることで御座います、身に寸鐵をも帶びぬ劍客が善く刀鎗を以て身を固ためた數十人の素人に向ふて尚餘りある事は寧ろ至當であると思はれて居るので御座います。

輓近鐵砲や大砲の用ひらるゝ樣に成りましてから劍術は衰へましたが、併し今日でも 44)無用の長物では御座りません、日露戰役に於て 45)日軍が常

the esoteric art of fencing としても差支ない。

38)【爭ふて之を召抱へ樣とす】=爭ふてといふ意味はつまり熱心にといふことであるから earnestly desired と譯した、又は they were eager (anxious) to employ (retain) him と譯してもいゝ。

39)【始めは扶持の競爭でありましたが漸次に干戈を以ても相爭ふといふに至りました】=First, competition, and by and by, serious fighting, took place. この譯文を見て言葉が足らぬ樣思ふ人もあらうが文章は可成簡潔にかく方がよいのである。

40)【古今に絶する武勇者】=此文を譯せんとして初學者が一番困

It is not at all a rare thing in the history of Japan for one man, to face one hundred or two hundred men in fight and win the victory.

When Taikō Hideyoshi attacked Corea, he employed a number of fencing masters, and it is a historical fact that *one man at that time was able single-handed to hold in check an enormous army of the enemy.*

Many combats of a similar nature took place in the battle of Sekigahara. Even to-day *you can try our fencing masters, and see with your own eyes* that one such man without the use of any weapon is more than equal to a crowd of inexperienced fighters armed with swords and spears.

Since guns and cannons came into use, the art of fencing has been declining, and yet it is even to-day *by no means without use.* In the late Russo-Japanese

るであらうと思ふのは「絶する」といふ一句である、これは without an equa といふ phrase を知つて居ればわけなく譯し得らるゝのである。

41)【虛構ら樣に聞へるでせう】=it may sound (聞へる) incredible (信じ難く)、虛構はウソ、作り話といふ意味だから it may sound false (又は fictitious) と譯してもよい。

42)【一騎當千の手柄】=one man was able single-handed to hold in check an enormous army of the enemy. 一騎當千といふ set phrase は英語にはないから自然長つたらしき譯文となる、井上十吉氏は其和英字典に one that can cope with a thousand enemies と譯して居る、然しこんな文句は必らず

に露軍を破り得たのも我軍人が此劍道を心得て居つたからで御座います。

46)閑話休題又右衞門の話に就て二個の注意すべき事柄が御座います、則ち日本人が常に 47)義心強く場合に由つては報恩の爲めに其生命をも惜まぬと云ふ事と、又劍道が本朝に於て非常に發達致して爲に非常な効驗を奏した者であると云ふことで御座います。

しも短文に譯せずとも意味がよく表はれて文章が鮮かであれば少々長くも差支ないと思ふ、茲に譯出した文を尙ほ一つ譯し換ゆればこうもいへる、one warrior by his own unaided efforts was able to hold back a large hostile host.

43) 【劍道の達人に就て之を實見せば直ちに分ることで御座います】=實見するは can actually observe であるがこゝでは之を二つの文章に分けて you can try our fencing masters, and see with your own eyes.....と譯して見た、此の方が語勢が强い。

44) 【無用の長物】=a useless と譯すべきであるが茲では it is by no means *without use* と譯した。

45) 【日軍が常に露軍を破り得た】=The Japanese often got the

war, the Japanese often got the better of the Russians because many of our military men are well-trained in the art of fencing.

In brief, there are two things worth noticing in the story of Araki, namely, that the Japanese have always been strong in *the sense of gratitude* and readiness to sacrifice, if necessary, their own lives for the sake of their benefactors; and that the art of fencing has attained its highest development in Japan, where its practical benefits have been invaluable.

---

better of the Russians. 此の to get the better of は勝利を得るとの意味である、邦文の「破り得た」を其儘譯すれば The Japanese often *defeated* the Russians, となる併し飜譯は文字を離れて意味を色々に譯出するのが巧みなのである、「日軍が云々」の此の文章も The Japanese always came out victors over the Russians とするも面白いと思ふ。

46) 【閑話休題】=之を In brief といふは正確な譯語ではないかも知れぬ併しこゝでは之を用いて差支ない、In brief の字義は簡短に言へば；約言すればである。

47) 【義心】=此の言葉は恩義の意味であるから the sense of gratitude と譯したのである。

第二章

清僧

白隱禪師

我國の道德では僞善を憎みまして、之れを以て罪惡中の最も醜なる者と見做して居りますから、自然正義廉潔は[1]修養の首なり尾なりと敎へられて居ります。

[2]一體僞善者と申すものは、其心術が如何に不正であつても、其私行が如何に疚ましきものであつても、[3]之れ等の事は少しも頓着せず、唯自己が世間の眼にさへ善人として映じ、他人の間に好評をさへ博せば滿足して居るので御坐いますから、有德の人は斯る奴輩を忌み厭つて道德界の賊と見做して居るので御座います。

1) 【修養の首なり尾なり】=the alpha and omega of moral culture. alphaは希臘語のイロハの初の字にしてomegaは其終の字である、故に始め終りといふ意味に用ゐらる、然しこんなに六ケ敷言はずとも the beginning and end of moral culture と譯しても可いのである。

2) 【一體僞善者と申す者は……滿足して居るので御座いますから】=此の文章を甘く英文に譯そうとすると如何しても配語(syntax)を全く顚倒して仕舞ふ必要がある、其の如何に顚倒するかは原文と此の譯文とを對照して見れば分

CHAPTER II

Hakuin-Jenji, a Hater of Hypocrisy.

OUR morality hates hypocrisy. It is considered the ugliest of all sins. Uprightness or integrity is, therefore, taught as *the alpha and omega of moral culture.*

A hypocrite is one who is perfectly satisfied if he passes for a good man in the eyes of the world, and is well spoken of among his fellow men, *no matter how* wicked his heart, or how disgraceful his private conduct. A virtuous man, however, detests such a fellow and regards him as a traitor to virtue.

るであらう、元來英語と日本語とほぼSyntaxの倒錯(さかさま)なるはないと思ふ、日本語で始にいふことを英語では終にいひ英語で終にいふことを日本語では初にいふことが殆んど常である、故に日本人が英語で言を云ふとすればまづ思想の立場を逆にしなければならぬと思ふ。

3) 【此等のことは少しも頓着せず】=此の一句は without minding such things と譯してもよいのであるが no matter how といふ接續副詞を用ゐて云い表す方が本文の場合などには工合がよいのである no matter how とは構はずに:

我國に於て一種異樣の道德則ち世評を[4]馬耳東風の如く心得る風の流行致して居りますのは、恐らく甚だしく此僞善を惡む結果であらうかと心得ます。

假如ひ世間擧つて己れを惡し樣に云ひなし、又誤解いたしても、其心に正義を備へ、其行爲に非難すべきものなくば[5]毛頭苦慮せず、[6]良心をして其友たらしめよ、言ふものをして言はしめよ、假令ひ世が何と云ふとも[7]辯解の途に出づる事なく、唯平穩に又無頓着なれと、斯くの如き態度が稱揚せられ、又奬勵せられて居るので御座います、玆に述ぶる物語は恰も其例證に當るもので御坐います。

昔白隱禪師と申す坊さんがありましたが其[8]道心堅固の譽は[9]全國に行き渡り[10]いき佛と稱せられる位で御坐ゐました[11]から、[12]遠近相率ゐて其温容に接し其智敎を聽かんがために集り來

支へなく；頓着なくなどいふ意味を有するのである、此句には動詞を略する事が出來る。

4) 【馬耳東風】=英語には丁度こんな言葉はない、故に其意を譯して perfect indifference とか utter indifference とかいふより外に仕方がない、然し敢て何か物に譬へて此の意味を云い表す英語はないかと考ふるに not to care a straw; not to care a pin などいふ句が幾分か之に相當するかと思ふ。

5) 【毛頭苦慮しない】=not worry one's self at all. 苦慮する、心配するとの動詞は英語で to worry といふ、これは平易な言葉で

It is perhaps the result of hating of hypocrisy too intensely that there has *prevailed* in Japan a peculiar sort of morals, viz., *perfect indifference* to the opinion of the public.

One should *not worry one's self at all*, however ill one may be spoken of or misunderstood by the public, provided one is upright in one's heart and blameless in one's conduct. *Let conscience be your sole companion, and let the world alone.* Whatever it may say of you, *do not go out of your way to explain yourself*, but be calm and indifferent to it. Such an attitude has been approved and encouraged in Japan. As witness the following story.

Many years ago there lived a Buddhist priest named Hakuin Jenji, the fame of whose *piety* had *gone out through the land*; *so much so* that he was known as a living Buddha, *and* people came *from*

あるが日本の學生は多く之を用ゐず auxious といふ形容詞一天張でやらうとするから困難を感ずるのである、「毛頭」は not at all の外に not a bit; not a whit; not in the least 等の句がある。

6) 【良心をして其友たらしめよ、言ふものをして言はしめよ】=これは Let conscience be your sole companion, and let the world alone と譯したが今少しく之を簡單に譯すれば、Take conscience for your guide and ignore the world とすることが出來る。

りました。

此白隱は少しも[13]自己の聲譽に自負する事なく、卓然として世外に立ち心靜かに佛道を勤め、修法觀心に餘生を送つて居つた者で御座います。

玆に白隱の住んで居りました寺と同じ村に山田太郎と云ふ老いたる[14]水呑百姓が御座ゐましたが一人娘のぶと只二人暮しで、のぶは彼れの[15]掌中の珠で御座ひました、眼は深淵の水の如く、形容恰ら珠と流るゝ小河の岸になびく柳のなよやかなるが如くで御座ゐます。

偖て太郎は[16]兼てより心中に强壯な良善き息子を貰ひ受けて養子となし、[17]之れに娘を娶せ若夫婦の稼に助けられて、[18]安穩に晩年を送りたいと思つて居たので御座います。

---

7) 【辯解の途に出ることなく】=do not go out of your way to explain yourself. 此の文中にある go out of your way とは態々何々する、自分の仕て居る仕事を捨て置いて……すると云ふ意味で屢々用いらるゝ phrase である。

8) 【道心堅固】=Piety 又は godliness といふ、邦語では四字であるが英語では之を一字で表すことが出來る、然し phrase として書くには the odor of his sanctity; the beauty of his holiness といふのがある。

9) 【全國に行き渡る】=gone out through the land. これの類語と

far and near to gaze on his serene face and listen to his words of wisdom.

Now Hakuin was *far from being puffed up* by his reputation, but remained indifferent to the world, meekly performed his priestly duties, and spent the rest of his time in worship and meditation.

In the same village in which Hakuin's temple was situated lived *an old peasant* called Yamada Taro. He was a widower with one daughter Nobu, *who was his delight*, *with* eyes like deep pools of water, and a shape graceful as a willow tree bending over the edge of a crystal stream.

Now Taro *had it in his mind to* adopt as his son, a young man, strong and of good character, *give him his daughter in marriage* and thereafter *spend the evening of his life in quiet*, supported by the labour of the young couple.

しては far and wide; over the hills and far away (辻うら々々まで); from end to end; from pole to pole; to the utter most parts of the earth (地の端までも)等の phrase がある。

10) 【活き佛と稱せらるゝ位で】=此の「位」といふ意を so much so that と譯したが此の句の代りに so 又は therefore でも意味には異なる所はないのである。

11) 【から】=からとか、故にとかいふ言葉が日本語には澤山出て來るが英語にすると and でよい場合が澤山ある、此の and は何時も「そうして」といふ意味にあらず或時は therefore

然るに太郎が此心中をのぶに打明けますと彼はいつでも 19)「御父さま、も少しお待ちくださいませ、私は未だ婚禮する樣な用意を仕て居ません」と申します、太郎は可愛ゐ娘の事で御座ゐますから其云ふなりにして居りました、

所が或日太郎が相も變らぬ返事を促がして居りました時、太郎はジット娘を見詰めて居ましたが唯ならぬ態を見て20)戰慄を催ふしました。

「娘や何んと云ふ事じやお前は親の私に何か隱して居る事があるじやろう、全體御前が私を欺すといふ事があるものか」と申しました。

初めの程はのぶは何にも知らんで推通して居ましたが、太郎の21)嚴しき折檻によつて、「終に御父さまもー何も彼も申上げます、私は22)猥らな事を致しましてお腹には子供が宿つて居ります、ドーゾ御許しなさつてくだされませ」と自白に及びました。

或時は but の代用をなすのである。

12) 【遠近相率ゐて】=from far and near 又は from all places 又は此の二ツを一つにして from all places, far and near ともいふ。

13) 【自己の聲譽に自負することなく】=far from being puffed up by his reputation. puffed up は氣ざる、得意がるの意、此の句を言換へれば reputation を subject として His great reputation did not have the effect of maknig him conceited とすることが出來る。

When however he opened the subject to Nobu she always said, "*O honourable father, deign to wait* a little longer. I am not yet ready to enter into marriage"; and as Taro loved his daughter he consented.

But one day when he received the usual reply, he gazed upon his child, and noticed an alteration that *made a cold shiver run down his back.*

"O daughter," said he, "what is this? You are concealing something from me your parent; can it be that I am deceived in you?

At first Nobu denied all; but Taro *pressed her hard*, and finally she made the confession, "O honourable Father, I confess everything. *I have fallen from virtue* and bear under my heart an unborn babe. I crave your august pardon."

---

14) 【水呑百姓】=a poor farmer の意なれど an old peasant といふても同意義を表すのである、英語の old は所によりて色々の意味を含んで居る、必ずしも年老いたるといふ意味でなく、或時は親しい、或時は巧みな、或時は古臭い、或は貧乏たらしいなどの意を表すことがある。

15) 【掌中の珠】=此の意を譯して she was his delight としたのである、珠といふ形容を敢て英文にうつそうとせば she was his treasure としても可い、井上氏は「掌中の玉と愛し育て

「誰れがコンナ事をしたのだ」と太郎は怒鳴りました。

娘は[23]涙ながら「白隱禪師さまが相手で御座ゐます」と申しました。

太郎はこれを聞ゐて[24]膽をつぶしました、初めは之れを信じませなんだが、のぶは徹頭徹尾夫れに相違ありませんと云ひ張るもので御座ゐますから、[25]心中には不審に思ひながらも左うであったかと首肯(うなず)ゐて娘を去らしめました、のぶは頭を疊に摺り附け詫びて退きました、太郎は[26]獨り思案にくれ塞ぎ切つて仕舞ゐました。

「アードウしたものか知らん、ドーして此老後を送ろう、白隱禪師では養子にも來られまい、又年老つた私の爲めに捧ゐて暮れると云ふ事も出來まい、全體アノ名僧が娘の戀人であると云ふのが本當だろうか、マー兎に角禪師の所へ往つて御目にかゝりませう」と自語して居りました。

た」を He loved and fostered him as the apple of his eye と譯して居る、the apple of the eye は眼の瞳子(ヒトミ)であるから大切なるものといふ意味になる、故に掌中の珠に當る。

16) 【兼てより……したいと思つて居りました】=had it in mind to ..... 此の it は to 以下のことを指す、日本語では「兼てより」といひ出して其次に長々と事柄をはさみ、終りに「したいと思ふ」と云へど英文では初に「兼てより云々の全句を冒頭に云ふて仕舞ふのである。

"Who has done this thing?" cried Taro.

"Hakuin Jenji is my lover," replied the daughter *amid a flood of tears.*

Taro was *thunderstruck* at this news and at first refused to believe it, but Nobu persisted in her statement, until at last, *although in his heart incredulous*, he accepted it, and dismissed his daughter. Bowing her head upon the mats she withdrew, and Taro *was left to* his own thoughts, which were sufficiently gloomy.

"What shall I do?" said he to himself, "how will my old age be supported? Hakuin Jenji cannot come to my house and work for me in the evening of my days. Can it after all be true that this honourable priest is my daughter's lover? I will at any rate go and see him."

---

17) 【之に娘を娶せ】=give him his daughter in marriage. 又は marry him to his daughter ともいへる。

18) 【安穩に晩年を送る】=spend the evening of his life in quiet. 安穩には at ease ともいふ、晩年は one's last days とも one's old age とも one's later days ともいふ。

19) 【御父さま……くだされませ】=O honourable father, deign to ……、「御父樣を」 honourable father と譯したから「くだされませ」を殊更叮嚀に deign to と譯したのである、deign to

斯う考へながら起ち上り、杖を取りてお寺の山指して上ツて參りました、衝當りは大門になつて居る長くして眞直なる苔蒸す石の階段を登りながら斯樣な事柄で善知識の白隱禪師にお目にかゝりに行くのかと思へば [27]恐怖(おそ ゴ)ゝして心は進みませんが、併し[28]此頼る邊なき老年の我身の上を思へばまゝよと云ふ氣になつて進んで參りました。

大門を潜つて廣庭を横切り何時(いつも)の樣に其所に蜒々として蟠屈する松の木振を賞玩しながら休みもせず、下駄脱ぎ棄てゝ踏み段を上り、凄冷陰濕にして香の香匂ふ方丈に參つて[29]禪師に取次を乞ひました。

太郎は直に許されて禪師の御前に出でゝ鄭寧に低頭致しまして扨申出づる樣

は賜はれとの意にて、「耳を傾け賜はれ」は Deign to listen to me といふ。

20) 【戰慄を催ふした】=made a cold water run down his back. 此の英語は背中に水を掛けられた樣に感ずるといふ意味で戰慄といふ意を表はすによく用ゆるのである、簡單に一言で表はさうと思へば He shuddered である。

21) 【嚴しき折檻】=折檻といふ字は正確にいへば chatisement 或は reproof であるが此所にいふ嚴しき折檻は嚴しき詰議の意味であるから pressed her hard と譯したのである。

With these thoughts he rose from the mats, took his staff and set out to climb the hill on which stood the temple. As he was ascending the long straight flight of moss-eaten grey stone steps which led up to the great gate, *his heart almost stood still with fear* at the idea of approaching the saintly Hakuin on such a matter; but *the thought of* his helpless old age gave him a little courage and he pushed on.

Passing through the great gate, he crossed the court-yard, without pausing, as he usually did, to admire the gnarled and twisted pines that grew there, and slipping off his clogs, ascended the steps into the cool, dim, and incense-laden temple, where he *asked to see* Hakuin Jenji.

He was at once admitted to the presence of the priest, and, humbly prostrating himself before him, the old peasant began.

---

22) 【猥らなことをして】=「猥らな」は immoral; indecent, 「こと」は thing; conduct, 「して」は doing; performing であると一々辭書で用語を引き出し之を並べて文を作るのが初學者の常に爲す所であつて、之は甚だ宜しくない、斯る和文英譯法は丸で幼稚園の子供が寄せ木を並べて家の形を作る樣なもので、作文の能力を練磨する上には何の効もないのである、文章を作る時止むを得ざる外は字書に依頼せぬがよい、此の本文の如き「猥らなことをして」を譯せんとする時再三之を讀み又前後の關係をも考へ、原文にある言葉

「お上人さま私は少し御相談申上度儀が御座ゐまして參りましたので御座ゐます、實は[30]誠に申上ぐるも憚る次第で御座ゐますが申上げぬ譯にも參りませぬので。御聞きくださいませ[31]他でも御座ゐませんが、私の娘は密男を作へまして[32]最早身重になつて居るので御座ゐます、段々相手を問質しました所、娘め最初は返事も致しませんでしたが嚴しく折檻に及びましたら、お上人様相手は貴僧じやと白狀に及びました、私は貴僧に申上げて置きますが何を隱しませう私は貧しき水呑百姓で彼は私の一人娘で御座ゐます、兼々良ゐ若者を養子にして彼れめを娶せ、私は若夫婦の世話になつて餘命を安穩に送りたいと願ふて居つたので御座います、然るに今コーなりましては[33]私の願も空頼みになつて仕舞ひ、私は丸で頼なき身となり、如何してよろしいやら分りません、御上人様ドウゾ御察

などは少しも使はないでも其意味をよく表す樣な譯文を案出せねばならぬ、I have fallen from virtue は「猥らなことをして」といふ意味を遺憾なく表はして居るが、原文の言葉は一言半句も用ゐずに出來て居るではないか。

23) 【涙ながら】=これは普通 in tears といふ、然し茲では少し形容の辭を用ゐて强く云はんが爲め amid a flood of tears と書いた。

24) 【膽をつぶしました】=He was thunderstruck at. 膽をつぶすとは非常に驚くとの意味で此の言葉は英語では幾通りにも云ひ表はし樣がある. to be amazed; to be surprised; taken aback; taken by surprise; struck dumb; to be flabbergasted; not to know whether one stands on one's head or one's heels, 等殆んど無數である。

"O Father, I have come to consult you about something. *It is such a delicate matter* that I hardly like to mention it to you, but necessity compels me to do so. *The truth is*, O reverend father, that my daughter has without my knowledge been receiving a lover, and *now carries in her womb* an unborn babe. In reply to my enquiries as to who her lover was, my daughter at first refused to make any answer; but when I severely cross-examined her, she confessed that you, O father, were the man. I must humbly beg to inform you that I am a poor peasant and she is my only daughter. I thought I would adopt a good young man and marry him to my child so that I could depend on the young couple for my livelihood and spend the rest of my days at ease; *but now, you see, I cannot carry*

25) 【心中には不審に思ひながらも】=although in his heart incredulous. although の次に he was を入れ其次に incredulous を措き終に his heart といふ順序にせば日本語の原文を忠實に譯したことゝなるかも知れぬが、そうすると文が冗長になつて勢が弱くなる、文章は簡潔なほど强くなる、例へば

しくださいませ、就ては金錢の御合力を御願ひ申上げたいので、[34]斯樣な事でもお願申上ねば何の樣な不幸に沈む身の上か分らぬので御座います。

[35]話の間に白隱禪師は驚いたと云ふ樣な影も、耻かしいと云ふやうな色もせずして、其顏貌(かぼつき)は尙夏の海の靜かなるが如く靜かでありましたが、今此百姓が[36]語り終ると、唯「よしよし幾許(いくら)欲しいのじや」と云ひました。

太郎は「ハイ參百兩頂戴仕りたいので御座います」と答へますと、禪師も「よしよし」と答へて財布を取出して、夫れだけを渡しましたが、當時に於ては中々の大金で御座います。

太郎は金を受取ながら驚愕(おどろき)の體で御前を退(さ)がりました、娘の白狀は兎に角として太郎は決して禪師が娘の相手だとは信じて居ませなんだが、今禪師が「よしよし」と云つて[37]何も彼も云ふ所を承認し且つ早速大金さへも渡されたのを見て[38]疑ふ餘

Disobedient, the child fears the parent's disapproval. といふ文章の如き Disobedient てふ一字を以て彼は親に背き惡事をしたのといふ意味を表はして居る之をくだくだしく As he was disobedient to his parent と書けば力が甚だしく弱くなり從つて文が拙なくなる、それを一言に約して Disobedient と comma とを以て之を云ひ表はせば力ある文章となるのである。

26) 【獨り思案にくれ】=「獨り」を無理に alone とか all alone とか言うとすると甘く譯することが出來ない、之を He was

out this plan. I am quite helpless and know not what to do. Pity me, Father, and condescend to grant me some pecuniary help ; *otherwise I know not into what pit I may sink.*"

During this *recital* Hakuin Jenji showed no signs of surprise or shame, and his countenance remained as tranquil as a summer sea. When the peasant *made an end of* speaking, the Priest merely said, "Yes, yes, how much do you require?"

"Well," answered Taro, "I should like 300 *ryo*."

"Yes, yes" replied Jenji, and taking out his purse, he handed over the sum, by no means a small amount in those days.

Taro, receiving the money, withdrew in a dazed condition. Notwithstanding his daughter's confession, he had never really believed that Hakuin was the man ; but *when he saw the priest seemingly accept all he said to him*, replying only "yes, yes," and

left to his own thought と云へば此の left の中に「獨り」の意味が充分表はれるのである。

27) 【恐怖(おそ)々々して心は進みません】=his heart almost stood still with fear. これはこうもいふことが出來る, his heart was in his mouth.

28) 【此賴る邊なき老年の我身の上を思へば】=日本語では「思へば」といふ動詞を使ふが英語では之を名詞にかへて the thought of..... とした方がよい、他の文例を上げれば英語で *The thought* of the quiet humdrum life we are to lead for

地がなくなり、[39]今度は此聖者に對して大立腹を初めました。

[40]「アー聖者なんぞと聞て呆れる、[41]これ迄イツも僞善の假面を被むつて居つたのに世間では彼れを敬ひ活佛なぞと云つて居るが、己れが其化の皮をヒツパイで遣る、虛言者めが、欺騙者めが、アヽ結構なお上人樣じやと呟きながら家に歸つて參りました、併し思ひ返してモー此事に就ては何も言はんことと決め、受取つた參百兩で滿足いたしました、ソコデ太郎は右の參百兩を庭に埋めて[42]之れを秘して置きました。

[43]いつしか時過ぎて、其後三月計經て後太郎はのぶと話して居りました時彼は白隱禪師に遇つて參百兩を引奪つたと云ふ事を娘が氣付く樣な[44]言葉を漏らしました。

其場では娘は何も申しませなんだが、自分の部屋に歸つて[45]內密の獨語に「アヽ自分は惡いこと

the next two months makes me feel very sad といふ文がある、之を日本語に譯せば「今から二ケ月の間淋びしい退屈な日を送らねばならぬと思へば、ほんとに悲しくなる」といふのである。

29) 【禪師に取次を乞いました】=初學者が之を譯さうとすると asked to let him know that I want to have an interview with him などとかくであらうがこれは唯 asked to see Hakuin Jenji でよいのである、或は He asked to be shown to としても可い。

moreover without hesitation hand over a large sum of money, *doubt vanished, and in its place* came hot anger against the holy man.

He went home murmuring, "*Oh, here is a fine holy man*! the people look up to him and call him a living Buddha when *all the time* he wears a mask of hypocricy; but I will tear it off, he is a fraud, an impostor. A fine holy man indeed!." On reflection, however, he decided to say nothing about it, and be contented with the three hundred *ryo* he had received. He therefore buried the money in his garden and *kept his own council.*

So time went on. Some three months afterwards in conversation with Nobu *he let fall some words* by which she understood that he had seen Hakuin Jenji, and extorted 300 *ryo* from him.

At the time she said nothing, but *in the privacy of hre room she communed with herself* "Alas, I

30) 【誠に申上げるも憚る次第で御坐いますが】=It is such a delicate matter that I hardly like to mention it to you. 言いにくい事、言ふを憚ること、ツィ下手に言へば人の感情を害する恐あること、耻かしくて言ふことを躊躇すること、此等は皆英語で delicate matter といふ、delicate の一字を辭書に依りて調べて見ると以上いふ如き意味の適譯が上げてない樣であるが凡て金錢上のこと、品行上のこと、人の心に立入つた事柄などは皆この delicate なる字を以て表すのである。

をした、餘り父に責められたものだから白隱禪師が相手であると云つたが、彼(あ)れはお父さまが[46]ヨモヤ禪師の許へは行かれまいと思つたから虚言(うそ)を云つて置たので、本當の密男(をとこ)は村の若衆(わかいしゆ)なんだ、ドウしたら善いかしらん、白隱さまに[47]濡衣を着せておいては[48]彼の世に行つた時にドンナ恐い罰が當ろうかも知れぬ」と云つて居りました。

斯くてのぶは獨り思案に呉れて居りましたが、終に父の前に參り[49]一伍一什を白狀し、嚴かに前には詐を申して居りましたと申して密男(をとこ)の名をも申出ました。

太郎は驚いた「禪師が相手だなどゝ信じたのは私の早計であつた、併し何せ彼の人は自分が潔白な身なれば彼の事件を話した時に、左うと云はなかつたであろうか、トント私には分らぬ、が併し

31) 【他でも御座りませんが】=これは「實は」といふてもよい處であるから the truth is と譯したのである。

32) 【最早身重になつて居るので御座ゐまして】=now carries in her womb an unborn child. 普通の場合、あの婦人は身重であるといふには She is in an interesting condition とか She is in the family way などいふ、交際場裡に於て話する時 She is pregnant だの She has conceived だのいふことは謹んで避くべきである。

33) 【私の願も空頼みになつて仕舞つた】=but now, you see, I can

have done a great wrong. When, urged by my father, I said that Hakuin Jenji was my lover, I spoke that which is not true, thinking that my father *would never dare* to go to Jenji. My real lover is a young man in the village. What shall I do? If I allow the honourable Hakuin *Sama* to go on *wearing the wet clothes of a false accusation*, I know not what terrible punishment may fall upon me *when I change my world*"

Thus she tormented herself, until at last she went to her father and *confessed the whole truth*, solemnly declaring that she had told a lie before, and naming her real lover.

Taro was struck with wonder. "I have indeed been hasty," said he to himself, "in believing that Hakuin was the man, but why, if he were innocent, did he not say so when I spoke to him about the

not carry out this plan. 空頼みとは a vain hope といふのであるから此の言葉を用ゐて this is now a vain hope と譯しても可い。

34) 【斯樣なことでも御願申さねば何の樣な不憫に沈む身の上か分らぬので御座います】=otherwise (左もなくば)の一字にて「斯樣なことでも願はねば」の一句を云い表はすのである、或は otherwise の代りに or else といふも差支ない、「どんな不憫に沈む身の上か分らぬ」は I know not into what pit I may sink である、尙ほ之を云い換ゆれば I know

村に行つて若者に遇ひのぶの言譯の眞僞を質さう」と自語しながら若者の家へと志して參りました、幸ひ家に居りましたので其罪を責めました所、若者は云ひ解く由もなく、自分こそ眞實にのぶの胎内の子供の親である由を白狀致しました。

此自白を聽きました太郎は急ぎ己が家に歸り、彼の三百兩を掘出し之を携えて白隱禪師に御目に掛らんものと再び御寺に向ひました、早速通されて聖者の前に導びかれました、で禪師の前に額附きて太郎は口を切りました。

「勿體ない禪師さま私は御詫に參りまして御座います、娘めが只今眞實のことを白狀致しましたので、先頃御目にかゝりました節禪師樣に申上ま

not to what depths I may fall.

35) 【話の間に】=此の話とは對話といふでなく、一人でペチャペチャ饒舌つた話であるから recital (誦述) といふ語を使い During this recital としたのである。

36) 【語り終る】=made an end of speaking. これは他動詞であるが之を自動詞にせば to come to an end とせねばならぬ。

37) 【何も蚊も云ふ所を承認する樣であるのを見て】=When he saw the priest *seemingly* accept all he said to him. 「樣である」を seemed, looked などゝ譯するより之を副詞にかへて seemingly とする方が巧みな譯しかたである。

matter. I cannot in any way understand this, but I will visit the young man in the village and make enquiries as to the truth of Nobu's statement." With these words he set out for the young man's house, and finding him within, taxed him with the crime. The lad could not deny the truth and confessed that he was indeed the father of Nobu's unborn child.

On hearing this confession, Taro hastened back to his own house, dug up the 300 *ryo*, and started once more for the temple to beg an interview with Hakuin Jenji. His request was granted, and he was ushered into the presence of the holy man. Falling down on his face before him, he began:

"O most holy and reverend Hakuin Sama, I come to make humble apology. My daughter has but now confessed the whole truth, and I find that you

38) 【疑ふ餘地がなくなり】=英語にも之と同じ文句がある、即ち There is no room for doubt である、然しこゝでは次の文句との關係上 doubt vanished (疑は消へ失せて) と譯したのである、

39) 【今度は】=これも and now といふべきであるが前句に doubt vanished といふたから、疑はなくなり今は其れに代へてといふ意味にて and now in its place としたのである。

した事件に就ては禪師様は何の御關係もない事を承知いたしました、娘の初めの話は詐りで御座いまして、眞の密男と申しまするは村の若者で御座いました、私は飛んでもない事を禪師様に申上げました、禪師さま何んとも御詫の申上様も御座いません、貴僧より頂戴いたしました三百兩を只今御返納申上ますから何卒御容赦を願ひます。

白隱は前の様に亦無頓着に唯「よしよし」と云つて金を受取り、後は話を餘事に替へられましたから、暫らくして太郎は 50)平身低頭して退出致しました、今度の歸りには彼の胸中は前の時と大違ひで「ア、如何にも聖らかな御方じや、活佛じや、禪師様に對しては 50)世間の讒謗などは浮雲の様なものじや、只御自分で眞とさへ思召さば御滿足に居らせられる、假如ひ眞が現はれる前に御亡くなりなさつても御自分の御心が潔白無碍であらせられるから大往生を御遂げなさる方じや」と心中

40) 【ア一聖者なんぞと聞て呆れる】=Oh, here is a fine holy man. 此の種の英文は sarcasm と稱し、文字の反對の意味を表すのである、Oh, he is not a holy man といふよりは遙かに强い言い方にて日本語の呆れるといふ位の力を有するのである。

41) 【これまで何時も】=此の「何時も」はズート續いてとの意であるから all the time と譯す。

42) 【之を秘して居りました】=kept his own council. 秘するといふことは keep secret ともいふ。

had nothing to do with the matter of which I spoke to you at our last interview. Her first story was a lie; her real lover is a young fellow in the village. I have made a false charge against you. O reverend father, I do not know how to apologize sufficiently. I now return you the 300 *ryo* you granted me, and humbly pray for your forgiveness." Hakuin Jenji looked unconcerned as ever, and accepted the money, only saying "Yes, yes." He then changed the conversation to other subjects and after a while Taro *retired with a humble obeisance.* Very different were his thoughts this time. "O," said he to himself, "here indeed is a holy man, a living Buddha, to whom *the slanders of the world are only as a passing wind*, who is content to be at one with truth, who, even if he should die before the truth be known, is perfectly at peace because his conscience is clear

43) 【いつしか時過ぎて】=So time went on. 日本語では文がまだ終つて居らぬ言ひ方であるが英語ではこゝを comma にせず period にして切つて仕舞ふ方がよい、「いつしか」とは曖昧な言葉であるから英語でも同じく曖昧な so といふ字を以て之に當てたのである。

44) 【言葉を漏らした】=he let fall some words. 「漏らす」は let fall. 圖らずも意中を漏らすといふ時には to betray を用ゐ、暗々裡に漏らすといふ時には to intimate を用ゆるのである。

に尊びながら家路を辿りました。

何んと[52]結構な物語では御座いませんか、由來有德の人は虛構の讒誣に對して自家を辯護したり、法律に訴えて是非を判じやう等の考へを起す樣な卑劣なものでは御座いません、彼等は事苟も己れに關する場合に此世の法廷に於て黑白を決せんとする樣なことは甚だ面白からず思ふのみならず、自からを卑しむるものであるとして居るので御座いますから、自分さへ瑕瑾(きず)なしと思へば世評の如きは意に介せないので御座います、恰も白隱の如く事の眞相はいつか世に現はれ出づるものだと信じて全く無頓着に過ごすので御座います。

「德孤ならず必らず隣あり」と云ふ諺がありますが金言で御座います、眞實、正直、潔白に自からを持せば、世間の[53]具眼者は遲いか早いか必らず認識(と)る日が御座います、假令ひ最後迄誤解せられ

45) 【內密の獨語に】=in the privacy of her room she communed with herself. 此の commune といふ字句は交る、交通する、といふ字であるから自分と交るとは獨語するの意である。

46) 【ナモヤ……すまい】=これは英語で would never dare の句を以て表はす。

47) 【濡衣を着せる】=wearing the wet clothes of a false accusation. 濡衣を着るとは實に面白い言葉であるから何とか之を英譯して見たいと思ひ wearing the wet clothes として見

and untroubled." Thus communing with himself he wended his way home.

What *a singular story* this is! In Japan, a virtuous man is too proud to explain himself when falsely accused, and never thinks of appealing to the law. He thinks it a disgrace, nay, a self-degradation to take his own case in any circumstances and upon any pretext before the judgment seat of this world. If he is spotless, he does not care what the world says of him. Like Hakuin, he would be perfectly indifferent to it, trusting that the truth would sometime be made known.

There is much truth in the old proverb, "A virtuous man is not friendless." If a man be true, sincere, and upright, *those who have the seeing eye* will recognize him sooner or later. Even though you

たのである、然し日本人なら濡衣を着ると云へば直ちに寃罪を蒙むるといふことが解るが、英米人の間には元來 wet clothes を寃罪といふ意味に用ゐたことがないのだから斯くいふた丈では解らない、其故に of a false accusation の一句を附加したのである、これなら西洋人に其意味が解つて且つ面白い感事を與へるであらうと思ふ。

48) 【彼の世に行つた時に】=when I change my world 又は when I go to the other world.

49) 【一伍一件を白狀す】=confessed the whole truth, 又は told

又誹謗を極められても、決して憂ふべきことでは御座いません、我は眞理と偕なりと思つて、泰然として世評を空吹く風と聞流せよと云ふのが我聖賢の敎ゆる所で御坐います。

「此の講談の英譯は曾て予がメドリー氏に口述し氏が之を筆記せられたるものなるが面白ければ玆に掲ぐることゝした」

---

him the full story of her sin とも云へる、又は told him the whole circumstance.

50) 【平身低頭して退出いたしました】=retired with a humble obeisance. 今少し詳し譯すれば he took leave, prostrating himself and making a most humble bow.

51) 【世間の讒謗には馬耳東風】=馬耳東風の意は quite indifferent 又は utterly indifferent であるが、何か馬耳東風に似よりの言葉を以て云い現はして見たいと思ひ the slanders of the

should be misunderstood till the end, and be slandered bitterly, never worry yourself. Be content with being at one with Truth, and consider the rumours of the world as if they were only the passing wind. So teach the oriental sages.

slandered bitterly, never worry yourself

---

world are as a passing wind としたのである。

52) 【結構な物語】=a singular story. 結構を singular と譯するのは不穩當である樣だが此所でいふ結構といふのは實に善い美くしいといふ計りでなく、珍らしいよい話との意味が含んで居るから特に singular の字を用いたのである。

53) 【具眼者】=those who have the seeing eye. 餘り直譯的の樣に、思ふ人があるかも知れぬが、目あきのことを seeing eye といふから具眼者を斯く譯して差支ないのである。

第三章

俠客

幡隨院長兵衛

前廉俠客又は男達と申して一種異樣の徒輩が御座いました、此徒輩が[1]一種の團體を結ぶに到りましたのは、德川三代將軍の時代で御座いました、其以前とても左樣な型の人間は間々通常人の內にもありましたが、團體として大に[2]世間に幅をきかす樣になつたのは、夫れ以後のことで御座います。

扨當時何云ふ事情で斯樣な團體が出來たかと申すと、大名、侍等當時上流社會をなして居つた輩が實際自分達も[3]其元を質せば下々より起つた者

1) 【一種の團體を結びました】=they organized themselves into a sort of guild. 團體は party ともいひ body ともいひ union とも云ひ corporation ともいふ場合がある、然し此所では「一種の團體」を a sort of guild と譯した、此の guild は勞働者等の組合を意味するので俠客なるものが政治家でもなく學者でもなく、まづどちらかと云へば勞働者仲間に屬する人々であるから彼等の團體を guild といふのは適當である、然し西洋にある guild と全然同じものでない、故に

CHAPTER III

Banzuiin Chōbei, a Friend of the Weak.

SOME time ago a peculiar and unique company of men appeared in Japanese society under the name of *Kyōkaku*, or *Otokodate*. It was in the reign of the 3rd Tokugawa Shōgun that *they organized themselves into a sort of guild*, and they have been *a great social power* ever since, although men of their type as individuals have always existed among the people.

To understand the social conditions which brought about the organization of these men, one must remember that men of the upper classes of the time,

a sort of (一種の) guild としたのである、「結ぶ」は to organize; to form; to make up 等の動詞を以て表はす。

2) 【世間に幅をきかす】=a great social power. 「世間に」を social の形容詞で表はし「幅をきかす」を a great power で云ひ表はしたのである、幅をきかすは名詞でいふ時は influence; weight 動詞でいふ時は to have influence; to sway; to overbear 等、熟語を用ゐる時は to be in the

が澤山あつたに拘はらず[4]概ね肩で風切る勢を示し、下々を虐げて居ましたからサテコソ斯樣な團體が出來たので御座ゐます。

左うで御座ゐませう、豐臣大閤は百性の子で、[5]武勇拔群の爲めに鬼上官の名を得た加藤清正は鍛冶屋の息子、關ヶ原の戰に第一の勇者と稱へられた福島正則は桶屋の息子、西軍の大將石田三成は百姓の息子、別將小西行長は藥屋の息子、と云ふ樣な譯で御座いました。

然るに彼等が侍になり大名になり上ると、[6]直に昔の事は忘れて仕舞つて下々を[7]見下す樣になり、德川氏の代となつて此士分の態度が[8]驕慢非道を極むるに至りました、特に旗本に至つては

ascendant といふ。

3) 【其元を質せば】=元とは family; lineage; origin; 質すは to examine; to investigate; to look into であるから if we examine their lineage といふてもよいのであるが意譯して by birth (生れは)としたのである。

4) 【肩で風を切る勢】=簡單に haughty の一字で示したが此の面白い形容の文句が英語にないかと調べて見るに隨分多くある、例へば to look big ともいひ to toss the head ともいひ to hold up one's head ともいひ to give one's self airs ともいひ to kick up a dust ともいひ、又 to ride the high horse ともいふ、此の終りの二句などは肩で風を切るといふ日本語にまづ近い言葉である。

5) 【武勇拔群】=extraordinary courage, 又は surpassing valour ともいふ。

6) 【直に昔の事は忘れて仕舞ふ】=日本語で何々すると直にといふ所には The moment ..... 又は Once..... といひ、文章

such as *daimyos* or *samurai*, were in general *haughty*, oppressive, and sometimes cruel to their inferiors, in spite of the fact that they themselves in many cases were *by birth* men of the inferior classes.

Toyotomi Taikō, for instance, was a peasant's son; Katō Kiyomasa, who was given the nickname of *Oni-Shōgun* (fiendish Shōgun) because of his *extraordinary courage*, the son of a blacksmith; Fukushima Masanori, who is said to have been the bravest warrior in the battle of Sekigahara, the son of a cooper; Ishida Mitsunari, commander-in-chief of the enemy in the same battle, the son of a farmer; and Konishi Yukinaga, another general in the enemy's army, the son of a druggist.

But the moment such men rose to the position of *daimyo* or *samurai* they forgot *their past state of life and looked down upon* men of the lower classes. During Tokugawa régime, the attitude of *samurai*

9) 人民を待つこと不條理、非人情を極め10)「花は櫻木人は武士」と申して自分等は他の人民より優つた高等なもので、武士にあらざるものは人でないと心得て居りました。

ソコデ百姓町人の中でも 11)苟も氣慨あるものは奮慨して武家や役人に對して反抗の態度を持して「大名が何んだ」「侍がなんだ」今でこそ彼の樣に大風に威張つて歩ゐて居るが、ツイ近頃迄は俺達と同じ仲間であつたのじやないか、12)又同し人間じやないか、彼方(あつち)が神樣で此方が獸じやあるまいし 13)王侯將相豈 種あらんやだ14)達ふ所は先方等に善ゐ運があつて乘出したのと此方にソー云

の冒頭に此の言葉を置くのである、「昔の事」は直譯して past things だの ancient affairs だの譯しては意味が解らない、こゝで昔の事とは昔の身分のことをいふのであるから their past state of life と明瞭に譯さねばならぬ。

7) 【見下す】=looked down upon. 注意すべきは upon の字で look down の次に必らず此の字がなければならぬ、見下すといふことを一言で云ふには to despise, contemn, scorn 等の言葉が適當である。

towards farmers, artisans, and merchants was *extremely haughty and overbearing*. The officials of the *Shōgunate* government especially used to treat such *unarmed people* unreasonably and inhumanly. They regarded themselves as superior beings compared with the rest of the people, as is expressed in a well known proverb: "*Samurai are above other men, as the cherry blossom is above other flowers.*" It was thought that unless one was a *samurai*, one was not a man.

Therefore farmers and merchants *who had any pride or independent spirit at all*, were deeply offended, and assumed an attitude of antagonism towards *samurai* and the other ruling classes of the country. They said to themselves: "What are *daimyos?* What are *samūrai*? Though they are proud and swagger about in so disgusting a manner, they were only till yesterday the same as we are. And *besides*,

8) 【驕慢非道を極む】=これも文法に拘泥して、驕慢非道といふ名詞は何といふ、極むといふ動詞は何といふと考へると中々困難である、然し文法に構ひなく驕慢非道といふ名詞を形容詞にかへて haughty and overbearing となし、極むといふ動詞を副詞に變じて extremely といへば樂に飜譯が出來るのである。

9) 【人民】=こゝにいふ人民は下々の者をいふので大名や侍と異なり大小も帶びない人々である故に之を unarmed people

ふ運がなかつただけのことだ、ソレに「四海兄弟」と云ふ古語を忘れて斯く慘酷、非道に弱い者慘めをすると云ふことは[15]人外の沙汰だ、ヨシ先方がソーあれば當方も亦ソーなくてはならぬと揚言して居つたが之れが當時の上流社會に反抗して立つた[16]氣骨ある輩の絶叫で御座いました、そこで終に此輩が團結して俠客組或は男伊達と稱する者を作り出したので御座ます。

ソコデ俠客第一の意氣は非道厚顏の武士や[17]お上の威光を笠に着て下を虐ぐる役人共の[18]鼻先を挫くと云のでありましたが其主要の主義は弱

と譯したのである。

10) 【花は櫻人は武士】=斯る簡潔にして意味ある諺などは外國語に譯出すること甚だ困難である、餘り簡なれば意味が分らず、意味を明らかに示そうとすれば文章に力がなくなる、此邊に注意して花は櫻人は武士を譯すれば Samurai are above other men, as the cherry blossom is above other flowers となる。

are they not made of the same stuff as we are? Are they gods, and we beasts? Kings, nobles, generals, and all men of rank *are not men of different clay. All the difference there is* between them and fellows of our class is that they have had the good luck to push themselves to the front, while we haven't. Have they forgotton the old doctrine that all men are brethren? *It is indeed an outrage on humanity for* them to treat us, the weak and poor, so severely and cruelly. If such be their attitude towards us, we ought to take a similar attitude towards them." Such was the cry of indignation on the part of those people who had the *grit* to stand up against their superiors, and they at last organized themselves into a union called *Kyōkaku or Otokodate*.

The first intention of the *Kyōkaku* was *to break the power of* rude and brazen-faced *samurai*, or of those who oppressed the lower classes, *putting on them-*

11) 【苟も氣概ある者】=those who had any pride or independent spirit at all. 苟もは at all, 氣概は pride と譯したが、尙ほ其精神を說明する積りで or independent spirit を附加したのである、氣概なる言葉は普通 an unyielding temper; firmness of purpose; a firm mind などと譯せられて居るが玆では寧ろ之を pride と譯する方がよい。

12) 【又同じ人間じやないか】=Besides, are they not made of the

きを助けて强きを挫くと云ふので御座いますから穴勝非道の侍にのみ當ると云ふばかりでなく一般に弱者[19]の味方をして非道の人間に反抗すると云ふのでありました、ソーして此義俠者中の大にして又最も有名なる者は玆に其が傳を述べんとする幡隨院長兵衛で御座います。

幡隨院長兵衛は肥前唐津の藩士の息子で、元と侍の出で御座いました、其父は至つて正直律義な人で嘗て往々[20]同僚の間に行はれて居た樣な惡事醜行をなしたと云ふ樣なことなきのみならず、若し同僚中に於て左樣な不埒なことが行はれんとするのを見た場合には常に之を諫止して居つたので御座いますが、[21]諫言耳に逆ひ惡人共に忌み嫌はれて、果ては財なく家なき身に落魄れて仕舞ひ、據ろなく江戸に參り貧乏長屋に假住居を致して居

same stuff as we are? stuff は材料、又は質の意、故に此の譯文は彼等も我等も同質の者で作られて居るではないか即ち同じ人間じやないかとの意味になるのである。

13) 【王侯將相豈種あらんや】=是れ亦譯し難い文句である、Kings, nobles.....are not men of different clay. 此の clay は粘土、時には人體の意を有す、之を以て邦語の種の字に當てたのである、英語て種を seed(種子)といひ又た breed(產種)といふけれども本文の如き處には餘り面白くない、「豈に

selves like a hat the authority of the government. But as the chief principle of their conduct was the idea of helping the weak and crushing the strong, they did not confine their activities within the limits of their first intention, but *took the side of the weak and helpless in general*, and made a stand against men of cruelty. The first champion and the most celebrated one of these heroic men was Banzuiin Chōbei, and the following is a short sketch of his life.

Banzuiin Chōbei was originally the son of a *samurai*, who lived in Karatsu in the province of Hizen. His father was an extremely honest and conscientious man. *He had never participated in any of the wrong or dishonest practices of his colleagues*, and every time he happened to observe any such behavior on the part of his friends, he advised them to stop it. *Thus* he was hated and slandered by some of those bad men, and at length became penniless and home-

種あらんや」are not men of different clay の方がよく意味を表はすのである。

14) 【違ふ所は】=the difference in でもよいが强く言ひ表はすには all the diffirence there is といふのである。

15) 【人外の沙汰だ】=It is indeed an ou rage on humanity. 此の英文は實に人道を無視したる暴行であるとの意である、今少しく約言すれば it is really outrageous 又は it is really intolerable といふても可い。

りましたが、間もなく當時十一歳になる伊太郎と云ふ子供を遺して死ました、處が外に此子供を見繼でやる者も御座ゐませんから大家(おほや)が之れを引取り養育することになりました。

丁度其頃 [22]誰れとも知らず路傍に大きな立札をしたものが御座ゐましたが、見ると其面に盲目按摩が[23]往來の穴に足を踏み込んで困ッて居る繪が張り附て御座ゐました、スルト大勢の見物が其周圍に群がッて來て眺めて居りましたが、[24]誰れとて其意味の分る者がない、時に當年取ッて十二歳の伊太郎が群集を押分けて出て參りまして「御前さん達は此譯が分らないのか、[25]之れはお上を惡口したのだよ、上の方が盲目で下の方が困ると云ふ譯だよ」と申しましたから、之れを聞いた群集は皆其才智を驚嘆して居りましたが、伊太郎は

16) 【氣骨ある人々】=those who had the grit to ..... 此の grit は剛毅の意、此の言葉にかへて the back bone (脊骨)の字を用ゐても差支ない。

17) 【御上の威光を笠に着て】=putting on themselves like a hat the authority of the government. これは少しく直譯めいた文であるが、日本語ではよくいふ面白い語句であるから、可成文字通りに之を英語に寫して見たのである。

18) 【鼻先を挫く】=to break the power of としたが to put to shame

less. Then he removed to Yedo, and lived in a little house in a poor quarter of the city. Not long after, he died, leaving behind him a boy about ten years old, called Itarō. As there was no one to take care of him the landlord of the house took him to his own house to bring him up.

About that time *some one—nobody knows who*—put up by the roadside a large board, mounted on a stake, on which was pasted a picture of a blind shampooer suffering because *his feet were caught in a hole in the road.* A large crowd of people gathered around it and were gazing at it, but *none could make out the meaning* of the picture, when Itaro, then twelve years old, came out of the crowd and said, "Don't you understand what it means? *It is a satire on the present rulers.* The picture is meant to show us that those who are above are blind, and we who are below are suffering because of their blindness."

といふ方が寧ろ字義にはよく當つて居る、然しどちらでも大なる相違はない。

19) 【..... の味方をなして ..... に反抗す】=took the side of ..... made a stand against. 兩方とも熟語であるが之を單語に代へれば took the side を supported となし made a stand against を opposed となすことが出來る。

20) 【同僚の間に行はれて居た樣な惡事醜行をなしたことはない】=he had never participated in any of the wrong or dis-

群集の褒めそやすのを聞ながら其場を逃げ去つて仕舞ました。

スルト翌日立派な侍が伊太郎の世話になつて居りまする大家に參りまして、[26]案内を乞ふて亭主に面會致し度いと申込みました、亭主は大に驚き[27]一體何事であらうかとあやしみながら出迎へて遇ふて見ると、侍は「[28]卒爾な話じやが御前の内に十二三になる小僮が居るそうじやが、[29]構ひなくば彼れを余が貰ひ受けたいが何うじや、實は昨日彼の才智に就て大層驚ゐた事があつて、此樣な利潑な子供を余が息子(むすこ)の伽にもと思つたのじや」と申しながら、尙昨日實見した[30]一伍一什を詳細に話して聞かせました、聞取つた亭主の喜び如何ばかり、元より侍の種の伊太郎の事で御座いますから何卒して侍奉公でもさせてやりたいと亭主も日頃願ふて居りました際なり、又伊太郎も喜んで諾(うけが)ふたから、ソコデ此侍の家に引取らるゝ

honest practices of his colleagues (彼は同僚がする惡事などに曾て關係したことはない)、participated は took part in (參與する) の意である、原文の「同僚の間に行はれて居た」とは prevailed among his colleages であるが之を譯しても of his colleagues と云へば其意味が表はれる。

21) 【諫言耳に逆ふ】=此の一句は譯せずに thus といふ聯結辭を用ゐて其意を譯したのである、敢て此の諫言を英譯すれば a remonstrance offends the ear である。

The people who heard it all expressed their admiration at the wisdom of the boy. While they were saying flattering words to him the boy went off.

The next day a fine looking *samurai* came to the house where the boy was living, and *sent in his card*, expressing a desire to have an interview with the master of the house. The master was somewhat surprised and *wondered what it could be about*, but went out and saw him. The visitors said to him, "You have a boy about twelve or thirteen years old at your house. *If you can spare him*, I should like to have him. I was greatly struck by his wisdom yesterday, and wish to have such a bright boy for the playmate of my son." And he went on telling *all the details of* what he had seen of him on the previous day. The man was very much pleased with the proposition because it had been his wish to put the boy into some *samurai's* house, as he himself was by birth a

22) 【誰とも知らず】=some one—nobody knows who—此の dash と dash の間に入れた一句が「誰とも知らず」に當る、Some one who shall be nameless といふ句があるがこれは意味が違ふ、who shall be nameless とは其名をいふを憚るとのことである。

23) 【往來の穴に足を踏込んで】=his feet were caught in a hole in the road. 足を踏込むとあるから斯く譯したのであるが、足なる文字を省いていふなら he stepped into a hole in the

ことゝなり、子息の御伽役になりました。

夫れより伊太郎は日々主人の子息のお伴を致して道場に通つて居ましたが[31]自分も亦若主人同様指南を受けて居りました、根が利潑で御座いますから十九の年には一角(いとかど)の劍道の達人となり免許を受くる迄に相成りました。

或日の事伊太郎は子息と庭先で蹴鞠をやつて居りましたが、[32]ドウしたはづみか鞠が隣屋敷の御庭に飛んで行きました、伊太郎は御詫を致して鞠を返して貰はふと隣屋敷に參りました處、[33]折の悪ゐ時は仕方のないもので、此隣屋敷の主人と云ふのは鎗術の先生で根が悪性の人間で御坐ゐましたが、丁度夏の夕暮椽先に胡坐をかいて[34]凉風を納れて居りました所へヒユッと鞠が飛んで參つて目前に落ちたかと思ふと遣水(やりみつ)を躍ねて面上に泥が

road である。

24) 【誰とて其意味の分かる者がない】=none could make out the meaning.「誰とて」は「誰も」より少し强い言葉であるから英語でも no one といはず none といふ字を用いた、「分かる」は to make out; to understand である、phrase を以て云へば not to know what to make of; not to be able to make head or tail of である。

25) 【之は御上を悪口したのだよ】=It is a satire on the present

samurai. Itarō was also satisfied, and he was at once taken to the *samurai's* residence and became an attendant of the son of the house.

Among other things it was his daily duty to accompany the son to the fencing-hall, where *he himself had the privilege of sharing the lesson with his young master.* The result was that he had attained great skill in the art when he reached the age of nineteen and received a certificate attesting it.

Now, one day he was playing with his young master at kicking a large ball out in the courtyard, when the ball went over *by accident* into the yard of the next door neighbor. He went to the house to apologize for it and to get the ball. *It so happened that* the neighbor was a master in the use of the spear and an ill-natured man. It was a summer evening, and *he was enjoying a cool breeze* while sitting cross-legged on the piazza, when the ball came over and

rulers. 此の satire はいやみ、あてこすり、諷刺又は悪口の意味を有す、a satire on に注意せよ。

26) 【案内を乞ふて】=これは文字通りに云へば asking leave である、之を sent in his card (名刺を通じて)とするは不穩當かも知れぬ、殊に其時名刺を通ずる等の習慣はなかつたのである然し英文としては斯くいふのが尤も自然であるから斯く譯したのである。

27) 【一體何事であらうかとあやしみ】=wondered what it could

ヒツかゝつたと云ふ騷で、イヤ先生[35]怒るまいものか烈火の如くなつて居る處へ丁度伊太郎がやつて來た。

伊太郎は誠に御氣毒な事を致しましたと其粗忽の詫びを申しましたが、先生中々納まらない、ツカ々々と伊太郎の傍に近づき自分の穿て居りました庭下駄を取つて、今しも面前に低頭致して居りまする伊太郎の頭を打擲致し、コレハと驚ゐて首を上ぐる伊太郎を再び打擲に及んだから、伊太郎の前額は破れ血は顏に流れて參りました。

下駄で打れる程恥辱のことはない、[36]斯樣な些細な事柄の爲めに斯くも恥辱を蒙むることかと伊太郎は奮激致したのも無理ない次第で御座います、併し伊太郎はジツト其怒を靜め暫くつゞ立つた儘相手の顏を睨み附けて居りました。

隣家の主人はセヽラ笑ひしながら[37]「ドーダ殘

be about. 一體……といふは强き云ひ方にて英語では普通之を what in the world とか what on earth とか what under the sun とかいふのである、然し此所には此等の文句を用ゐとる what it could be about といふのが隨分强い言葉であるから充分に日本語の一體云々の意を示して居るのである。

28) 【卒爾な話じやが】=之を敢て譯せば It is a very abrupt thing, but …… とすべきであるが英語では滅太に斯る言葉を使

fell just in front of him and spattered some muddy water upon his face. *He was at the highest pitch of anger* just when Itarō appeared. The boy was very sorry and apologized for his carelessness, but the master would not be easily appeased. He approached the boy at last and taking up a wooden clog which he had been wearing struck Itarō with it on the head as he was bowing down before him, and struck him again as the boy tried to raise his head. His forehead was bruised and blood ran down his face.

There can be no greater disgrace for any one than to be struck with a clog. It was therefore quite natural that Itarō when treated so disgracefully *for so trifling a matter*, was greatly exasperated, but restraining his anger he stood for a while and stared in the face of the cruel man. The latter laughed contemptuously and said, "*How do you feel now?*"

はない、本文にある話の場合などでは、well, I understand …… 位でよいのである。

29) 【構ひなくば】=これも直譯すれば if you dont mind 又は if you dont object である然し此所では if you can spare him の方が文意の上からいふて適譯である、此の spare は手離しするの意。

30) 【一世一代】=all the details of 又は the full particulars 又は the whole story など場合により色々の言ひかたがある。

念か、骨髄に徹したか、以後の心得の爲めに余が折檻し遣はしたのじやから御禮を申すべき筈じや、一體[38]貴樣の主人は分らぬ奴じや、だから伜も日々腰拔となる計りじやないか、ソラ見ろ劍道には勵みもせず、斯る遊戯に耽つて痩公家の技に身をやつす樣なことをやるものだから、今日の樣な無禮を出來致すのじや、此鞠はまだ渡されぬ、欲(ほし)くば腕對(うでづく)で取れ、左れば遣はす」と、左も憎さげに申しました、之を聞たる伊太郎は怒心頭に上りましたが、一語も答へず、ズイと立つて主家に歸りました。

伊太郎は兼ねて父の遺物(かたみ)に貰らひ受けた一腰の名刀を取出し、之を提げて直ちに元の隣屋敷に取つて返した、丁度其時例の先生善い心持になつて一盞を傾け樣として居ると、眼前に衝立つたる伊太郎はサア來ゐ來れと身構し[39]「腕對の所望に任

31) 【自分も亦若主人同樣指南を受けて居りました】=he himself had the privilege of sharing the lesson with his young master. To share は御相伴す、共にする、the privilege は特典即ち特別の取扱さの意であるから had the privilege of sharing the lesson で指南を共に受けて居つたの意味になるのである。

32) 【どうしたはずみか】=こゝに云ふ「はづみ」とは機會さの意味であるから by accident 又は by chance と譯すべきである。

33) 【折の惡い時は致方のないもので】=之を可成原文のまゝに

Is that enough for you? I've given you a beating as a warning for the future, and you ought to be thankful. To be frank, *your master hasn't got much sense*, and so his son is getting spoiled. He doesn't study fencing at all, but instead takes to such a girlish exercise as playing with a ball, and this is why he was led to give me such displeasure as he has to-day. This ball I am not yet ready to let you have. If you want it now, overcome me first by force, and then I'll give it to you." Itarō listened to these bitter words, and grew impatient, but he turned on his heel and went home without returning a word.

Immediately after, he returned, carrying a good, sharp sword in his hand, which he had received from his father as a legacy. Just then, the wicked neighbor feeling ready for his repast was beginning to enjoy a glass of *saké*. There the boy stood right in front of

譯するに敢て譯されぬことはないが之を略して it so happened that と譯しても自ら其意は表はれるのである。

34) 【涼風を納れてをりました】=he was enjoying a cool breeze 又は he was cooling himself.

35) 【怒るまいものか烈火の如くなつて居た】=これは怒の極度をいふたのであるから He was at the highest pitch of anger と譯したのである、激烈なる怒に付ては英語に種々の句がある he was mad with anger ともいひ he looked black as

せて、勝對の勝負に參つた、云せて置けば此身計りか御主人樣に對しても無禮の雜言、[40]最早聞棄には相成らぬ、イザ立上つて勝負に及べ」と詰めかけた。

ヨモヤと思つた侍は驚ろたが、高の知れた青二才、望みに任せて立合つても何程の事やあらんと思つて居ますから、長柄の鎗をオッ取り伊太郎に向つた、軈て眞劍勝負となつたが伊太郎の方は一生懸命、相手は[41]何の猪小才なと構へて居ります内に、早や數合打合はせました、[42]隙を見付けた伊太郎得たり賢こしと附入りざま此侍を斬倒して仕舞ひました。

勝は勝つたが伊太郎も飛んだ事を爲たと思つても最早逐付かない、元より逃げ隱れなどする卑怯者で御座いませんから其儘役所に駈け込み事の次

thunder ともいひ、名詞の phrase では black looks ; a towering passion ; fire and fury 等がある。

36) 【斯樣な些細な事柄の爲めに】=for so trifling a matter. 之を for such a trifling matter 又は for such a trifle 又は for a matter so trifling とするも間違ひではない。

37) 【ドーダ殘念か骨髓に徹したか】=ドーダは how is it, 殘念は sorry, 骨髓には to the marrow 徹したは to pierce と一々に文字を拾ひ集めて譯さうとすると是非直譯めいて自然を

the man, and challenged him to fight, saying, "*In accordance with your advice, I have come to conquer you by force.* You have disgraced not only myself but also my honored master, so *I cannot be patient with you any longer.* Come and try a contest with me."

The proud *samurai* was taken by surprise, but, fully believing that such a green boy as Itarō would be nothing to him, accepted the challenge, and faced the boy with a long spear in his hand. Thus a fight with real arms began. The boy fought with might and main, while the *other met him in a disdainful manner*, so that after exchanging a few strokes of their weapons *the boy took advantage of the man's heedlessness and gave him a death blow.*

The victorious Itarō, however, regretted afterwards what he had done, but there was no help for it. He was not so cowardly a boy as to run away, and

失ふの恐がある、故にこれも全く意譯にして How do you feel? Is that enough for you? 此の Is that enough for you は隨分憎々しく聞へる文句である。

38) 【貴樣の主人は分らぬ奴とや】=分らぬ奴とは智慧分別のない奴との意味であるから your master hasn't got much sense (分別) と譯したのである、your master has got no head でもよい、形容詞を用ひていふなら your master is foolish とか unwise とか injudicious などが適當である。

せて、勝對の勝負に參つた、云せて置けば此身計りか御主人樣に對しても無禮の雜言、[40]最早聞棄には相成らぬ、イザ立上つて勝負に及べ」と詰めかけた。

ヨモヤと思つた侍は驚ゐたが、高の知れた青二才、望みに任せて立合つても何程の事やあらんと思つて居ますから、長柄の鎗をオツ取り伊太郎に向つた、軈て眞劍勝負となつたが伊太郎の方は一生懸命、相手は[41]何の猪小才なと構へて居ります内に、早や數合打合はせました、[42]隙を見付けた伊太郎得たり賢こしと附入りざま此侍を斬倒して仕舞ひました。

勝は勝つたが伊太郎も飛んだ事を爲たと思つても最早逐付かない、元より逃げ隱れなどする卑怯者で御座いませんから其儘役所に駈け込み事の次

thunder ともいひ、名詞の phrase では black looks ; a towering passion ; fire and fury 等がある。

36) 【斯樣な些細な事柄の爲めに】=for so trifling a matter. 之を for such a trifling matter 又は for such a trifle 又は for a matter so trifling とするも間違ひではない。

37) 【ドーダ殘念か骨髓に徹したか】=ドーダは how is it, 殘念は sorry, 骨髓には to the marrow 徹したは to pierce と一々に文字を拾ひ集めて譯さうとすると是非直譯めいて自然を

the man, and challenged him to fight, saying, "*In accordance with your advice, I have come to conquer you by force.* You have disgraced not only myself but also my honored master, so *I cannot be patient with you any longer.* Come and try a contest with me."

The proud *samurai* was taken by surprise, but, fully believing that such a green boy as Itarō would be nothing to him, accepted the challenge, and faced the boy with a long spear in his hand. Thus a fight with real arms began. The boy fought with might and main, while the *other met him in a disdainful manner*, so that after exchanging a few strokes of their weapons *the boy took advantage of the man's heedlessness and gave him a death blow.*

The victorious Itarō, however, regretted afterwards what he had done, but there was no help for it. He was not so cowardly a boy as to run away, and

失ふの恐がある、故にこれも全く意譯にして How do you feel? Is that enough for you? 此の Is that enough for you は隨分憎々しく聞へる文句である。

38) 【貴樣の主人は分らぬ奴とや】=分らぬ奴とは智慧分別のない奴との意味であるから your master hasn't got much sense (分別) と譯したのである、your master has got no head でもよい、形容詞を用ひていふなら your master is foolish とか unwise とか injudicious なども適當である。

第を [43]自首して御上のお所刑を願ひました。

調らべの役人も之には困つた、と云ふのは其心術より云へば寧ろ稱讃さるべきものであつて、[44]身は假令ひ一小僮に過ぎぬものと雖も、其實立派な武士である、が併し兎に角殺人罪を犯したもので御座いますから死罪、輕くも逐放の御所刑に服せねばならぬので御座います。

役人も左右決し兼ねて居りました際、茲に伊太郎の主人と別懇の間柄でありました、幡隨院の住職三ケ月上人と云ふ方が此事を御聞きなさゐまして、[45]生命乞の願書を役所に差出されました、三ケ月上人は當時の高僧で御座ゐましたから願書の趣は聞屆けられました。

斯る場合に高僧の願意の聞屆けらるゝと云ふことは [46]從來有り來つたことで御座ゐます、併し裁

39) 【腕對の所望に任せて腕對の勝負に參つた】=所望は desire が本當であるが此所では主人が子僧に斯くせよといひ聞かせた事を指すのであるから advice としたのである、次に「任かせて」は從がつての意であるから In accordance with の句を用ゐた、之に似た句で according to といふのがあるがこれは少しく意味が違ふ、according to は何々によれば の意である。「腕對の勝負に參つた」を忠實に譯すれば I have come to have a contest of force with you である、然し

therefore he went at once to the state office and *of his own accord confessed the crime* and surrendered himself to justice.

The judges of the court were perplexed. As far as his motives were concerned, the boy fully deserved praise. *Though only a little boy*, he was a noble and honorable *samurai*. And yet he had committed the crime of murder for which he should suffer capital punishment, or exile at least.

While the judges remained undecided, the chief priest of the Banzui Temple, Mikadsuki Shōnin by name, who was an acquaintance of the boy's master, heard of the matter and presented a petition to the court asking *for the boy's life*. He was a highly esteemed priest, and therefore his petition was granted.

Criminals of this kind were often acquitted in case they were asked for by some priest of high rank.

前に「腕對で取れ」との言葉を overcome me by force と譯したから之に合せて此所でも I have come to conquer you by force と譯したのである。

40) 【最早聞棄には相成らぬ】=I cannot be patient with you any longer. 又は I cannot now forgive you でもよい。

41) 【何の猪小才なと構へて居ります】=これも意譯にした方がよい、即ち to meet him in a disdainful manner

42) 【隙を見付た伊太郎得たり賢しと附入りさま此侍を斬倒しま

斷の權はどこ迄も御上にあることで御座いますから、萬一願意の聞屆けられぬ場合には傘一蓋を持つて住職は其寺を開かねばならぬので御座います、詰り願書の却下は住職の身不肖の證明となつて檀家に責を負ふて退散する譯になるので御座います、斯る危險が御座ゐますから、自己の勢力に十分なる信任があり且 47)よしどうならうとも厭はぬと云ふ大決心がなくては、高僧善知識も生命乞は出來ぬ次第で御座ゐます。

斯く伊太郎は慈悲深く德高き名僧によつて命拾ひを致しました、上人は伊太郎を寺に伴ひ歸つて僧侶にしやうと致しましたが伊太郎の方ではソンナ氣はなく、彼の一件以來は 48)驕慢なる侍の鼻折りくれんの考から弱者の友なる俠客とならうと決心を致しましたから、終に寺より逃げ出しま

した】=the boy took advantage of the man's heedleesness and gave him a death blow. この後の句は dealt him a mortal wound とするも面白い。

43) 【自首する】=to denounce himself to the authorities といふのが普通であるが茲には of his own accord (自分で) confessed the crime (罪を自白した)と譯した、此の of his own accord なる前句を confessed the crime の後に附けると自分の勝手でした犯罪といふ意味にきこへるから、こゝは大に注意を

Such was the established custom in old Japan. The power of final decision, however, was in the hands of the court authorities, who, therefore, rejected such petitions occasionally, and in such case the priest who had acted as mediator had to leave his temple, taking with him no property but an umbrella. The rejection of his petition was taken by his parishioners as proof that he was not worthy of his position. Such being the danger, priests rarely undertook the task of asking for another's life, unless they had full confidence in their power and *a strong determination to face the possible consequences.*

Itarō was thus saved by the kind and noble priest, who took the boy to his temple with the intention of educating him for a priest. But the boy had no such inclination. Since the occurrence of the event mentioned above he had fully determined to become a *Kyokaku*, a friend of the weak, *for the purpose of*

要するのである。

44) 【身は假令一小僧に過ぎぬものと雖ども】=Thongh only a little boy. 之を Though he was only a little boy としてもよいのであるが he was を抜かした方が力がある、Only a little boy as he was でも可い。

45) 【生命乞の願書】=a petition asking (又は pleading) for one's life. こゝでは伊太郎の生命乞であるから for the boy's life とした。

して俠客仲間に投じました。

偖俠客とは何人で、どの樣な事をして居つた者かと申しますと、彼等は仕事師、人足等の頭の樣なもので、隨分大切な職務を有つて居つたもので御座います、ソコデ一方では大名や公儀の御用に多數の人夫を供へ、又他方では奉行所の御手先などを勤めたもので御座います、夫故に勞働社會の人間との關係は誠に廣く又厚ゐもので御座ゐましたから、盜賊や博徒などが一度其仲間に遁げ込みました節には公儀の役人などよりは俠客の方が召捕には遙かに有効のもので御座ゐました。

ソー云ふ譯で御座ゐますから隨つて收益も種々の方面より潤澤に這入つたものでありますが、奇妙な事には彼等は其金錢を自己の奢侈の爲めに致しませずして、貧窮者を助けることなどの爲めに

46) 【從來あり來つたこと】=such was the established custom in old Japan. この established custom は一般に行はれて居つた慣例との意、in old Japan は in old time Japan といふても可い。

47) 【よしどうならうが厭はぬといふ大決心】= a strong determination to face (危險を冒かすの意)、the possible consequences (どんな結果にならうがの意)、此の全文を今一つ譯

humbling haughty samurai, and so he ran away from the temple and entered the company of the *Kyokaku*.

Now, who were the *Kyokaku* and how did they make their living? They performed quite an important social function as chiefs of coolies and laborers. On the one hand they supplied the Daimyo or any public work with any number of laborers required, and on the other hand they rendered valuable service in helping *the high commissioners*. Their relation to the laboring class was so wide and constant that they were far more efficient than the commissoner in catching thieves or gamblers, if there were any among them.

So they had always a large amount of income from different sources. But a strange thing about them was that they spent their money freely, not on personal luxuries for themselves but in helping the

し換ゆれば a stern purpose to meet the probable consequences となる。

48) 【驕慢なる侍の鼻折くれんとの考】=for the purpose of humbling haughty samurai と譯したが「鼻を折る」の一句に相當する英語の expression はなきやと思ふ人もあらむ、「鼻」は高慢の意であるから之を pride とし、「折る」は低くするの意であるゆへ to bring down となし全文を in order to bring down the pride of the insolent Samurai としても可いのであ

吝げもなく使ふたもので御座ゐます、唯其愉快とする所は弱きを助けて强きを挫くにあつたので、眞に貧窮者の友で御座ゐました又それが彼等の希望で御座ゐました。

伊太郎は俠客となりました時、名を替えて長兵衞と名乘りましたが、元と幡隨院より出ましたもので御座いますから、人呼んで幡隨院長兵衞と申しました、[49]其生涯は實に義俠の業に滿ちたるもので御座ゐますが玆には唯其臨終の快擧を申上ぐるに止めておきます。

或日長兵衞大勢の子分を引連れまして辨天詣ふでの爲めに江の島に行き、歸途川崎迄參つて一休みせんと茶亭に立寄りました所[50]何事か知らぬが家の者が騷ゐで居る樣で御座ゐますから、長兵衞はソツト內を覗(のぞ)いて見ると、內では番頭が大きな强そうな相撲取の頸筋を取りて、壓えて怒鳴り附けて居る、スルト相撲取は[51]大地に平伏して何事か頻りに謝(あやま)つて居る、ソコデ長兵衞は番頭

る、又た高慢なる人の鼻を折るといふことは邦語で之を鼻をひしぐとも云ひ、辱かしむとも云ひ、ヘコマス、ヤリコメとも云ふ、英語でも to put to the blush; to put out of countenance; to throw into the shade; to trample under foot; to abase the pride 等の同意句がある。

49) 【其生涯は實に義俠の業に滿ちたものであつた】=He lived a life full of chivalrous deeds. 今少しく簡潔に云へば His life was one long knightly deed.

poor. They found their greatest enjoyment in helping the weak and crushing the strong. They were indeed the friends of the weak and poor, and such was their ambition.

When Itarō became a *Kyokaku*, he changed his name, and called himself Chōbei. As he came from the Banzui Temple, people called him Banzuiin Chōbei. *He lived a life full of chivalrous deeds*, but here we shall only mention how he ended it.

One day he went to Enoshima, taking with him a large number of his men to worship at the Benten Shrine there. On their way home they stopped and took a rest at a tea house in Kawasaki, when they noticed that *there was some kind of disturbance inside the house*. Chōbei peeped into the house and found that the clerk had hold of a big, stout wrestler by the neck, and was speaking angrily to him, while

50) 【何事か知らぬが家の內が騷いで居る】=there was some kind of disturbance inside the house. 「騷ぎ」は disturbance; excitement; uproar 等の言葉がある、故に there was some uproar (excitement) going on within the house とも云へる。

51) 【大地に平伏して】=prostrating himself down to the ground. 謹んで平伏すとのことは to prostrate oneself の外に色々云ひ樣がある、今其の用語の數例を擧ぐれば to bend the knee to; to bow to; to kneel to; to fall down before; to lie flat な

の所へ參りまして事柄を質問しますと、番頭は「旦那此相撲取は 52)太ゐ奴で御座ゐます、タラ腹喰つた擧句御代がないと云ふ、旦那こんな奴は了見なりません、ソコデ私共宿場仲間の申合せによりまして 53)今打ち擲つて以後を戒しめて居る所で御座ゐますと申しました、」相撲取は「イエ滅相な、旦那樣ソー云ふ譯では御座ゐません、實は私が茲に參りました時迄、私は財布を懐中致して居るものとのみ心得て居りました所、勘定を支拂ふと思つて取出さうと致しました所、54)驚いたじや御座ゐませんか、それが御座ゐません、多分道中を急ぎましたものですから取落しましたものと見えます、旦那虚言を申すのじや御座ゐません、私は此番頭さんの仰しる樣な惡巧を申すので御座いません、ソレで丁度旦那の御出くださつた時私の疎忽を詫び又勘定の所は私が江戸に到着致しますれば早速送金致しますゆえ夫迄御延期くださる樣にと御願ひ申して居りましたので御座ゐます」と申

ざは屢〻用ゐらるゝ言葉である。

52) 【太い奴】=a knave. 此の外 rogue, cheat, rascal, villain, brazen fellow 等は皆類語である。

53) 【今打ち擲つて以後を戒しめて居る所】=I am going to beat him and make him smart for it, for his own good. 此の譯文の中にある smart for it は熟語にて其のことの爲に酷い目に會ふとの意味である、for his own good は心得の爲めに、其身の爲めにとの意、全文を斯く譯しても可い、I intend to

the latter was *prostrating himself down to the ground* and begging pardon for something. Chōbei went to the clerk and asked him what was the matter. "This wrestler", explained the clerk "is *a knave*, After he ate all he wanted, he said he had no money to pay for it. There is no excuse for such a dishonest fellow, sir. In accordance with our inn regulations, *I'm going to beat him and make him smart for it, for his own good*". "No, sir," contradicted the wrestler, "he is quite mistaken. The fact is, when I came here I thought I had my purse with me, but I found *to my great surprise* when I came to pay the bill that it was gone. As I came here in a hurry, I have perhaps dropped it on the way. I have never had, believe me, sir, any such dishonest intention as this clerk thinks I had. So I was just apologizing to him for my carelessness, when you came in, and I was asking him to wait for the

flog him (beat him に代へて) and make him suffer (make him smart for it に代へて) in order that he may learn (for his own good に代へて)。

54) 【驚いたじや御座いませんか】=to my great surprise. 此の to は結果を意味す、即ち此所では財布がなかつたのを見て其結果驚いたといふことになる。

55) 【歸る途すがら此間違に引懸かつた】=he was on his way home when he was entangled in this trouble. 間違を

譯を致しました。

段々話を聞き取ました長兵衛は、身態(みなり)は惡ゐが此相撲は田舍興行に出て居りまする中旅先にて母の急病且つは危篤の音信(たより)を得て 今急ゐて [55]歸る途すがら此間違に引懸かつたのであると云ふ事を承知致しましたが、其顏附(かほつき)と云ひ聲音(こわね)と云ひいづれも正直らしく、又母親に盡す誠も篤かり相に見えますものですから長兵衛は「ウン分つた、ソウじやろう、勘定は己れが拂ふてやるからモー心配するには及ばぬ、又茲に拾兩ある、これは手前に呉れてやる、[56]見受る所御前もまだ [57]相撲仲間では幅の利く方ではなからうからおツ母を世話しやうと思つても金錢(かね)も出來にくかろう、これを持つて急ゐで歸るがよからう」と申しました。

mistake など譯するのは不可、こゝにいふ間違とは悶着の意であるから trouble か difficulty といふのが適譯である、引懸るは to be entangled か或は to be caught up がよい。

56) 【見受ける所】=I take it. この I take it は I suppose 又は I presume と同じ意味にて邦語の「見受ける所」に當る言葉である。

57) 【相撲仲間では幅の利く方ではなからう】=not yet fully recognized among the wrestlers. 「相撲仲間」は in the circle of

payment of the bill till I could get to Yedo, when I should surely send him the money."

On farther inquiry Chōbei found out that the wrestler, though yet a bungler, had gone down to a certain country district to get up a wrestling performance, in the midst of which he received a message from home to the effect that his mother had been suddenly taken ill and was in a very serious condition. Thus *he was on his way home when he was entangled in this trouble.* Both the expression of his face and the tone of his voice clearly indicated that he was an honest fellow, and that he was earnest in discharging his duties to his mother. Chōbei, therefore, said to him, "I understand you fully. Such being the case, I will pay the bill for you, and you need not worry about it any more. Besides, here are ten *ryo* for you. *I take it* that you find it pretty hard to earn enough money to provide for your sick mother,

wrestlers であるが此所では之を略して among the wrestlers とした、「幅の利く方」は普通 a man of influence といふのであるが相撲に就いて此語を用ゆるは少し穩かでない、故に其意を取つて fully recognized としたのである。

58) 【名をいふ程の者でもない】=he was nobody worth mentioning. 名の字はなくも worth mentioning で其意味が表はれて居るのである、之に類似の用語で worth while going (行き甲斐がある); worth looking at (見る價がある); worth hearing

相撲取は有難涙を流がして此御恩は決して忘れは致しませぬ、誰樣で御座ゐますか御名を承はりたう御座いますと申しました、長兵衞は[58]名を云ふ程のものでもないと申聞けました、其時[59]長兵衞の子分共は親分の親切なる扱ひに感服致して[60]共に可憐な相撲に合力いたしましたから、都合廿兩の金錢を貰ひ受けまして相撲取は喜び勇んで此場を去りました。

此相撲取は後に櫻川と申して名を上げました温良、正直な相撲取で御座りました。

數年經て後の話で御座いますが、櫻川は當時の恩人は名題の幡隨院長兵衞であつたと云ふ事を慥かめましたから、長兵衞の宅に參りて恩義を謝し且何時かは此恩を返したゐと彼れの心術をも打明けた相で御座います。

(聽聞の價値がある); not worth talking about (言ふに足らない)等がある。

59) 【長兵衞の子分共は親分の親切な扱ひに感服して】=Chobei's men were inspired by their master's kind deed. 子分は protégé 又は underhands といひ親分は head 又は boss と譯すれども子分を men; 親分を master とする方が分り易くて可い、「感服す」は to be deeply impressed by 又は to be really struck with admiration ともいふ、inspired は感動して

as you are *not yet fully recognized among the wrestlers.* So take the money and go home quickly."

The wrestler shed tears of gratitude and said that he would never forgot his kindness, and wanted to know who his benefactor was. But Chōbei told him that *he was nobody worth mentioning.* In the meantime Chōbei's men were also *inspired* by their master's *kind deed* and *did their part* in contributing money towards the help of the poor wrestler, who went off at last with great joy, receiving twenty *ryo* in all.

Indeed this wrestler was a good and honest man and became afterwards a celebrated wrestler under the name of Sakuragawa.

After some years he ascertained that his benefactor was Banzuiin Chōbei, a celebrated *kyokaku,* and went to thank him for the help he had received and announced his intention of repaying his kindness some day.

との意。

60) 【共に可憐な相撲に合力した】=they did their part in contributing money toward the help of the poor wrestler. この did their part は「共に」の意譯にて其意味は各々應分のことをしたとのことである。

61) 【恰んど言語に絕す】=beyond management と譯したのは文字から云へば不當かも知れぬ、然し本文の事柄から云へば此方がよいのである、beyond management は殆んど制御する

前に申上げました通り其頃の侍共は下々に向つて不禮驕慢を極め、故なくして百姓町人を困しめて居りましたが、特に其子息等の我儘放埒に至つては [61]恰んと言語に絶して居つたので御座ゐます。

或者は醉酒の上不怪(けしからぬ)風態にて大道を蹣跚として歩行し、[62]偶々行違ひの際何心なく摺れ合ふものがあれば忽ち引つ捕へて呵責におよび、又或者は料理店に上り込んで拔劍して他を威喝(おびす)など [63]公儀の役人も持て餘して其亂暴狼藉の行跡を仕方なく看過して置く始末で御座いましたから、下々の困難は實に名狀すべからざる有樣で御座ゐました、事體斯くの如き勢で御座ゐますから俠客仲間は [64]寄り集りまして此不遜の武家を挫く良策を講じて居りました。

ソコデ屢々武家と俠客の間に喧嘩が持上がりま

ことが出來ぬとの意である、數行後に「名狀すべからざる有樣」とあるが之も其前後の context より意譯して beyond measure と譯した、言語に絶す；名狀すべからずを文字的に云へば beyond description である。

62) 【偶々行違いの際何心なく摺れ合ふものがあれば】=if any one happened (偶々 ..... する者あれば) to touch them unwittingly (知らず摺れ合ふ) while walking (行違ひの際)、「摺れ合ふ」は to rub against ともいふ。

As already intimated the nobles of that time behaved in a disgusting and arrogant manner towards their inferiors and needlessly vexed merchants and peasants. As to the self-conceit and haughtiness of their young sons it was almost *beyond management*.

Some got drunk and walked the streets in a contemptuous manner, and *if any one happened to touch them unwittingly while walking*, they would seize and refuse to excuse him. Some went to restaurants, and drew their swords out to threaten others. Even *the officers could not do anything with them* and were obliged to pass by their rude and disorderly conduct. The sufferings of the people, therefore, were *beyond measure*. Such being the case, friends of the *kyokaku put their heads together and consulted* as to the best way of humbling the haughty nobles.

There were often quarrels between these two

63) 【公儀の役人も持て餘した】=The officers could not do any thing with them. 又は The officers could not control (manage) them.

64) 【寄り集りまして ..... の策を講じた】=they put their heads together and consulted. 此の to put heads together は相集つて相談をこらすといふ場合によく用ゆる phrase である、邦語で「鳩首して」との言葉とよく似て居る。

65) 【町人】=字義から云へば tradesmen が適譯である、此所では

した、御承知の通り俠客は侍では御座ゐませんが、所謂落し差しと申して一本キメ込んで居たもので御座ゐます、又俠客の内でも幡隨院長兵衞の樣に初め侍であつて後に 65)町人になりました者も少なくなかつたものですから 66)イザ眞劍の勝負と云ふ時に 67)ナニ侍に引を取るものかと腹の中で括つて掛る位腕の立つたものも少なくないので御座ゐます、ソコデ侍に於ても俠客に對しては無碍に無禮も働らかない、又町人等は侍に苦しめらるゝと俠客の助けを求めるので御座います、斯う云ふ鹽梅にして終に俠客と武家は 68)互に 敵視し合ふこととなりました。

扨前に申上げました櫻川は幕内力士に立身致し、幡隨院長兵衞の引立によつて 69)多くの贔負を得ましたが特に俠客仲間に愛せられて居りました、又大鷲と申す關取がありまして之れは旗本に贔負にされて居りました、或時江戸の大相撲で此

侍といふ特權を有する階級に對していふのであるから the unprivileged class とした、又或時は單に the people と譯してある處もある。

66) 【イザ眞劍の勝負といふ時】=in case of a serious fight. 劍の字を用ゐて云へばin case of a real fight with swordsである。

67) 【ナニ侍に引を取るものかと腹の中で括つて居る位】=to such a degree ..... 位に) that they felt themselves equal to meet the nobles. 「引を取るものか」は之を negative に云へば

classes of men.

The *kyokaku* were not *samurai*, but were allowed to wear one sword, while *samurai* wore two swords. Among the former, there were not a few like Banzuiin Chōbei who had first been *samurai* and afterwards dropped into the *unprivileged class*, so that they were trained in the art of fencing to such a degree *that they felt themselves equal to meet the nobles in case of a serious fight*. The nobles, therefore, did not dare behave so rudely towards those men, and the people went to ask for their help whenever they were vexed by the nobles. At last the *kyokaku* and the nobles *came to look* daggers at one another.

Now, Sakuragawa, whom we mentioned elsewhere, became a wrestler of high standing and *obtained a large number of his patrons* through the influence of Banzuiin Chōbei. All the *kyokaku* especially favored him. Another great wrestler called Ōwashi was

never to be defeatedで, positiveに云へば to be equal; to meet 又は competent to meet である。「腹の中で括る」を felt の一字で表はしたのは少し力が足らない樣に思ふ讀者もあらん、anticipated, expected, believed, estimated 等の動詞も幾分か此の日本の phrase の意味を表はすが未だ充分でない、They were firmly convinced といふ方がモツトよいかも知れぬ、又 to reckon, to count upon; to calculate upon; never to doubt but that 等も餘程「腹の中で括る」に近い言

兩關の顏が合ひましたから日頃互に憎み合つて居りました旗本と俠客とは互に自分々々の贔負相撲を勝たせたいと思ひながら見物に出掛けました。

勝負の結果は櫻川が勝つて大鷲は負となりましたから、[70]旗本連は之れを遺恨に思つて櫻川を道に要して殺害致しました、之れが爲めに俠客と旗本との間に屢々大喧嘩もあつたので御座ゐますが玆には述べぬことゝして、兎に角双方の悶着は激しくなり已むに已まれぬ有樣になりましたソコデ公儀に於ても[71]打棄て置かれませぬから上役人を以て旗本及其子弟に不遜の行爲無之樣達すべきを命じ、又同時に俠客に對つては公儀に於て旗本を取締るべき間、俠客側に於ても穩かにして、又旗本を尊敬する樣にと沙汰致しました。

葉である、元來英語には腹さい ふ句は極めて少ないのである。

68) 【互に敵視し合ふことゝなつた】=they came to look daggers at one another. これは面白い phrase である、之を平易に譯して見れば they began to eye one another with looks of hatred となる。

69) 【多くの贔負を得ました】=obtained a large number of his patrons. 贔負といふ抽象名詞は favour ; patronage にして

e favorite of the nobles. In one of the performances in Yedo, these two wrestlers were to appear in the arena in a match, when the nobles and the *kyokaku*, who had been looking upon each other with hatred went to see the wrestling, each wishing to have their own favorite defeat the other.

The issue of the contest was that Sakuragawa won the victory over Ōwashi. *The nobles lay in ambush for Sakuragawa and killed him out of jealousy.* We will not stop to mention the many serious quarrels between the *kyokaku* and the nobles that took place as the result of this. At any rate the relations of those two classes became so bitter and irreconcilable that the Tokugawa Government *did not think it wise to let it alone* and ordered their superior officers to warn the nobles and their sons against insolent behavior, and at the same time told the men of the *kyokaku* that they should be quiet and

---

贔負客は patron である、又た贔負するといふ動詞は to favour ; to patronize. 贔負相撲は a favourite wrestler, 然し wrestler といはずとも分る場合には單に a favourite といふ。

70) 【旗本連は之を遺恨に思つて櫻川を道に要して殺害致しました】=the nobles lay in ambush for Sakuragawa and killed him out of jealousy. 「之を遺恨に思つて」は out of jealousy.

此公儀の仲裁によつて旗本の扱扈は大分減じて參り、同時に世間も大に落付て參りました、然るに旗本の内には自分等と、身分の低ゐ者共との爭を[72]双方五分の扱ひは惟しからんと心慨するものあつて敵方の大親分幡隨院長兵衞をなきものにせんと企つるに至りました。

ソコデ相談に事よせ來駕を願ふと云ふ事で旗本方の首領の一人なる水野の邸に長兵衞を誘ひ出しました、長兵衞の子分等は之れを聞てこれは惟しゐ害意[73]があり相だと思ひましたからお行きなさいますな、お行きなされば生命が危ふ御座ゐますと止めましたが、長兵衞は行かなければ臆怯だと思ひましたものですから子分の云ふ事を聞き入れない、又子分に向つて己れもモー十分彼等を懲

此の out of は何々の理由よりしてといふ意味にて此所では殺害の原因を云ふのである.「道に要して」は伏兵、まちぶせの意であるから lay in ambush といふ phrase を用ゐたのである。

71) 【打棄て置かれませぬから】=did not think it wise to let it alone. 此の to let it alone は to leave it alone ともいふ。

72) 【双方五分の扱ひは惟しからむ】=discontented with an arbitration on equal terms. これは又た斯うも譯することが出來る

look up to the nobles with respect as the government would henceforth place the nobles under its control.

As the result of this interference on the part of the government the rude behavior of the nobles became less common, and at the same time the public at large came to feel more composed. Some nobles, however, being quite *discontented with an arbitration on equal terms* in the quarrelbetween themselves and men of a lower order con ceived a planfor destroying Banzuiin Chōbei, the champion of their hated enemies.

They invited him to the mansion of Mizuno, one of the leading nobles, under the pretence that they had important things to talk over with him. Chōbei's *kobun* (protégés) *suspected their secret* malicious intention and advised their master not to accept the invitation because he would surely be killed if he should go. Chōbei, however, did not listen to them, thinking it cowardly not to accept the invita-

he was not content to submit his case to an impartial arbitrator.

73) 【……があり相だと思ふた】=suspected の字が適當の譯である、この suspect といふ字は色々の意味を有す、眞理を疑ふとの意味もある其場合には之を疑惑す、訝かる又は不案に思ふと譯す、然し又惡事がありそうに思ふといふ時にも此の suspect を用ゆ其時は日本語の惟しむ、疑懸す、うたぐるの言葉に當る、此の後者の意味を以て本文を譯したの

らしてやつたから、假令ひ彼等の爲めに殺さるゝとも本望じやと云つて、已れの死ぬ時も來たわいと思ひながら唯一人水野の邸に參り、[74]果して殺されて仕舞ひました。

因幡の藩士で劍道の名人でありました白井權八と云ふ人、此人は種々長兵衞の恩義に與つた人でありますが、長兵衞の殺害されたと云ふことを聞きまして翌朝水野の邸へ踏込み復讐を致しました、復讐の志を遂げました後直に權八は公儀に自首して一分始終を白狀し、之れが爲めに死刑に處せられましたが [75]從容として死に就きました。

である。

74) 【果して】=as expected 又は as was expected.

75) 【從容として死に就きました】=he died with perfect contentment. 從容としては with composure 又は calmness が字義に當る、故に之を he died with calmness; he died with perfect tranquillity of mind とも云へる。

tation, and told them that he would be satisfied even if he should be killed by the nobles as he had already reproved them enough. So he went to the noble's house all alone knowing that his last hour had arrived and he was murdered there *as expected.*

When Shirai Gonpachi, a samurai of Inaba, and a celebrated master of fencing, who was in many ways indebted to Chōbei, heard the news of his assassination, he broke into the noble's residence on the next evening and killed him for vengeance. Immediately after the achievement of his object, he presented himself to the court and confessed his crime, for which he was sentenced to capital punishment, but *he died with perfect contentment.*

第四章

烈女

春日局

局とは朝廷又は將軍に宮仕へする婦人に授けらるゝ官職の名稱で御座ゐまして、此名を下さるゝ婦人は高貴の婦人として尊敬せられ[1]大名同格に扱はれます、否夫れよりも優つて局の内にも一流の婦人になりますと小大名よりも優かに上位を占めて[2]彼等を呼び棄てに致したもので御座ゐます、此春日の局の物語は如何なる婦人が局に採用せらるゝか又其奉仕の樣を明かに致して居ります。

偖德川家康の時代に金吾中納言秀秋朝臣の臣下に稻葉佐渡守と申す侍が御座ゐました、秀秋は德

1) 【大名同格に扱はれます】=同格は Same in rank; the same postion 又之を of equal standing; to be on the same footing ともいふ、扱はれるは to be treated であるが they were of equal standing といへば其中に自ら to be treated の意味は含まれて居るから之を略したのである。

2) 【彼等を呼捨にする】=to call them by their names. 殿とか樣

CHAPTER IV

Kasugano-Tsubone, a heroine.

Tsubone is an official title given to a woman who is, or has been, in the service of an Emperor or a Shogun. The women who received this title were regarded as great women, and *were of equal standing with Daimyos*; nay, more than that, those who were of the first grade were far superior in rank to small Daimyos and *called them by their names*. The story of Kasuga-no-Tsubone shows what kind of women were made Tsubone, and how they were employed.

In the reign of Tokugawa Iyeyasu there was a noble called Inaba-Sadonokami, who was in the

とかいふ honorific を用ゐない呼び方であるから悉しく云へば to call them without a term of respect である、然し to call one by one's name は呼び捨てにするとの意味であるから敢て without a term of respect 或は without any honorific の句を附するに及ばない、爰に注意を要するのは to call names (悪口をいふ) と to call by names とを混合

川氏に抗して敵將石田三成に從ひましたが、初め稻葉守は之れを不可とし秀秋に向つて「德川家康は天下の名將にて向ふに敵なく、眞に聰明達德の大將なれば何卒三成を棄てゝ家康に御從ひの儀願はしく存ずる」と諫めましたが秀秋は庸愚の大將で御座ゐましたから既に深く[3]三成の言に迷はされて、此臣下の献策に耳を傾けませなんだ、果せるかな戰鬪の結果三成初め一味の總敗北となり、爲めに金吾秀秋の[4]家は斷絶し家來はちりぢりに分散いたしました。

ソコデ稻葉佐渡守も亦浪人いたし京師に居を定めまして手習師匠に[5]其日を送り、佐渡守の名乘を弛めて心易く内匠と名乘つて居りました、今や

すべからざることである。

3) 【三成の甘言に迷はされて】=infatuated by Mitsunari's flattering counsels. この counsel は忠告、勸めの意、故に flattering counsels で甘言の意になる、或は之を honied words, honied tongue ともいふ、——infatuated はボットする、ウツトりとするとの意、即ち釣り込まれて迷はされたとの事である

service of a great Daimyo, Kingo Chunagon Hideaki. The latter revolted against Tokugawa, and followed Ishida Mitsunari, Tokugawa's bitter antagonist. Inaba-Sadonokami did not approve of this, and advised his master Hideaki in this way, "Tokugawa Iyeyasu is an excellent general and his equal is rarely to be found. He is thoroughly conscientious, and rich in virtues. I sincerely advise you to follow him instead of Ishida Mitsunari." Hideaki, however, not being an intelligent lord, was already so far *infatuated by Mitsunari's flattering counsels* that he did not hearken to his retainer's wise admonitions. The issue of the battle between Ishida and Tokugawa was as disastrous as expected to the former and to all his adherents. The house of Kingo Hideaki accordingly *was ruined*, and his retainers were scattered.

Thus Inaba-Sadonokami too became a *ronin* and settled in Kyoto where he *made a living* as a teacher of penmanship, dropping his noble's title,

る、或は ensnared といふても可い。

4) 【家は斷絶】=こゝでは The house was ruined と譯したが ruined の代りに extinct を用ひ became extinct ともいふ。

5) 【其日を送り】=其日を送るとは生計を營むと云ふ意味だから made a living と譯したのである、斯樣な場合に picked up a living といふ事もある。

稻葉内匠の表札を上げました[6]潜り戸の小な家は彼の邸宅となつたので御座います、[7]實に移り易る浮世かな、昨日迄數百の家臣に取卷かれたる身の今日は一人の家婢をさへ召使ふことのかなはぬ[8]果なき有樣に落ぶれました、ソコデ内匠が眞木を割り、奥方が水濯ぎをせねばならぬ有樣になつたので御座ゐますから、如何にもお氣の毒に見えました、併し兩人に於ては[9]憂しとも思ひませぬ如くか只管二人の子息の成長を樂しみに幸福に働らいて居りました。

玆に岩見傳介と申す者がありました、此者は初め稻葉家の家來で御座ゐましたが、至つて正直で又大層劍術が好きで御座ゐましたから、佐渡守も時々指南をされて居りました、後に此者[10]武者修業を思ひ立ち諸國を遍歷いたし、逐々修業の効を積みまして今や一廉の腕前と相成り、終に參百石を頂戴して當時德川の[12]四天王の一人と稱せられたる榊原式部大輔康政に召抱えられて居りま

6) 【潜り戸の小さな家】=文字通りに云へば a small house with a side-door であるが寧ろ意譯にして a modest house とした、modest は控へ目なとの意。

7) 【實に移り易る浮世かな】= What a world of vicissitudes! 「實に」とは indeed と譯すのであるが此所には what.....! といふ感投詞を用ゐたから indeed をよしたのである、然

Sadonokami, and taking a plain new name, Takumi. *A modest house* with a door-plate bearing the simple name Inaba Takumi was now his residence. *What a world of vicissitudes!* The noble of yesterday with hundreds of retainers under him *is to-day a man of humble state* not able to employ a single maid-servant. It was indeed a pitiful sight to see *Takumi* obliged to split kindling-wood and his wife to wash clothes, but both *seemed content with their lot* and worked happily with the hope of bringing up their two little boys.

Now, there was a man called Iwami Densuke, who was formerly Inaba's house-servant. As he was an honest fellow and was very fond of fencing, Sadono-Kami now and then tutored him the art. Afterwards this servant made trips to different places for the purpose of acquiring skill in the art of fencing and as the result of hard study, Densuke *distinguished himself* in fencing circles, and was employed, with

し之を原文に忠實な譯し方にして this is indeed a world of changes! としても差支ない、vicissitudes は移り易りとの意、殊に運命の轉々移り易るのを英語では the wheel of fortune といふ。

8) 【果なき有樣に落ぶれた】=is to-day a man of humble state. この humble は low 又は mean 即ち下賤なとの意、state

した。

扨て傳介は舊主が[13]京都に流浪して詫しく暮らして居ると云ふ事を聞ましたから、今こそ恩義の返し時と心得まして書面を認め、懇ろに家族をも伴ひ江戸に御上りくださる樣及ばずながら御世話申上ると申送り、程なく自分も京都に下り[14]是非御伴を願ひたいと勸めました、內匠は其志の程は[15]千萬忝ないが只今の所生活に苦しむといふ程の事もなければ一人立の方が望みであると申して辭退致しました。

然るに程なく內匠は妻と二人の幼兒を殘して亡くなりました、ソーなると後(あと)に殘つた寡婦の福は、サテ[16]行末何うしたものかと思ひ煩ひました、

は身分の意、故に昔は……の人であつたのが今日は is a man of humble state と云へば丁度「果なき有樣に落ぶれた」との意味に當ることゝなる。

9) 【憂しとも思ひませぬ如く】=seemed contented with their lot. 原文は消極的に云ひ譯文は積極的にいふた相違あるのみで意味は同一である、「憂しと思ふ」の英語は moping,

an income of three hundred *koku*, by Sakakibara Yasumasa, who was known as *one of the four greatest fencers in the country*.

When Densuke heard that his former master was *living in a lonely and miserable condition away in Kyoto*, he thought it a good time to repay his kindness, and wrote him a humble and kind letter asking him to come up to Edo at once with his family and live with him as he could easily support them. Shortly afterwards he went down to Kyoto on purpose, and *urged his master to comply with his earnest request*, but *Takumi*, although he much *appreciated* his servant's kindness, declined, telling him that he would rather live on independently as he was, and was not in any great want as far as his living was concerned.

Not long after, however, *Takumi* died leaving behind him his wife with two little boys. On the loss of her husband, the widow, Fuku by name, *was quite*

---

melancholy, gloomy 等である。

10) 【武者修業】=怎ふ云ふ文句は日本特有のものであるから丁度適當な譯語を見出す事は困難である、故に茲には說明的に譯したのである。

11) 【今や一廉の腕前となり】=distinguished himself, 或は became a remarkable man でも可い、腕前は ability であるから此

17) 思ひに沈んで居ります内フト夫の家來で御座ゐました彼の岩見傳介のことを思ひ出し、傳介の18)外に頼るべき者はないと考へました。

福は自分の困苦は意と致しませぬが唯々可愛き二人の幼兒の行末を案じ世が世なら一角の士分の相續人ともなるべきものを 19)今は小僮(こもの)に均しき狀(さま)に落魄れ、尙行末も何うなることか 20)五里霧中の内にある子供の身の上を案ずれば眞に斷腸の思ひがさるゝので御座ゐます。

然るに今傳介の事を思ひ浮べた時 21)フト一つの好ゐ思案が起りました、ト云ふのは亡き夫は秀秋の身内であつたから已むなく德川殿に反ゐたとは云ふものゝ眞實の所、心底に於ては德川殿に敬服して居ましたので、嘗ては主君を諫めて德川殿に 22)楯つく思ひを止めさせやうとしたことがあるので御座ゐます、此等の事は德川殿も御承知遊ばすことであらう、23)萬一御承知の事とあれば

字を用ゆれば he made himself a man of remarkable ability とも譯することが出來る。

12) 【四天王の一人】=四天王は The four Deva kings といふ然し此所には分り易く one of the four greatest fencers in the country と譯した。

13) 【京都に流涙し詫しく暮らす】=living in a lonely and miserable

perplexed about her future. While she was absorbed in thinking what to do, she happened to remember Iwami Densuke, her husbamd's former servant, and thought that there was *no one but he to whom she could look for help.*

She did not mind her own troubles, but worried a great deal over the future of her two dear little boys. It was heart-breaking to her to think of those boys, who were formerly esteemed as the heirs to a noble's heritage, *now reduced almost to the level of street boys*, and their future *involved in great uncertainty.*

But *Suddenly a happy thought occurred to her mind.* Upon reflection, she recalled that her deceased husband, though obliged to revolt against Tokugawa because of his relation to Hideaki, had really been an admirer of Tokugawa at the bottom of his heart, and that was why he had once advised his Lord to give up his *intention of taking up arms* against Tokugawa. All this might be known to him,

condition away in Kyoto-この lonely だけでは流涙の意味が充分表はれないが away in Kyoto とあるに注意せよ、此の away は所謂京都くんだりといふ樣な意味を表す。

14) 【是非御伴を願ひたいと勸めましたが】=前文既に此事は手紙を以て願ひ置いた事柄であるから其願意を聽容れ貰いたいと英譯したのである (urged him to comply with his

傳介の元にあれば德川殿に知られて斷絶したる[24]家名を再興する機會のないとは限らぬと考へましたから、大に力づいて玆に江戸に下る決心を致し、兼ねて懇意に致して居りましたこれも京師に住んで讀書算筆劍道の師範に日を送つて居りまする會田彌五左衞門の許に參り[25]一伍一什を叙べ尙留守中二人の子供の世話を賴みたき由相談に及びました。

彌五左衞門も亦義俠心に富んだ人で御座あましたから快く其乞を容れ當に子供等を引取つて養育するのみならず、福女の[26]運の開けるまでは十分學問も仕込んでやろうと受合うてくれましたから福女は涙を流して其好意を謝し、軈て家財を賣拂ひ幾許の金錢を得て其内の幾分を子供の爲めにとて會田に殘し、餘りの三四十兩は江戸[27]到着匆々傳介の世話になるでもなからうと之を懷中致して

earnest request). comply with は諾するの意。

15) 【千萬忝けない】=thanked him for——と云つてもよいが appreciated といへば心底から先方の芳志を認めて感謝するの意味がよく表はれる。

16) 【行末何うしたものかと思ひ煩ひました】=was quite perplexed about the future-此の perplexed は當惑する、迷ふとの

and *if that were the case*, she thought she might have a chance, while with Densuke, of being recognized by Tokugawa, and of *rehabilitating her family name*. Greatly encouraged by this hope and fully determined to go up to Yedo, she went to see Aida Yagozaemon, who lived in Kyoto, teaching boys reading, writing, and fencing, and with whom she had been acquainted for a long time. She *confided to him all her intentions* and asked if he would be good enough to look after her two boys during her absence.

Yagozaemon was also a chivalrous man and gladly granted her request and promised her that he would feed her boys and also do his best to educate them *until her circumstances changed for the better*. Fuku shed tears of gratitude at his words of kindness. Immediately she disposed of all her household furniture and thus obtained a certain amount of money, a part of which she left with Aida for her

意であるから矢張り思ひ煩ふとの譯となる、然し anxious を使ふて she was very anxious about her future としても可い。

17) 【思ひに沈んで居ります内】=while she was absorbed in thinking 又は while she was buried in thought 又は while she was wrapped in deep meditation など色々の云ひ方がある。

出立致しました。

京師より江戸迄は百拾餘里距つて居ります、當時世は德川の天下になつて次第に昌平無事に趣き秩序も回復せられて居りましたが、尙戰亂の揚句の際とて、盜賊物取國內に橫行して居りましたから、斯樣な際に東海道を婦人の獨り旅は實に危險千萬で御座ゐました、汽車もなければ、車もなく、大川には橋の架せるものなく、[28]山路には盜賊の難(なやみ)あり、福女が江戸に着く迄の千辛萬苦は[29]察するに餘りあることで御座ゐます。

兎角して福女が江戸も間近の大森品川の間に差し掛つて參りましたのはモー日も黃昏(たそがれ)時で御座ゐました、見れば[30]並木の松の間に數人の荒くれ男が怒鳴つ居りまして、又泣きながら何事か謝まつて居る子供の聲が聞えました、福女の爲めには[31]

18) 【外に賴るべき者はない】=no one but he to whom she could look for help. 此の to look for help は賴るといふ熟語である、no one but he whom he could rely on 又は depend on といふも同じことである。

19) 【今は小僮に均しき狀に落ぶれ】=now reduced (落ぶれる) to the level (均しき樣に) of street boys (小僮)、町中に遊び

boys, and the remaining thirty or forty *ryo* she carried with her *lest she should be a burden upon Densuke from the day of her arrival in Yedo.*

The distance from Kyoto to Yedo is about 250 miles. As the country was already under the rule of Tokugawa, society was being gradually restored to peace and order. But still as it was then just after the war, robbers and thieves were very numerous all over the country. A woman's trip through the Tokaido at such a time was indeed full of dangers, with no trains, no carriages, no bridges over rivers, and with *mountain roads infested with robbers*; *and it goes without saying* that Fuku encountered numberless perils on her way to Yedo.

It was already after dark when she was passing along a road between Omori and Shinagawa, not very far from Yedo, and noticed a few wild looking men making an uproar among the row of pine trees near by, and heard a little boy crying and apologizing

暮す子供は多く下流の者であるから斯く云ふたのである。

20) 【五里霧中の內にある】=involved in great uncertainty とは無論意譯である、五里霧中に當る面白き英語は見當らない、霧といふ字を用ゐて此の意味を表はす語は名詞で mistiness 形容詞で misty である、即ち未定、不確かの意。

21) 【ふと一ツのよい思案が起りました】=suddenly a happy thought

知らぬ顔で看過(みすご)して仕舞へば善かつたので御座いませうが、ドーモ此荒くれ男に苦しめられて居る子供が可憐相(かわいそう)でなりませんのに、[32]今も今とて京師に殘して置ゐた子供の身の上を思ふて居りました際のことですから尙更ソーモ出來ず、立止つて暫らくジット見て居ましたが、[33]穩ならぬ樣で御座ゐましたから、[34]ツカツカと近寄つて見ると乞食共が寄つてたかつて一人の可憐な子供を打つたり蹴つたり致して居ります、シテ其內の一人が「サー親方の所迄來ゐ、乞食には乞食の作法がある、手前は渡り者だ、[35]斷りもなく己等の繩張を荒らしやあがつたんだマダマダ打ッ撲(な)ぐてやらなきやならない、ヒドイ仕事も爲せてやらにやならないと申して居りますと、やがて又一人の大男は子供を引攫んで引摺つて行うとして居ります、子供の方は泣き悲み[36]聲を限りに許を乞ふて居ります。

福女は何事か譯は分りませんが痛く子供を可愛

(a good idea ともいふ) occurred to (struck ともいふ) her mind. 此の一句は色々に云へる、She was suddenly struck with a good idea; suddenly she hit upon a good plan; suddenly she thought of a good thing 等。

22) 【楯つく思】=intention of taking up arms against.....to take up arms は干戈を取る即ち楯つくといふことになる。

for something. It would have been better for Fuku if she had left them *without meddling with the matter*, but she could not do so because of her pity for the poor boy who was being ill-treated by the men, and also because *just then* she was thinking of her own boys left in Kyoto. So she stopped and stood still for a while and watched them. *The matter looked somewhat serious*, and so she approached them *unceremoniously*. They were all beggars. She found them striking or kicking the boy, and heard some of them say to him, "At any rate come to our chief. Beggars must observe beggars' laws. You are a knave. You have *intruded into our field without permission*. You have got to be whipped more and subjected to hard work." In the mean time, one big man grasped the boy and was about to drag him away, when the latter cried and begged his pardon *at the top of his voice*.

Fuku ded not quite understand what the matter

23) 【萬一御承知の事もあれば】=英譯では御承知云々を繰返さないで若し左樣なら (if that were the case) といふ。

24) 【家名を再興する】=これも文字的に譯すれば recovering once more her family name from ruin であるが寧ろ之を縮めて rehabilitating her family name とした方が善い。

25) 【一伍一什を叙べ】=英語の confide は殘らず打明けるといふ

相に思ひまして、「マアマア御前達は隨分酷ひでではないか、私は事柄は知らぬけれども斯う酷ひ目に遇はされて居る子供を只見て居ることは出來ないよ」と申しますと、乞食は振り返つて見ると其所に福女は立つて居ます、「ナンダ此女順禮め(福女は此時順禮姿をして居つたので御座ゐます)女だてら默つて居ろ、[37]手前等の出るところじやねー」、福女も [38]少し腹が立ちましたから、[39]女がドウした、順禮がドウした、私は此子供が可愛相だから口出ししたのじや、若し其子が惡ゐ事をしたのなら打つても構ゐはしまい併し餘り……」とまだ福女の言葉の切れませんうちに一人の乞食は近寄つて福女を [40]撲り倒そうと致しました、が福女は一通の女では御座ゐません、元と此福女の父と申すは柔術劍道の名人で御座ゐまして、幼少の時より十分福女を仕込んで置いたので御座いますから、今乞食が近寄つて參つて福女に觸るゝや否や福女は其手を引捕えて [41]二三間先へ投げ飛ばしました、之れを見た乞食共大に立腹致し、一度

意。故に此句を譯して confided to him all her intentions としたのである。

26) 【運の開けるまで】=until her circumstances changed for the better. 又は until fortune smiled upon her といふことが出來る。

27) 【着匆々傳介の世話になるでもなからうと】=lest she should

was, but felt very sorry for the boy and said, "You are too cruel. I do not know what is the matter, but I can not bear to see this little boy treated so cruelly." The beggar turned back and saw Fuku standing there, and said, "What! a pilgrim! (the woman was then wearing a pilgrim's garment). Shut up, woman. *It ain't your business.*" "*Woman, or pilgrim*;" replied Fuku, *a little cut up*, "I feel very sorry for this boy, and that's why I speak to you. If he had done wrong, you are perhaps right to whip him, but you are too——." Before she had finished her sentence, one of the beggars stepped up and *tried to knock her down.* But Fuku was by no means an ordinary woman. Her father was a celebrated master of *jujutsu* and fencing, and trained her well in those arts while she was young. The moment the beggar came and touched her, she quickly took hold of his hand and *threw him several yards off.* The rest of the beggars who saw it got

---

be a burden upon Densuke from the day of her arrival. 世話になるとは厄介となるの意であるから to be (become) a burden (荷物-負擔) と譯した、着草々は from the day of her arrival 又は soon after her arrival ともいへる。

28) 【山路には盜賊の難あり】=mountain roads infested with robbers. infested は惱ます荒すの意だから「難あり」の譯になる、

に掛つて參りましたが悉く取挫ゐで仕舞ました。

由來柔術は奇妙なもので御座ゐまして力づくと申より秘術が[42]大切なので御座ゐます、ソコデ此技をわきまえて居る一人の人が此道に暗ゐ五六人を相手にこれを取挫くことは[43]易々たることでございます。

話元に返つて乞食共は散々の目にあつて或は投げ飛ばされ、或者は撲り付られ、或者は氣絶せしめられました、福女は殘つて居りましたものゝ内の頭分らしき奴を引捕えて[44]後手に捻ぢ上げましたからたまりません、[45]「痛い痛いコリヤ堪(たゑ)らん勘辨してくれ、コリヤ順禮[46]モー決して手向はせん、放してくれ」と喚(わめ)いて居ります、福女もモー充分懲りただろうと思ひましたものですから手を弛めてやりましたが、又思へば乞食共も可憐(かわいそう)で御座いますから懷中より壹兩の金を取り出し「サー玆にお金があるから之れを持つてサツサツとお行(ゆ)き、若し又再び手向致せば[47]今度は御前方の生命

因に云ふ此の infest なる動詞は怎ふいふ時には必らず with の前置詞が伴ふことを忘れてはならない。

29) 【察するに餘りあり】=It may be easily imagined. 然し之を it goes without saying (云はずと知れたこと) とするも意味は同じことゝなる。

30) 【並木の松の間】=並んで居る松の木の間をいふのであるか

angry, and attacked her all at once, but she overcame them all.

Now, *jujutsu* is a strange art, in which dexterity or tricks *play a more important part* than physical strength. One man who knows the art can *easily* beat five or six men who do not know it.

To return to the story, all the beggars were defeated, some thrown aside, some knocked down, and some rendered unconscious. Among the rest, Fuku caught one who looked like a leader, and *gave his hand a backward twist.* "*Ouch, ouch,*" cried he, "I can't stand the pain. Forgive me, O pilgrim! *I will never touch you again.* Let me go." Fuku thought he was punished enough, and let him loose, but at the same time she pitied the fellows. "Here," said she to them, taking one *ryo* out of her pocket, "Here is some money for you. Take it and go. If you try to attack me again, *mind, you will all be*

ら among the row of pine trees と譯す、row は列 (並んで居ること)。

31) 【知らぬ顏して】=without meddling with the matter (其事に干渉せずに)、之を pretending to be ignorant of it と譯する方が原文に忠實なる譯だと思ふ人もあらんが文字に拘泥せずして譯する方が文に無理が行かないでよいのである。

はないよ」と申しました、乞食共は驚きて「コリヤ女ぢやないよ[48]キット男が女に化けて居るのに違ひねー、ナーニアリヤ御化だよ」と互に口々に云ひながら皆々急ぐで逃げ去つて仕舞ました。

スルト子供は恐る々々福女の前に出まして幾度も頭を下げて泣きながら其親切を謝しました、福女は子供の身上(みのうへ)を聞き又茲所で何を仕て居つたのかと尋ねますと、子供は長々と[49]世にも憐れなる物語を致しました。

此子供は平三郎と申して當年取つて十三歳、下總國行德にて[50]相當の暮をして居る者の子息で御座ゐましたが、數月前兩親とも急病の爲めに亡くなり、其死後心善からざる親戚共の爲めに財產は悉く横領せられ、殘るは此子供と姉娘とばかり、一文もなき全く賴邊なき身となりました。

之れも前世の罪業の致す所と思ひあきらめ[51]罪滅しのため西國三十三ヶ所の順禮に立うと決心いたしました。

32) 【今も今とて】=just then.

33) 【穩かならぬ樣で御座いました】=The matter looked somewhat serious. 此の serious は重大、大變の意、これでは餘り强過ぎて「穩かならぬ樣」といふ意に當らぬゆへ somewhat (稍々) の字を附したのである。The matter looked not to be overlooked (又は despised) と譯してもよい。

aead men." The beggars started up, and said among themselves, "*That is not a woman, but a man in disguise, I am sure.* No, that's a ghost." So they all fled in great haste.

Then the little boy approached Fuku in a shy and fearful manner, and expressed his gratitude for her kind help, bowing his head low several times, but still crying. Fuku inquired who he was, and what he had been doing there, and the boy *told her his long pathetic story.*

He was called Heizaburo, and was thirteen years old. He was the son of *a man quite well off* in Gyotoku, a little town of Shimōsa province, but a few months before, his parents had died of a sudden illness. After their death some of their bad relatives stole all the property in the house. There were left behind only this boy and his elder sister with no money to live upon, and they were entirely helpless. They took the misfortune to be punishment for their

34) 【ツカ々々と】=無遠慮にとの意であるから unceremoniously といふ、又は rudely ともいふ。

35) 【斷りもなく已等の繩張を荒らしやあがつたんだ】=「斷りもなく」は without permission. 繩張は領分といふ意味であるから field とか domain といふ字を用ゆるのが適當である、之を文字的に譯して ropes stretched for boundary などいふ

ソコデ二人は殘りの家財を賣拂ひまして、ドウヤラコウヤラ二十兩計を得、之れを旅費となして廻國の途に上つたので御座ゐます、然るに情ないかな此兩人が品川迄參りました時に姉は惡者に誘拐され[52]金や着換を持ましたまゝ駕籠で何處ともしらず連れ行かれて仕舞ひました、平三郎は一生懸命に姉を探して見ましたが[53]一向行衞が分りません、今は懷に錢もなければ己むなく袖乞を致して、玆に數日乞食同樣徘徊致して居りました所、仲間の許可を得ずして物貰らひせし廉にて斯く捕へられて嚴しき折檻に遇つて居たのであつた。

福女は此物語を聞きまして[54]痛く感じましたから[55]乏しき貯への内より、又五兩取出しまして

は滑稽の沙汰である、又た「荒らしやがつた」は浸入した、冒かしたとの意であるから intruded, entered, broke into 等の言葉がよい。

36) 【聲を限りに】=at the top of his voice 或は with the full power of his lungs ともいふ。

37) 【手前等の出るとこじやない】=It aint your business. 或は

sins in their previous existence, and so determined to make a pilgrimage to thirty temples in the western part of the country *so as to blot out their sins.*

They sold every article left in the house and so managed to obtain some twenty *ryo* for their travelling expenses, and with this they started out on their pilgrimage. But alas! When they came to Shinagawa, the sister was cheated by some bad coolies and carried away in a sedan chair, *money and all.* The boy did every thing he could in searching for his lost sister, but he *lost track of her entirely.* Now, having no money in his pocket, he was obliged to beg for food, and thus he had been loitering around as a beggar for a few days, when he was caught by the beggars and severely scolded by them because of his having begged without their permission.

Fuku listened to his story and was *greatly touched by it,* gave him five *ryo out of her scanty*

is none of your business といふ（入らぬ世話だとの意）、aint は isnt のなまつたもので小供や無學の人の云ふ言葉である。

38) 【少し腹が立ちましたから】=a little cut up. 此の cut up は offended 又は provoked と同じ意味の熟語である。

39) 【女がどうした、順禮がどうした】=英語の方は女だらうが順

之れを子供に與へ、又之れを持つて家に歸り何なり生活の爲めに仕事をする樣、[56]ユルユルと姉の行衞も探す樣、又[57]行末の事を神佛に祈願する樣と、いと懇ろに子供に云ひ聞かせました、子供は地獄で佛に遇ひました樣に喜び、左れば國に歸り兼ねてより能く知れる寺の住持に行末のことを相談致しませうと契ひまして幾度も福女の親切を謝して終に玆を立去りました。

福女も亦善いことをしたと思ひますから大層喜びまして、[58]人を助ける程嬉しゐことはないと感じました、彼れ此れする內次第に暗くなつて參りましたから、どれ行ませうと立かけますと、不意に待てと云ふ聲が聞えました、振返つて見ると二人の士が松の木陰より現はれて此所へと手招き致して居ります、福女は少し氣味惡く思ひましたが、[59]招かるゝまゝに從ふて參りますと、其所に一人の武將らしき人が松の根方に腰打かけて、數多の

禮であらうがと云ふ意味で woman or pilgrim と冠詞も用ひずに云ふのである。

40) 【撲り倒そうと致しました】=tried to knock him down.「撲る」は to knock 之に down を附すれば撲り倒すとなる。

41) 【二三間先へ投げ飛ばした】=threw him several yards off.「投げる」to throw で之に off が附けば「先へ投げ飛ばす」の意

store, and advised him to go home with it to try to do some kind of work for his livelihood, *to take time* in searching for his lost sister and not give her up too hastily, and to pray to the gods *for better days to come*. The boy was as glad as if he had met with Buddha in hell, and told her that he would surely go home and consult with a kind priest, whom he knew well, concerning his future, and he went away at last, thanking her repeatedly for her kindness.

Fuku too was very happy because of the consciousness that she had done a good action, and felt that *there could be no greater happiness than that of helping others*. It was getting darker and darker, so she started to continue her journey, when she suddenly heard a voice calling her to stop. She turned back and saw two samurai emerging from the shadow of the pine trees and beckoning her towards them. She was a little frightened, but went back *in*

が表はれるのである。

42) 【大切なもので御座います】=英文では play a more important part と譯してある、是は大切な役目をつとめるといふ意味で斯樣の場合に屢々用ゐられる。

43) 【易々たることのみ】=easily の一字を以てよく此の意味が表はされて居るを見よ。

士に取卷かれて居ります、此人が福女に向つて

「コレ婦人汝(そなた)は何者じや」

と申しました

「私は京師より參りましたもので名を福と申します」

「汝の働は[60]天晴なものじや、尋常の者ではあるまいと[61]見て取つた、姓名を名乘れ、又汝の夫は何人じや」

「左樣に御座います、我夫は元京師に於て手習師匠を致して居りましたが、此程亡くなりました.に就きまして妾は家を後(あと)に生業(なりわい)の爲め、知る邊をたより江戸表に參りましたもので御座います」

「其知る邊へと申すは何人で、江戸は何(ど)の邊(へん)に住居致して居るか」

「榊原式輔太輔樣の御身内に少々緣故が御座ありまして……」

---

44) 【後手に捻ぢ上げました】=gave his hand a backward twist. 又は tied up his hands behind the back とも云へる。

45) 【痛いなな】=Ouch, ouch! アウチと發音す、我國でアイタタタタといふ處へ英語では斯く云ふ、普通の用語で云へば you hurt! である。

46) 【モー決して手向はせん】=I will never touch you again 又は

respouse to their call. There was a soldiery man sitting on the root of an old pine tree, and surrounded by several samurai. This man said to her:

"Woman, who are you?"

"I am from *Kyoto*, and my name is Fuku, sir."

"Your deeds have been *remarkable*. *I take it* that you are not an ordinary woman. Tell me your full name; and who your husband is."

"My husband, sir, was a teacher of penmanship in *Kyoto*, but died a short time ago. So I left my house, and have come to depend for my living upon an old acquaintance of ours."

"And who is your acquaintance, and in what part of Yedo does he live?

"I have some connection with a retainer of Lord Sakakibara, and....."

I will never attack you again.

47) 【今度は御前方の生命はないよ】=生命がないとは死んで仕舞との意味であるから英語では to be dead men (死人となつて仕舞)といふ、英文に mind,.....とある、此の mind は I mind you (汝に注意する) とのことにて邦文の.....よといふ「よ」の字に當る。

「アー左樣か」と福女の言葉の內に一人の侍を顧みて「彼れなる婦人は御前の家來の所へ行くのじや相だから、御前から尙委しく聞てやれ」と申しました、ソコデ今迄賢こまつて居つた其侍は進み出て尋ねました

「汝は榊原の家來を尋ねて參つたと云ふことであるが、家來の名は何と申すか」
「岩見傳介と申します」
「ウン夫れでは余が家來を訪ねて參つたものに相違ない」
これで侍の身分も御了解のことと存じます、今茲にある一團の人々の首領は德川家康であつたので御座ります、天下の將軍家康ともあらうものが斯樣な場所に居合はせたと云ふことは實に奇怪のことで御座ゐますが、家康は彼れの政治向に就て世間は如何樣に感じて居るか、又大名の內に反旗を上ぐる隱謀を企つる者もやあると、夫れ等のことを探ぐる爲め、[62]詰り治國平天下の事に就て其

48) 【キツト男が女に化けて居るのに違ひねー】=That's not a woman but, a man in disguise, I am sure. 又は That's a man assuming the form of a woman, and no mistake. ともいへる。I am sure とか and no mistake はキツト……に違いないとの意。

49) 【世にも憐れなる物語を致しました】=he told her his long

"Ah, so?", said the man, interrupting her. Then he turned to some one and said: "She says she is going to one of your retainers. Ask her more about it yourself." One of the samurai, then, who was present, came forward and addressed the woman:

"So you are going to see a retainer of Sakakibara. What is his name?"

"Iwami Densuke is his name, sir."

"Well, then, you are going to see my retainer."

You can now understand who these samurai were. The leader of the company was Tokugawa Ieyasu. It may be wondered why Ieyasu, the ruler of the country, happened to be present in such a place. It was his custom to go out often and take *walks incognito* in different quarters of the city, or in its vicinity, in order to see how the people felt about his administration, or if there were not some Daimyo secretly

pathetic story. 此の pathetic なる字は聽く者の同情を惹起す樣な憐れなとの意、或時は woful, tragical, thrilling, heart breaking 等の形容詞を用ゆ。

50) 【相當の暮しをして居る者】=a man quite well off. また外に well to do とも云ひ in a fair way とも云ふ又た一言で云へば prospering, thriving 等の言葉がある。

63) 眞相を究めんが爲めに屢々江戸市中若しくは近接地に出掛けて[63]微行(しのびあるき)をされたので御座ゐますが、恰も此御微行の際に此福女に御邂逅相成り且つは其健氣な働及其親切にして天晴なる所行を御覽せられたので御座います。

福女もこれは將軍家に相違ないと存じましたものですから誠惶驚懼して平伏して居りました、スルト此人は「コレコレ福、余は家康であるぞ、[65]併し苦しうない、先に汝は夫は手習師匠であると申したが本名は何と申す有體に余に申せ」と申されました、福は心中にて今ぞ嘗て家康公に見參申上たゐと望むで居つた時節到來したのであると心得ましたから、「妾の夫は[66]世にありました日には稻葉常陸守と申まして居りました」と御答致しました」稻葉常陸守は高名なる士にして家康も夙に彼れを知つて居りましたから、最早其先を尋ぬる要もなければ、榊原に命じて[67]善く(いたわ)勞り遣はす樣、又傳介の許まで送り遣はせとの上意で御座ゐました、尙福女に就ては御思召もある事故注意致

51) 【罪滅しのため】=so as to blot out their sins 又は in atonement for their sins.

52) 【金や着換を持ちましたまゝ】=money and all. 此の英文の意は金や其他何も皆も一切とのことであるが態ういふ場合には斯くいふと文章が締まつて強くなる。

53) 【一向行衛が分りません】=lost track of her entirely. 或は

planning to raise a rebellion; *in a word, to acquant himself with the real state of things* concerning the welfare of his people. It was during one of those walks that he happened to meet Fuku and to see her remarkable deeds of courage and kindness.

Fuku rightly suspected that he was the Shogun, and was kneeling down in fear. "Well, Fuku," said the man, "I am Ieyasu, but *don't be afraid of me*. You said your husband taught penmanship in Kyoto, but what was his real name? Tell me frankly all about him." "My husband," replied she, thinking that it was the good opportunity she sought to introduce herself to him, "my husband was Inaba Hitachinokami *in his better aays*." Inaba Hitachinokami was a celebrated man, and Iyeyasu knew about him, and therefore he stopped asking any further questions of the woman, but ordered Sakakibara *to see to her* and to escort her to the house of Densuke. And moreover he privately intimated to him that he

could not find her at all 又は her whereabouts were unknown ともいふ。

54) 【痛く感じて】=greatly touched by it 又は moved by it.

55) 【乏しき貯への内より】=out of her scanty store. 少しの持合せの内からといへば out of her meagre purse である。

56) 【ゆるゝゝと】=to take time. 之はよく用ゆる語で落付けとか

して大切に待遇へとの御内命で御座ゐました。

翌日榊原康政は岩見傳介を招ゐて尙詳しく尋ねますと、傳助は「左樣で御座ゐます、元私は一個の家僕に過ぎぬもので御座ゐましたが、只今斯く三百石頂戴の士分に御取立を蒙むり居りまするも皆全く舊主稻葉常陸守の御蔭と心得居りますれば、[68]力のあらん限りは遺族の扶持を致して其恩義を報じたいと心得て居ります」と申しました。

康政は深く此家臣の忠義心に感じまして祿百石加增の義を申渡しましたが、傳介は之れを辭して申す樣、「お上の御思召有難くは存じ候得共、殿、始め拙者が些の腕前を御取立くだされ候て三百石をくださるさへあるに、今御加增くださる樣な手柄は其後立てた覺は御座りませねば此儀は平に御免蒙りたく、何の功もなくして御高祿を頂戴いたしては士たるものゝ名を汚すことと存じます」と、然し康政は福を勞り遣はせとの[69]將軍家の上意を

御ゆつくりなさいといふ時 take your time といふ to do it without hurry とも云ふ。

57) 【行末の事を】=行末のことは about the future であるがこゝに云ふ「行末の事を神佛に祈願する」とは幸運のめぐり來る樣にとの意味であるから for better days to come. 或は for a turn of the wheel といふ面白い言ひ方もある。

had some intention concerning her and that she should be treated kindly and respectfully.

The next day Sakakibara Yasumasa summoned Iwami Densuke and made further inquiry. "Well, your honor," said Densuke, "I was a mere house-servant in former days, but I was promoted by you to the rank of a samurai of three hundred *koku*. All this I owe Inaba Hitachinokami, my old master, so I now intend to repay his kindness by helping his family *to the best of my ability*."

Yasumasa was much impressed by his subject's loyal spirit, and proposed to increase his income by a hundred *koku*. Densuke, however, declined to take it and said, "You are very kind, your honor, but you first granted me three hundred *koku* as your appreciation of my little attainment in the art of fencing, and I have not achieved anything since that deserves an increase of income. No, your honor, I should consider it *a disgrace upon my name*

58) 【人を助ける程嬉しい事はない】=There could be no greater happiness than that of helping others. 又は Nothing could give so much happiness as serving others.

59) 【招かるゝまゝに】=in response to their call. in response to は「應じて」との意味であるから「……せらるゝまゝに」等の譯になる。

受けて居りますから、之れは自分の加増と思はず福女の[70]賄扶持として受納るゝ樣にと懇ろに勸め且之れに由つて甚く彼の節義を賞讃致しました、傳介は大に面目を施し喜び勇んで御前を退きました。

其後家康は後に三代將軍に登られました家光公の[71]御守役として此上なき婦人だと御思召定められて、則ち福女に其役目を授けられ、夫れより彼は局名を賜はりました、以後福女は[72]忠實に其職務を盡し三代將軍を立派な人格の方に敎育いたしました、其功によりまして彼は單に其家名を囘復致したのみならず、二人の子供をも立派な德川の家臣となし且[73]其名を永遠に傳ふるに到りました。

---

60) 【天晴れ】=remarkable, admirable, splendid.

61) 【見て取つた】=I take it. 此の英語は「察す」との意。Suppose 又は assume と同意語である。

62) 【詰まり】=in a word. 普通「詰まり」と云へば結局 (in the end) とのことであるが此所では「要するに」の意味である。

63) 【其眞相を究めんが爲め】=to acquaint himself with (to know

as a samurai to accept your kind offer which I do not deserve at all." Yasumasa, remembering that the Shogun ordered him to treat Fuku with special kindness, persuaded Densuke to accept the one hundred koku, not as his own promotion, but as *an allowance for Fuku's board*, and with it, he highly complimented him upon his loyalty. Densuke retired from the presence of his Lord with a sense of satisfaction and joy.

After that, Ieyasu deciding that Fuku was *a fit woman to be the governess* of Prince Iemitsu, the third Shogun, gave her that position, and she received the title of Tsubone. *Fuku faithfully discharged her trust*, and achieved meritorious exploits in educating the Third Shogun into a noble personality, and the consequence was that she was enabled not only to restore her family name and secure the promotion of her two sons to be illustrious subjects of Tokugawa, but also to *achieve for herself an everlasting name.*

又は to ascertain 又は to observe) the real state of things (眞相=the true state of affairs ともいふ)。

64) 【微行 (しのびあるき)】=walks incognito.

65) 【併し苦しうない】=これは恐るゝに及ばぬ、遠慮するに及ばぬとの意なるが故に don't be afraid of me と譯す。

96) 【世にありました日には】=in his better days. 京都で手習師

此講談の教訓は何んであるかと申せば、先づ第一に傳介の忠義、これは第一に注意すべき事で御座ゐます、古歌に

落ちぶれて袖に涙のかゝるとき
人の心の奥ぞしらるゝ

（此歌の英譯は和田垣謙三氏の作なり）

と云ふて御座ゐます通り誰れでも時めいて居りますときはおべつか連中が取卷ゐて[74]祭り上げますが、一旦落ぶれると何うで御座ゐませうか、世間は彼れを賤しめ、友人は彼を忘れ、甚しきに至つては曩日恩義を受けたものさへ彼を忘れ果てゝ仕舞ます、人間の性情も淺墓な者で御座ゐます、然し人間の價値は報恩の義心にあつて存するので忘恩の奴輩は最早人間でないので御座ゐます、友人の悲境にある時には吾々は之れを[75]庇はねばなりませぬ、不幸に陷つた時は之れを助けねばなりませぬ、又常に恩義を忘れてはなりませぬ、恩人が不幸にして零落する樣の事あれば[76]尙更感恩

匠をして居つた時は變名して居たので稻葉常陸守と稱したのは時めいて居た折 (in his better days) の事であるから斯く譯す。

67) 【善く勞はり遣れ】=氣をつけてやれ、世話をしてやれと云ふ意味であるから See to her といふ。

68) 【力のあらん限りは】=to the best of my ability 又は the best

What have we to learn from this story? First of all, Densuke's loyal spirit is one thing that we ought note. An old poem says:

"In the dark and dreary days of distress,
When tears, like dripping rain, do fall on sleeves,
The depth of a neighbor's heart is full well re-
[vealed."

When one is in a state of prosperity, many flattering friends gather about and *make much of* one. But how is it when a man falls into a state of misery and ruin? The world despises him, his friends forsake him, and even those who received benefactions from him in his better days forget him. Ah, such is the weakness of human nature! But the worth of a man is in his gratitude, and an ungrateful man is no longer a man. When a friend is in adversity, we must *stand by* him. When he falls into a misfortune, we must help him. We must always be grateful to our benefactors. When they happen to be ruined in

I could.

69) 【名を汚す】=disgrace upon my name. 又た to bring shame upon one's name も同意味である。

70) 【賄扶持】=an allowance for one's board. 此の allowance は手當との意。

71) 【御守役としては此上なき婦人】=a fit woman to be the

の情を現はさねばなりません、岩見傳介は此點に就て理想的の人物で御座ゐます、傳介の物語は青年の倫理的教材として最も感動を與ふるものゝ一ツで御座ゐます。

福女に就て尙一言申上げます、曩に申上げました如く福女は柔術に達して居ましたが、併し夫れが爲めに彼は荒々しき野蠻人の樣な女だつたろうと誤解してはなりません、決してそんなものではありません、[73]古來我國の婦人は自衞の外、劒術にしろ、柔術にしろ、猥りに用ふるとは確く禁じてあつたので御座ゐます、戰國の際に於ては婦人も之等の道を心得て置くことは全く必要で御座ゐまして、特に侍の家に生まれた婦人等は何時騷動に出遇や分らぬ時代の事で御座いましたから又格別で御座ゐました、併し婦人の敎育は[77]武道の事ばかりでは御座ゐません、文學、詩歌、音曲其他多くのたしなみ假令へば茶の湯、活花の道も婦人の心得として是非學ばねばならぬものとして御座ゐました、尙之れにも優して順良温雅は婦德の第一とし

governess. 此上なき婦人とは適任者との意であるから a well-qualified woman とも云へる、或時は She is just the woman for ともいふ、御守役とは今日の家庭教師の意であるから governess と譯す。

72) (忠實に其職務を盡くし)=職務は無論 duty であるが責任を自覺して其職務を盡くしたといふ場合には she faithfully

fortune, we must express our gratitude to them *all the more*. Iwami Densuke is an ideal man in this respect. His story is one of the most inspiring ones for the ethical instruction of youths.

A word about Fuku. She was well versed in the art of *jujutsu*, but from that fact we must not think that she was a wild, rough, and savage creature. That is far from the truth. Women were strictly forbidden to make any use of their advantages in the art of fencing and *jujutsu* except for self-protection. In the military ages, it was quite necessary for them to be equipped with those arts, and especially for the women of the samurai class, as the times were such that they might have to meet with disturbances at any time. The education of women, however, was not *exclusively along military lines*. Literature, poetry, music, and various other accomplishments, such as the art of tea, or that of floral arrangement occupied a considerable part of the prescribed course

discharged her trust といふ方がよい。

73) 【其名を永遠に傳ふるに至りました】=之を直譯しやうとすると She transmitted her name to eternity といふ如き文句となつて妙に聞へるが、之を意譯して she achieved for herself an everlasting name とすれば立派に聞へる。

74) 【祭り上げ】=to make much of と譯した、是は持て囃やすといい

て非常に高調せられて居つたもので御座ゐます。

徳川家康に就ても一言致したう御座ゐます、家康は眞に理想的の人で御座ゐました、彼は武を以て天下に臨んだ人で御座ゐましたが又文事の趣味、奬勵に就ても均しく有名なる人で御座ゐます、假如へば碩儒藤原清華を用ひて[78]儒道を天下に布き、又高僧天海を擧げて之れを諸侯の上に位せしめ、自から之れに師事して佛敎流布の爲め力を添へて居ります、又極めて[79]公平な方でありまして福女の場合に於ける如く、其前身は[80]如何なる者であつたにせよ左樣なことには頓着せず、有爲の人を擧げて其所を得せしめたものです、之れを史に徵するに佛露の帝王達は寵姫に政權を與へられたものが多くありましたが、家康は斯樣な事の爲めに決して婦人を用ひませなんだ、彼は婦人の力や活動の場所は家庭の内にあると了解致して居りましたから、才德兼備の婦人を用ひて子女の敎育、

ふ熟語であつて其反對は to make light of (輕んず) といふ。

75) 【庇ふ】=to stand by. これは味方をする、贔屓する、助けるといふ時にも用ゆ。

76) 【尙更ら】=all the more (尙ほ一層)。

77) 【武道の事ばかり】=exclusively along military lines と云ふ、

of women's studies. Above all, gracefulness and refinement were greatly emphasized as womanly virtues.

Let us now think for a moment about Tokugawa Ieyasu. He was indeed an ideal man. Although he ruled the country with military power, yet his interests and activities on other lines were equally remarkable. He employed, for instance, a Confucian scholar named Fujiwara Seikwa, and *opened the way for* Confucianism in the country. He also received Tenkai, a Buddhist priest, and placed him above all the Daimyos, and respected him as his own master, and thus lent a hand in spreading the religious influences of Buddhism over the country. He was thoroughly *democratic*, as shown in the case of Fuku, and raised men to positions of honor provided they were men of ability, *no matter what* their previous state of life might have been. History tells us that there have been a number of favorite mistresses of

此の exclusively は外の物は取除け專ら何々のみすると云ふ意味である。

78) 【儒道を天下に布き】=spread (又は propagated) Confucianism in the country であるが之を opened the way for とするも面白い。

79) 【公平な方】=公平といふ字は impartial とか fair とか just

奥向の用に用ひました、兎に角古今の大識見家で御座ゐます。

とかいふのが當り前であるのに此處では democratic と譯したのは階級などを以て人を區別せぬ極めて平民的といふ意味の公平であるからである。

80) 【如何なる者であつても】=no matter what.....は notwithstanding what と同じく何々に拘はらずといふ意味を表はす。

kings or emperors in France or in Russia, who wielded authority and power in the politics of those countries. But Ieyasu never employed or allowed women to exert their power in that direction. He well understood that a woman's strength and proper field of activities were in the home, and he freely employed women of character and talents in the education of children and in building up homes. Indeed, he was a man of great insight.

第五章

義士

藤堂仁右衛門

茲に御話申上げます一場の物語は恰も我大和魂の實例になるもので御座ゐます。

今より約四百年の昔、有名なる關ヶ原の大戰が[1]起りました、當時德川方の大勇士に藤堂仁右衛門と申して長鎗を以て[2]目覺しき働らきを致しましたものが御座ゐました。

又[3]敵方に於ても總軍の謀士として大谷吉隆と申す大勇士が御座ゐました、此吉隆と申す人は[4]癩病で顏が崩れて居りましたが、秀れた兵法家で又大智者で御座ゐました、[5]此れ迄此人の立てました方略は一として敗れた者は御座ゐませなん

1) 【起りました】=took place と took the place of とを間違へてはならぬ前者は起た後者は……の代りとなつたとの意。

2) 【目覺ましき働を致しました】=fought in a remarkable manner. 目覺ましきは admirable とも云ひ astonishing ともいふ、故に本文は performed astonishing deeds (働) とするも可い。

3) 【敵方に於ても】=此の「も」は another で譯されて居る事に注意せよ。

4) 【癩病で顏が崩れて居つた】=he was a leper and his face was

CHAPTER V

Tōdō Niemon, a Loyal Friend.

The story now to be told is a practical illustration of our spirit, *Yamato-damashii.*

Some four hundred years ago the famous battle of Sekigahara *took place*, and there was a great warrior on the Tokugawa side named Tōdō Niemon, who *fought in a remarkable manner*, using a long spear.

On the opposite side there was *another* great warrior called Ōtani Yoshitaka, the head of the council of war. *He was a leper and his face was disfigured*, but he was an excellent strategist and a man of great intellect. *Up to that time* no plan he

disfigured. 顏が崩づれるとは顏が見惡くなつたことをいふのであるから he looked ugly といふてもよいのである、looked deformed 又は defaced 等の言葉も用ゐらる。

5) 【此れ迄】=up to that time と譯してある、up to は間際といふ意味、故に up to date (最近の) といふ熟語もある。

6) 【命ずる樣】=これは自盡せんとして其最後に命じたのであるから唯 ordered とか instructed とか云はず delivered to him his parting message と委しく譯したのである。

だ、これ西軍の總大將石田三成が彼れを參謀の長に任じた所以で御座ゐます。

併し東軍の總大將德川家康は將軍として遙かに彼よりも傑れた御方で又常勝將軍で御座ゐましたから、石田も大谷も戰ひ敗れて共に自盡したので御座ゐます。

其最後に當つて大谷吉隆は家臣の一人なる湯淺伍助と申して、これ又比なき勇者を呼び寄せまして[6]命ずる樣「さて伍助予が最期も近づきたれば玆で切腹致さうと思ふが、お前も知る通り此顏じや、若し予が首級が敵軍の手に[7]落ちると云ふ樣な事があつては如何にも[8]心外に思ふ、就ては予が自盡を遂げた際には直に首を討落し[9]何處になりとも携へ行き決して敵軍に見出さるゝ樣の事なき場所に埋めて呉れ、之れが予に盡す[10]汝の最後の忠義じや」と申しました。

7) 【落ちる（首が敵の手に）と云ふ樣な事があつては】=此の長い日本語で表はした懸念の意味は英語に於ては if.....fell と云ふ subjunctive past の動詞一字で表はれるのである。
8) 【心外に思ふ】=I should be very sorry 又は I should regret it.
9) 【何處になりとも携へ行き】=携へ行きは carry it 又は take it といふのが普通であるが run away with it といふ方が玆では適譯である、此の with it は即ち「携へて」の意。
10) 【汝の最後の忠義じや】=此の「最後の忠義じや」を the last

had thought out had ever failed, and that was why Ishida Mitsunari, the leader of the enemy, had appointed him the head of the council of war.

Tokugawa Ieyasu, however, was far his superior as a general, and naturally he was victorious. So the time came when both Ishida and Ōtani were defeated and had to kill themselves.

At the last moment Ōtani Yoshitaka summoned one of his subjects, Yuasa Gosuke, who was also a hero without an equal, and *delivered to him his parting message.* "Well, Gosuke," said he, "the last moment of my life is approaching, and I have determined to die on this very spot. But my face, as you see, is so hideous that *I should be very sorry if my head fell* into the hands of our enemy. Therefore the moment I commit suicide, cut off my head and *run away with it* wherever you like, and bury it where the enemy can never discover it. *This will*

loyalty とするは直譯であつて面白くない last と loyalty の間に deed of を入れて this will be the last deed of loyalty と譯すべきである。
11) 【最もの次第】=即ち如何にも同情すべき次第との意味であるから deeply sympathised with の句を以て譯した、然し或る場合には just, 又は reasonable を用ゐねばならぬことがある。
12) 【御懸念なく御生害遊ばせ】=May your honor die in peace. 上

伍助は必らず共に討死と覺悟して居りましたが、こう聞ゐて見れば[11]最もの次第で御座ゐますから、涙を振つて[12]「御懸念なく御生害遊ばせ小僕謹んで仰に從ひ如何なる敵にも御首級を渡す儀は御座りません」と應ました、ソコデ刑部も大に喜びまして直に自殺致しました。

伍助は主人の首を取り上げ竹圍の敵軍を切開ゐて[13]約半里計も距りたる所の森林のうちへ驅込みました、[14]其所で近邊を見廻はしましたが人影も御座ゐませんから、[15]まづ占めたと打喜び[16]背負ひたる包みを取下し、隅の方に穴を掘りて首を塡め、其前に跪きて手を合はせ[17]南無阿彌陀佛と回向し、立上ろうとする所を[18]見附かりました、見附けたのは藤堂仁右衞門で、仁右衞門は逃る敵を逐ふて此所まで來て伍助が何か地に塡めて居るの

長に向つて畏まつて言上する時即ち遊ばせ言葉を使ふ時は英語でも May ycur honor.....とか自分の事を云ふにも第三人稱を用ゆるが常であある、譯文の in peace は「御懸念なく」に當る。

13) 【約半里計りも距りたる所の森林】=a forest about a mile off. これを a forest which was located at a distance cf about a mile とも譯することが出來るが文が冗慢で不可い。

14) 【其所で近邊を見廻はした】=There he glanced about 又は

be the last deed of loyalty that you can do for me."

Gosuke sincerely wished to die with his master, but on hearing these words he *deeply sympathized with* him. So he replied with tears, "*May your honor die in peace.* Your humble servant will obey your command most respectfully, and assures your honor that no enemy shall ever get possession of your head." Gyōbu was much pleased with his answer, and committed suicide immediately.

Gosuke took up his master's head, cut his way through the ranks of the enemy who surrounded him, and ran into *a forest about a mile off. There he glanced about*, but no shadow of a man was to be seen, and, *greatly satisfied*, he put down his burden. Then he dug a hole in a hidden corner, buried his master's head, and knelt down before it clasping his hands and *praying for blessings upon the dead.* When he was about to stand up, *he caught sight of a*

looked round; looked about ともいふ。

15) 【まづ占めたと打喜び】=安心滿足したとの意味であるから greatly satisfied と譯す。

16) 【背負ひたる包みを取卸し】=可成文字的に譯せば he let down the parcel from his shoulder ともいへるが寧ろ意譯して he put down his burden とする方が簡潔でよい。

17) 【南無阿彌陀佛と廻向し】=冥福を祈るといふ意味で praying for blessings upon the dead としたのである。

を見たので御座ゐます。

仁右衞門は伍助が何をして居るのかと、暫らく[19]ソツト窺ふて居りましたが、コリヤ[20]的切(てつきり)刑部の首を藏すのぢやと見て取りましたから喜んだ、玆で伍助の首[21]諸共に刑部の首級を持歸つて主君の實見に供へば莫大の御褒美に預ることは請合ひだと思ひましたから、[22]イキナリ現はれ出まして伍助に[23]鎗をつけました。

元來關ヶ原の戰は元太閤殿下の臣下共が敵味方に別れて戰つて居るので御座ゐますから、伍助も仁右衞門も舊識の間柄で御座ゐました。

仁右衞門は名代の勇士でこれ迄數度の戰を經て[24]未だ嘗て鎗を取つて引(ひけ)を取つた事は御座ゐませ

18) 【見附かりました】=was caught by 又は was discovered by といふのであるが此所では he caught sight of a man「他人の其處に居るのを見た」と譯した、意味に於ては少しも變らないから差支ない。
19) 【ソツト窺ふて居りました】=watched him for some time unperceived. 此の unperceived は人に見られない樣にとの意で「ソツト」を譯したのである、或は quietly, stealthily 等の副詞を用ゐてもよい。
20) 【的切り】=evidently 又た certainly, surely, ともいふ。

man; it was Tōdō Niemon. In pursuit of the defeated enemy Niemon happened to come there and to see Gosuke burying something in the ground.

He wanted to ascertain what he was really doing and *watched him for some time unperceived*, when he discovered that it was *evidently Gyōbu's* head that Gosuke had buried. He was delighted. If he were to take back the head of *Gyōbu together with* that of Gosuke and show them to his Lord, an enormous reward would surely be his. So he made his appearance *all at once* and *raising his spear, aimed a thrust at* Gosuke.

The battle of Sekigahara was fought between two parties of men who had all been the subjects of Prince Taikō. Therefore Gosuke and Niemon were old acquaintances.

Niemon was a celebrated warrior and had passed through several battles, and *not once* had he failed in

21) 【諸共に】=and では力が足らないから together with の句を用ゆ。
22) 【突然(いきなり)】=all at once=suddenly.
23) 【鎗をつけました】=raising his spear, aimed a thrust at. 此文にある a thrust を取つて其代りに it を入れても惡いことはないが鎗でつかうとするのだから a thrust を置く方がよい。
24) 【未だ嘗て】=not once を文の頭に置くと意味が強くなる、即ち he has never failed といふよりも not once had he failed

ん、伍助は又武藝に於ては仁右衞門より更らに一段上手で御座ゐます、左れば今仁右衞門が繰出したる鎗先に伍助は一突に上げられるかと思ひきや、[25]ヒラリと身をかはし早速に鎗の柄を引掴(ひんにぎ)ッた、仁右衞門も[26]大力無双の勇者なれば、ナンのと鎗を引き取ろうとしたが、伍助の力が優つて居るものですから中々取れない、仁右衞門は一生懸命になつて鎗を拔き取ろうと藻掻ゐて居ります、其時伍助は[27]仁右衞門の顔を見ながら靜かに「時に藤堂拙者は貴殿を武士と見て[28]御賴み申したい儀が御座るが聽許(きいれ)てはくださるまいか」と申しますと、仁右衞門は「如何にも[29]何事かは存ぜぬが、身に適(かな)ふことなれば御承諾(きいれ)申す」、と答へた。

ソコデ伍助は「然らば御話し申す、先刻拙者が

といふ方が非常に強い expression である。

25) 【ヒラリと身をかはし】=「ヒラリ」とは quickly 又は suddenly. 「身をかはす」は to turn 又は to dodge といふ、然し少し く面白き形容語を用ゐて譯すれば此處に譯出した樣に he turned his body as quick as lightning (電光の如く速かに) といふ。

26) 【大力無双の勇士】=a warrior of unusual muscular strength 井上十吉氏は之を a brave man of unparalleled strength と譯して居る。

a fight with his spear. But Gosuke was superior to Niemon in the art of handling the weapon. At first sight, it seemed as if Gosuke would be transfixed with Niemon's well aimed spear, but *he turned his body as quick as lightning* and at the same moment caught hold of the handle of the spear. As Niemon was *a warrior of unusual muscular strength*, he thought he could easily free his spear from the grasp of Gosuke, but he could not, for Gosuke was a man of still greater strength. Niemon got excited and was exhausting himself in the vain attempt to release his spear, when Gosuke, *looking him in the face*, said gently, "Look here, Tōdō; I take you to be a *bushi* and *I have a favor to ask of you.* Will you grant it?" "Indeed," responded Niemon, "I have no idea *what it can be*, but if it is a proper thing, I may grant your request."

"Well, then," said Gosuke, "I will tell you the

27) 【仁右衞門の顔を見ながら】=looking at Niemon's face では只ボンヤリ顔だけを見て居たといふて甚だ弱い、然るに之を looking Niemon in the face と云ふと顔が目的でなく先方の心の中まで自分の思を浸み込ませる樣な强い心持が表はれる。

28) 【御賴み申したい儀が御座る】=I have a favour to ask of you 又は I have something to ask of you.

29) 【何事かは存ぜぬが】=what it is と云ふよりも what it can be と云ふ方が疑の意味大に强くなる。

茲に塡めたものは主人大谷吉隆の首級で御座る、全體拙者は主人と共に討死の覺悟で御座つたが[30]主人の御眼識により首級を敵の手に渡さぬ樣に立退けとの御仰を蒙りたれば主命默し難く此所まで落延びた次第、貴殿は既に何も彼も御覽せられたであろうから、拙者此所にて自害致すべければ、貴殿は余の首を持歸りて之れを[31]御邊の手柄となされよ、さりながら萬望主人の首級を此所に埋めたことは御他言無之樣願ひたゐ、これは伍助が[32]貴殿を武士と見込んで今生の願ひで御座る」と申しました。

眞率忠誠の溢れたる伍助の語を聞きまして仁右衞門は孌々其忠義の程に感じましたから「ヨシ御邊の心中確と汲み取つた、[33]御約束申す、[34]假令一命に係はる場合にも此儀は決して他言は仕らぬ」と申しました。

伍助は善く仁右衞門を知つて居りますから今彼

30) 【主人の眼識により】=he entrusted me with の言葉の內に此意味の含まれ居る事に注意せよ、但し眼識は judgment.

31) 【御邊の手柄となされよ】=use it for your own benefit (之を以て汝の益とせよ) 又は make use of it to serve your own ends.

32) 【貴殿を武士と見込んで】=fully trusting that you have the soul of a *bushi*. 「見込んで」は fully believing that ともいふ。

33) 【神命に盟つて御約束申す】=I promise you in the name of

truth. What I have buried here is the head of Ōtani Yoshitaka, my Lord. I had determined to die with him, but *he entrusted me with* the mission of carrying off his head so as not to let it fall into the hands of the enemy. In obeying his command I ran here. You must have seen all I have done. I will now commit suicide, and you may carry off my head and *use it for your own benefit*, but pray do not tell any body that I have buried my Lord's head. This is the last favour that Gosuke asks of you, *fully trusting that you have the soul of a bushi.*"

Hearing these words so full of earnestness and sincerity, Niemon was greatly impressed by the loyalty of Gosuke and said to him, "Yes, I understand you. *I promise you in the name of Heaven* that I will never tell any one *though it may cost me my life.*"

As Gosuke knew Niemon well, he was perfectly

Heaven. 盟ふは to swear であるから「神命に盟ふ」は I swear to Heaven といふべきである然し in the name of Heaven といふ句も屢々用ゆる。

34) 【假令一命に係る場合にも】=though it may cost me my life. 日本語では「一命に係る」といひ英語では cost one one's life といふ、言ひ方は異なれども意味は一つである。

35) 【鎗を放し】=let go of the spear. 「放す」は let go か let loose といふのが適當である、「手を放す」は to let go one's hold 又は to quit one's hold. 「鳥を放す」は to set a bird free

れの答を聞て滿足致して[35]鎗を放し、短刀の鞘を拂つて今や自殺に及ばんとする時、[36]南無三、仁右衞門の後に一人の家來が立つて居りました、仁右衞門も伍助も此時は家來の居つた事が氣附かず何時來たのやらも知りません、伍助は落膽致しまして短刀を元に收めて申すやう「扨仁右衞門、貴殿の好意は萬〻忝いが、玆に又一ツ困ッたことが出來たから[37]先程からの事は止めにしやう」と、之れを聞ゐた仁右衞門の家來は刀を拔くより早く其腹に衝つ立てた。

仁右衞門は伍助が不思議相に自分の方を見て居るものですから何事かと振返つて見て驚ゐた、ソコデ家來の許に駈け寄り「如何が致した、[38]何故に自害に及んだ」と詰(なじ)りますと「イヤ御兩所の御話を逐一承はりまして其御[39]節義に何とも感服い

「矢を放す」は to shoot (又は let fly) an arrow である。

36) 【南無三】=驚きの辭であるから to his great surprise と譯した、之を感投詞にすれば great heavens! とか goodness! とか gracious! とか色々ある。

37) 【先程からの事は止めにしよう】=相談した事、賴んだことを徹回するとの意であるから I withdraw what I said と譯した。

38) 【何故に自害に及んだ】=what makes you commit suicide? 日

satisfied with his answer and *let go of the spear*. Immediately after he drew his short sword and was about to kill himself. Then *to his great surprise* he saw a retainer of Niemon standing behind his master. Neither Niemon and Gosuke had been aware of his presence up to that moment, nor did they know when he came there. Gosuke was sadly disappointed and put his sword back into its sheath, and declared, "Well, Niemon, you were kind enough to grant my request, but now I have something else that worries me, so *I withdraw what I said*." The servant of Niemon, hearing this, drew out his sword and thrust it into his own abdomen at once.

Niemon's attention was called to this action by observing that Gosuke was looking curiously at something behind him. Niemon was astonished and rushed to the side of his servant, and said, "What's the matter? *What makes you commit suicide?*"

本語には此の形の expression はないが英語には屢々ある「ナゼそう思ふか」を what makes you think so といひ「何がおかしいのか」を what makes you smile といふが如し。

39) 【節義】=fidelity 又は faithfulness.

40) 【口外する】=to make public と譯す、是は發表するといふ時にも用ゆ、「口外す」は to disclose とも云ひ to mention to others ともいふ。

41) 【御兩所の節義を全くなさせ申したい】=此の「全くさせる」

たしました、就ては斯く御兩所の御話を聞取りました此下郎が若しや此事を[40]口外致しはせぬかとの湯淺殿の御疑念を起し且其御疑念の起るのも御最のことゝ存じましたから玆に身を殺して[41]御兩所の節義を全くなさせ申したゐと存じたからで御座います、ドーセ人間は死ぬべきもの、義に死するは[42]本望で御座ゐます」と申しながら[43]腹一文字に切ッて[44]亡せました。

伍助はアヽ惜しゐ事をした、斯樣な忠正律儀な者と知つたなら敢て懸念するにも及ばなかッたものをと思ひましたが[45]最早仕方が御座ゐませんから、再び刀を取直して覺悟の通り自害致しました。

との意を强く表はさん爲め to carry cut.....to your heart's content (滿足するほど)と譯したのである。

42) 【本望で御座います】=I am more than satisfied の more than は日本でいふ十二分と云ふ樣に satisfy (滿足)を强める語に當るのである。

43) 【腹一文字に切つて】=之を直譯的に云へば he cut his abdomen in a straight line であるが abdomen の語を用ゆるは聊か上品でない又た in a straight line も餘りに直譯的であるから之を變じて he completed the cut across his stomach

"Why," replied the servant, "I overheard all that you have been saying, and I am greatly impressed with the *fidelity* of you two to each other. Now I noticed that my having overheard your conversation caused anxiety in the mind of Yuasa *Dono* as to whether I might not *make public* his secret, and I thought that his doubt was quite reasonable. So I considered it best to kill myself so as to allow you both to *carry out your ideas of fidelity to your heart's content*. We are mortal, and *I am more than satisfied* to die for the good of others." So saying *he completed the cut across his stomach* and *gave up the ghost*.

Gosuke regretted the noble servant's death and thought that he need not have worried if he had known he was such a faithful and genuine soul. But *there was no help for it*. So once more he took up his sword and committed suicide as he had intended.

としたのである、此の across の語によつて一文字の意は現はれる。

44) 【亡せました】=gave up the ghost. 此の死ぬるといふ言葉は日本語にも色々云ひ樣がある、或人は數へて八十一種類もあるといふ、英語にも隨分澤山ある例へば (1) to breathe one's last, (2) to cease to live, (3) to depart this life (4) to be no more, (5) to take one's last sleep 等。

45) 【最早や仕方が御座いません =There was no help for it 又は It can not be helped 又は You can't help it.

仁右衞門は [46]目の前に二人迄の死を見て痛く[47]人生の無常を感じ、稍暫く茫然として節義の爲めに死んだ二人の上を思ひながら佇立つて居ましたが、斯くてあるべきにあらねば [48]涙を揮つて伍助の首をはね、本陣に歸つて家康公の見參に入れました。

家康は伍助の首を見て仁右衞門に申さるゝ樣「仁右衞門、其方伍助を討取る段[49]天晴である、が併し刑部の寵臣伍助を討取るからには彼の討死の場所や其模樣は承知致して居るであろう、逐一予に話して聞かせよ」と上意が御座ゐました。

仁右衞門も最早包み切れませんから刑部の首を埋めました所だけは申しませなんだが始終の話を言上いたしました。

「然らば其首を掘ツて參れ」との上意、仁右衞門は假令一命に係はつても他言せねと伍助に盟つた

46) 【目の前に二人までの死を見て】=saw the two men die before his eyes. 此の saw と die の動詞に注意を要す、英語で五官の感覺に屬する動詞 (see, hear, feel, touch 等) の場合、之につゞく他の動詞は其前に to を取らないのである、I heard him sing とか I felt some one touch me は其例である。

47) 【人生の無常を感じました】=無常は移り變りて常なしといふ意味なれば transitoriness といふのが字義に適ふ、然し亦無常といふ中には悲哀の意味を含んで居るから之を the

Tōdō Niemon *saw the two men die before his eyes* and felt keenly *the tragedy of human life*. He stood aghast for a while thinking of the two men who had died for loyalty. Then he *reluctantly*. cut off Gosuke's head and carried it back to the encampment to show to his Lord Ieyasu.

When Ieyasu looked at Gosuke's head, he said to Niemon, "Well, Niemon, *you deserve praise* for killing Gosuke, but if you have thus seized Gosuke, the most trusted retainer of *Gyobu*, you must have known where and how Ōtani died. Tell me what became of him."

Niemon could no longer conceal the fact, and so he confessed and told the whole story excepting that he did not disclose the place where Gyobu's head was buried.

"Then," said Ieyasu, "dig out the head and bring it here." But Niemon refused to do so, remembering

tragedy of human life と譯したのである。

48) 【涙を揮つて】=reluctantly で譯されて居る、此の字は不本意ながら或は渋々との意である。

49) 【天晴れである】=此の句は他の所では admirable 又は remarkable と譯したが此所では意譯して You deserve praise とした、即ち茲に「天晴れである」といふたのは其手柄を賞むるの意である。

50) 【思ひも寄らぬ次第】=not even think of. 此の think の代りに dream(夢む)の字を用ゐても可い。

件が御座ゐますから其儀は御免を蒙むりたいと、誓を重んじて首の在處を申上る事は勿論、夫れを掘出して見參に供ふるなど[50]思ひも寄らぬ次第で御座ると明かに申上げた。

家康は立腹いたして其約束は私事である、軍法を以て云へば其所在を知りながら敵將の首を持參らぬ節には重罪に處すべき者であると申しました。

就ては[51]篤と勘考して思ひ直す樣、然らざれば不忠の罰免かれ難く且軍律を破る罪許し難き由諭しましたが、仁右衞門は確く[52]節義を持して主命に從ひません。

ソコデ家康は[53]倍々仁右衞門を詰問致して「汝

51) 【篤と勘考して】=to think it over. To think over は色々考へ見ること、To talk over (相談する)と云ふ類似の熟語がある。
52) 【節義を持して】=stuck to the principle of fidelity. 此の to stick to は固持するの意、to cling to も同意義である、to adhere to 又は to hold fast 等の言葉も持するとの意味である。
53) 【倍々仁右衞門を御詰問遊ばして……と御迫りなさいました】=英語では此の二の文句は皆詰問の言葉の前に置く Ieyasu pressed him (詰問した) still further (倍々) and put

that he had promised Gosuke to keep the matter secret even at the cost of his own life. He told Ieyasu plainly that because of his promise he would not reveal where the head was buried, and so he could *not even think of* digging it out and presenting it to him.

Ieyasu was displeased with his excuse and said that his promise to Gosuke was a private affair, and that the military law was such that if he declined to bring the head of the enemy's general when he knew where it was, he would have to suffer a severe punishment.

So he advised Niemon *to think it over* and change his mind, or he would have to be punished as a disloyal subject, as well as a violator of the military law. Neverthless Niemon *stuck to the principle of fidelity* and did not yield to his Lord.

Ieyasu pressed him still further and put the fol-

the following sharp question to him (「御迫りなさいました」の意譯)。
54) 【熱湯を浴せらるゝ思ひで御座りました】=文字的に譯せば he felt as if boiling water had been dashed upon 又は he felt that he had indeed got into hot water である、然し此處には trying の一字を以て其意を譯したのである、此の字は元來試みる、ためすといふ意味で人の忍耐力の極度を試驗する樣な苦しい思といふ意味であるから熱湯を浴せらるゝ

は伍助への誓約と主命といづれが大事と心得る、萬一汝が伍助の誓約を重しとし主命を輕んずるに於ては其罪萬死に當るぞよ」と迫りました。

此言葉は仁右衞門に取つては[54]熱湯を浴せらるゝ思ひで御座ゐましたが仁右衞門は尙[55]頑として應じませんから、家康も終に非常に立腹して、有あふ鎗をオツ取り[56]モ早やこれ迄じや、予が手討に致す、凡そ主命を輕ずる者は皆死罪に行ふのじや」と申しながら鎗の穗先を仁右衞門の胸に向はせられた。

最早これ迄と思ひましたから仁右衞門も度胸を据えて「然らば快く御手討に預りたゐ、手討になつて[57]不忠の罪の贖はるゝ次第なれば[58]身に取つて此上なき仕合せと存じ奉る、一旦友と盟ゐて一生

といふ如き强き意味を含んで居る。

55) 【頑として】=これは副詞で現せば firmly, resolutely, strongly 等である、然しこゝには he stood firm (堅く立て動かずの意)の句を以て譯した。

56) 【モ早これまでじや】=之を文字通りに譯しては意味が通じない、鳥渡これと同じ樣な所に用ゆる英語に that's the end of it といふ言葉があるから先づこれが適當な譯である、或は意譯して No help for it (是非に及ばぬ)、又は同じ意味

lowing sharp question to him, "Which do you regard as the more important matter, your promise to Gosuke or your Lord's command to you? If you think so much of your promise to Gosuke and make light of your Lord's command, your offence is by no means pardonable."

This appeal was indeed very trying to Niemon, but still *he stood firm* to his conviction, and rejected the appeal like a man. Ieyasu became furious at last and took up a spear, saying, "Then *that's the end of it.* I will now kill you with my own hand. One who has slighted his Lord's command deserves capital punishment." With these words Ieyasu directed the point of the spear to the heart of Niemon.

As there was no longer any help for him, Niemon said to his Lord boldly, "Then I shall be willing to be killed by your hand, and *if this should lessen at all my sin of disobedience, nothing could be more*

で there is nothing else to be done の句を用ゐてもよい。

57) 【不忠の罪の贖はるゝ次第なれば】=if this should lessen at all my sin of disobedience. 此の lessen は「減ずる」との意にて「贖ふ」といふ文字でない、「贖ふ」は atone である、然し此所では lessen といふも矢張り atone の意味になるのである。

58) 【身に取つて此上なき仕合せと存ずる】=I should consider it most fortunate と譯しても可い、然し「此上なき云々」の意味を現はすには茲にいふ如く nothing could be more satisfy-

を掛けても他言いたさぬと約した以上、拙者は其約を破り武士の名を汚すことは如何なることになつても罷り成りませぬ」と申しながら[59]泰然自若として家康の前に坐を占めて成敗を待ちました。

[60]スルトこは不思議、突然鎗を投げ出して「天晴々々[61]ソレデこそあれ、汝は武士の鑑じや」と申され痛く御賞美相成り、再び鎗を取上げ之れを仁右衞門に下され、尙褒狀に添えて莫大なる賞與を下されました。

---

ing to me といふ方がよい。

59) 【泰然自若として】=perfectly calm and self-possessed. 泰然自若の意味は calm; composed; collected; self-possessed 等何れの語でも表はされ得るのであるが泰然と自若と二つを連ねていふには perfectly calm and self-possessed とするがよい。

60) 【スルトこは不思議】=then(スルト), who would have thought it! (こは不思議)、不思議とは wonderful 又は strange であるから「こは不思議」を How strange 又は how wonderful といふべきであるが、本文にいふ此句は思ひがけもない、思ひもよらぬとの意味に於て「こは不思議」といふたのであるから who would have thought it と譯した。

61) 【それでこそあれ】=that's it とか that's the true samurai とか云へば文字の上に於て近いけれども非常な賞讃の言葉として英語には Praise be to thy spirit といふ風な慣用句がある、本文の譯として之を用ゆるが適當である。

satisfying to me. Once I made a promise to my friend to give up my life rather than tell his secret to any one; now I can not break my promise and stain my honor as a *samurai*, no matter what the consequences may be of keeping my word." So he took his position just in front of Ieyasu, *perfectly calm and self-composed*, and ready to be killed.

Then who would have thought it! Ieyasu all of a sudden threw down his spear, and exclaimed, "Bravo, bravo! *Praise be to thy spirit!* Thou art a model *samurai!*" With these words of approval, he took up his spear again, and made a present of it to Niemon. Moreover, a great reward in money with a written statement of merit was handed to him.

第六章

明將

北條早雲

今より約そ五百年前北條長氏と申す豪傑が居りました、元一國主の子息で御座ゐましたが、[1]修業のためとあつて暫らく他の國主の許に[2]寄食の身となつて居りました。

當時[3]足利氏の權勢漸く地に下ちて、諸侯各一方に割據し、他を併呑して[4]天下に號令せんとして居りました、長氏も亦[5]日頃の大志を爲すは今日と心得ましたから、國中の地理を知り、又密かに諸侯の[6]動靜をも探らばやと存じて遍歷の途に上りました。

1) 【修業の爲めとあつて】=in order to discipline himself 又は for the sake of his own discipline とも云へる。

2) 【寄食の身となつた】=subjected himself と譯してあるのは仕へたとの事である、寄食の身とは a parasite; a hanger-on などいふ文字があれども長氏が他の國主に仕ふる身となつたといふ場合には寧ろ不適當の文字である、衣食に究して人の厄介者となる場合に a parasite, a hanger-on の字を用ゆるのである。

3) 【足利氏の權勢漸く地に下ちて】=The power of the Ashikaga

CHAPTER VI

Hōjio Sōun, A General of High Character.

About five hundred years ago there lived a great hero named Hōjō Nagauji. He was the son of a feudal lord, but had *subjected himself* for a time to another lord in order to *discipline himself*.

At that time *the power of the Ashikaga was hastening to its fall*, and many feudal lords had established themselves in various parts of the country, each attempting to swallow up the others and *bring the whole country under his subjection*. Nagauji too had formed a resolution to accomplish

was hastening to its fall 又は fast declining といふても差支ない。

4) 【天下に號令せんと】=to bring the whole country under his subjection.「號令する」は to command 又は to give the word of command であるが茲には意譯して to bring the whole country under his subjection とした方が分り易くてよい。

5) 【日頃の大志】=something which he had long had in his mind. 之を約言して his long-cherished idea (又は desire) とする

7)此際に於ても長氏は須臾も德を修むるの道を忘れませなんだ、之れは長氏が事の成功の秘訣は高貴の德を具ふることにあつて、腕盡(っでつく)でもなければ又學問でもないと確信して居つたからで御座あます。

ソコデ諸國を遍歷して丁度箱根山の頂上に參りました、玆は 8)遠州灘より掛けて渺茫として際涯なき大洋を 9)一目に見渡し得る形勝の地で御座あます、長氏は玆に腰打掛け百事を忘じて10)深遠なる冥想に耽つて居りました、軈て私語すらく。

『嗚呼雄大なる大洋、所謂「百川海に注げども

も可い。

6) 【動靜】=これは condition 又は state といふ、然し友人に折々君の動靜をきかしてくれなどいふ場合には state や condition と云はず all about yourself とか everything you are doing とか all your doings とか how you are gething on とかの慣用句を用ゆ。

7) 【此際に於ても】=even in such a time でもよいのであるがこの場合に in the meantime を使ふも適譯である、兎角我國の學生は此の in the meantime の句を適當に使ひされぬ樣である。

something which he had long had in his mind, and so he traveled about to acquaint himself with the topography of the country and to ascertain secretly the *condition* of his rivals in different places.

But *in the meantime* he never forgot even for a moment his own moral education. It was his firm conviction that a high and noble personality, not ability nor learning, is the secret of success in every thing.

While traveling about, he once happened to come to the top of the Hakone mountains *which commands a glorious view of the boundless ocean beyond* the Enshu-nada. There he sat down and *spent hours in deep and profound meditation*, forgetting every thing else. The soliloquy he uttered then was something like this.

"What a grand ocean! I recall the old saying,

---

8) 【遠州灘より掛けて】=「かけて」といふ言葉が beyond といふ一字の前置詞で譯されて居る。

9) 【一目に見渡し得る形勝の地】=which commands a glorious view. 「見渡す」は command a view といふ、「形勝の地」は譯さなかつたが glorious の語の中に幾分か其意味が表はれて居る。

10) 【深遠なる瞑想に耽つて居りました】=spent hours in deep and profound meditation. To spend hours は「時を過す」であつて「耽ける」とは absorbed in. 然し意味は同じことになる。

海爲めに溢れず」とは玆だ、人間も此大海廣濶の心魂を抱かねば大事は上げ得らるゝ者でない、[11]此天空の渺漠たる、此蒼海の深遠なる、好個大人の表兆だ、彼の[12]些事に苦しみ又容易に恚る輩や、[13]遭ふ人毎に愛憎の色を示す徒や、小事をも意に介するの徒や[14]他の非を上げて喜ぶの輩や、如此の人物は皆衆庶を統御するに足らぬ者共じや、嗚呼廣大なる洋海、[15]塵埃も受くれば泥も容れる、然も自からは濁らざるなり、此天空廣漠の大容は感嘆に餘りある、其風靜かなる時は佛顏の靜穩、和平なるが如く、[16]其一度風波を上ぐるや百雷の轟くが如く咆哮畏怖に堪えざらしむ、これぞ眞英雄の心懷である、[17]予も亦如此の心懷を得たいものである。』

「百川海海爲不溢」

11) 【此の天空の渺漠たる、此蒼海の深遠なる】=斯る文章を This large sky and this deep sea といふては意味は分つても文章餘りに平易にして力がない、然るに之を The expanse of the sky and the depth of the sea と云へば原文に相似たる美辭となるのである。

12) 【些事に苦しみ】=easily vexed. 「些事に」が easily の一字で譯されて居ることに注意を要す。

13) 【遭ふ人毎に】=偶然出會ふ人といふ意味で chance comer と譯した他の言葉に云ひ換ゆれば every body they meet.

14) 【他の非を擧げて喜ぶの輩】=those who delight (喜ぶ) in

'Hundreds of rivers run into the sea, but the sea never overflows'. A man can not accomplish anything great unless he has a soul as great as this ocean. *The expanse of the sky and the depth of the sea* are fit emblems of a great man's heart. Those who are *easily vexed* or easily provoked; those who openly show their likes and dislikes to any *chance comer*; those who are so small-minded as to be always looking for little faults; *those who delight in publishing the faults of others*;—such men can never be rulers over the people. Oh, what a vast ocean! *Thou acceptest dirt and mud*, but dost never get muddy thyself. I admire thee for thy *toleration*. When there is no wind, thou lookest like Buddha's face, calm and peaceful; but *the moment the wind rises*, thou roarest like the roll of many thunders, terrible and ferocious. Such is the

publishing (擧げて) the faults of others (他の非を)、to publish は公にす、人に知らすの意にてこゝでは出版すの意でない、他の言葉で云へば to make known, to speak of, to announce, to spread abroad ともいふ、即ち「吹聽す」との意味である、此の吹聽すとの英語に面白き熟語がある、to proclaim from the house tops; to send round the criers; to announce with beat of drum 等。

15) 【塵も受くれば泥も容れる】=Thou acceptest dirt and mud. これは古文の形、you accept といふよりは壯麗に聞へる、第二人稱單數の動詞には st を第三人稱單數には th を

長氏は斯く冥想に耽つて居りましたが、[18]恍惚として此大觀に醉ふて仕舞ました、[19]スルト不意に三四人の盜賊共現れ來つて長氏を襲ひました、當時戰國の際とて[20]盜賊國中に横行して居ましたが、今其一隊の者共が漂泊して箱根山に差掛つて參りました所、路傍(ぶちばた)近き所に金銀を鏤めたる大小を差した立派な服裝(みなり)をした侍が、石に腰掛け[21]獨り言を云ツて居りますから、コリヤ[22]善ゐ鳥が掛つたと思つた、ソコデ頭の目配によつて皆々長氏の傍に參つて、一人の子分が

「ヤイ貴樣は何誰だ、此所らあたりは己れ樣達の[23]縄張内だ、可愛想に掛ツた鳥だ逃(のが)れツこはないや、最早仕方はない、[24]大小其外衣類を殘してサツサと立去れ、グズグズして居りや生命(いのち)はねーぞ[25]サー裸體(はだか)になれ」

附す。

16) 【其一度風波を上ぐるや】=The moment the wind rises. 此の上ぐるやといふ如き勢の文は when……といふより the moment……といふ方が適當である、the moment は何々するや否やの意味である。

17) 【予も亦如斯の心懷を得たいものとや】=May Heaven grant me such a mind. 此の May Heaven grant は祈の文句にて「願くは」の意味。

18) 【恍惚として】=spell-bound. 此の字は寃がさした又は何々に

mind of a true hero. *May Heaven grant me such a mind.*"

Thus meditating, Nagauji was *spell-bound*, completely fascinated by the sight of the ocean, *when all of a sudden* some robbers came and attacked him. As it was an age disturbed by war, the *country swarmed with robbers*, and a band of those robbers, while wandering here and there, happened to pass over the top of the Hakone mountains, and saw a short distance away a finely dressed *samurai* wearing a pair of gilded swords, sitting upon a rock and *muttering to himself*. They thought *he would be good prey*. At a wink from their chief, they approached Nagauji, and one of them said to him, "Who are you? The place around here is *under our inspection*. You are an unfortunate bird, and you can't escape. There is no help for you. *Leave with*

取りつかれたといふ意味で恍惚との意になる。

19) 【スルト不意に】=此の「スルト」は and then といふより when といふ接續詞に譯した方が善い「不意に」は all of a sudden.

20) 【盜賊國中に横行す】=the country swarmed with robbers. 國中盜賊を以て充滿すとの意にて原文とは少し云ひ方は異なれども意味は同じことである、「横行」は to prowl about であるから robbers prowled about throughout the country と譯しても可い。

21) 【獨り言を云つて居る】=muttering to himself. 此の muttering

と申しました。

長氏は有名な劍客で御座ゐましたが、盜賊どもの言葉は耳にも容れず、元より少しも意に留めません、尙只管大洋の方を眺めながら前の樣に自語して居ります、盜賊共は長氏に迫つて幾度も大音にて同じ事を怒鳴つて居ります、長氏は今や[26]一生懸命に精神修養の大事を行ふて居るので御座ゐますから、盜賊共と[27]應對して居るどころでないと思つて[28]云ふが儘に唯「蒼蠅奴だな」と呟きながら、立派な大小も衣服も皆放り出して仕舞つて[29]裸體のまゝ、岩に腰掛けて又々瞑想に耽りました。

はブツブツいふとの意、之に to himself（自分に）を附すれば「獨り言をいふ」となる、又は muttering something to himself とも云へる。

22）【善い鳥がかゝつた】=he would be good prey. これは意譯でも餘程似寄つたものと云はねばならぬ、只 tense の用方は特に注意して置かなければならぬ。

23）【繩張內】=他の所で our field と譯したが此處では under our inspection とした、これは我等の監督して居る所と云ふ意味で繩張りといふことになる。

us not only your two swords but also all the clothes you wear, and go away quickly. If you loiter around here any longer, you may lose even your life. *Come, undress yourself* at once."

Nagauji was a celebrated *kenkaku* and did not even listen to what they said to him, paying not the slightest attention. He was still looking towards the ocean and muttering as before.

The robbers pressed upon him and repeated the words at the top of their voices. Nagauji, *being seriously engaged in* the important task of self-culture, did not think it *worth while to argue the matter* with the robbers, and *gave way to them,* simply saying, "You are annoying fellows." Then he threw off his precious swords and his garments as well. *Naked as he was,* he continued to sit upon the rock and again lost himself in thought.

24）【大小其他衣類を殘してサツサと立去れ】=leave with us（我々に殘せ即ち我々の手に渡せとの意）not only your two swords but also all the clothes, you wear, and go away quickly.「サツサと行け」を尙ほ荒かましく云ふには be off とか be gone とか云ふのである。

25）【サー裸體になれ】=come,（サー）undress yourself（裸體になれ）、之を become naked などいふは直譯でよくない。

26）【一生懸命に精神修養の大事を行ふて居るので】=being seriously（眞面目に；一生懸命に）engaged in（行ふて居る又

[30]斯く精神修養に意を注ぎましたものですから長氏は終に其天分を完ふし大諸侯となりました、長氏は實に武將として傑出して居た人で御座ゐましたが、高貴達德の士としては更らに卓越した人で御座ゐました。

ソコデ彼が旗上げを致しまするや、風を望んで來集する者雲の如く[31]彼の爲めに喜んで皆犬馬の勞を取りました、又彼れが關八州を統治するに至るや遠隔の庶民其德を慕ふて陸續として其城下に移住し來りました。

斯くて晩年に至り長氏は佛道に歸依し雉髮して早雲と稱しましたが、其芳名今尙世に傳へて[32]懦夫をして起たしむるものが御座ゐます。

た occupied with ともいふ) the important task of self-culture. (精神修養の大事)。

27) 【應對して居る所でない】=not worth while (所でない) to argue the matter (兎や角やと議論する即ち應對するとの意)、之を not worth while to converse with とも云へる。

28) 【云ふが儘に】=gave way to them. 此は對手の力に屈服するとの意味で人の云ふに任せて之に應ずとの事になる。

29) 【裸體のまゝ】=naked as he was. 此の句の as は此所では although ではなく「まゝ」といふ意味に用ゐたのである。

As the result of such strenuous efforts for self-culture, Nagauji accomplished at last his great mission and made himself the greatest Daimyo in Japan. He was indeed great as a brave warrior, but more as a man of high and noble character.

So when he raised his standard, a large number of his admirers gathered round him and *volunteered to fight for him;* and when he became a ruler over the eight provinces of the east, many people came from distant parts of the country to reside under his administration.

Later on in his old age, Nagauji was converted to Budhism and became a devoted Budhist under the name of Shōun. His name is still a source of inspiration to our nation.

---

30) 【斯く精神修養に意を注ぎましたものだから】=As the result of such strenuous efforts for self-culture. As the result が「したものだから」に當る、of such strenuous efforts は「斯く意を注ぎました」に當る、strenuous efforts は努力の意。

31) 【彼の爲に喜んで犬馬の勞を取る】=volunteered (進んで申出づる即ち喜んでとの意) to fight for him (犬馬の勞を取るの意譯)。

32) 【懦夫をして起たしむ】=a source of inspiration. 此は無論意譯である、文字的に譯せば to arouse the idle men to action である。

和文英譯練習問題及解答

第一章之部

1. 小栗判官は馬術の名人でありました。

Oguri Hangwan was an expert in horsemanship.

【同意句】 Oguri Hangwan was a master of horsemanship.

2. シケロは古今無双の雄辯家と云はれて居ります。

Cicero is said to be an orator unequalled in all ages.

【同意句】 It is said that Cicero was the most eloquent speaker that has ever lived.

3. 太郎の學問は次第に上達して參りました。

Tarō has made a steady progress in his study.

【同意句】 Tarō has lately been making progress in his study.

4. 彼は都會に出でゝゆくゆくは大に名を成さうと志しました。

Coming out into the city, he has made up

his mind to make himself famous in the years to come.

【同意句】 Making his appearance on the stage of the metropolis, he resolved to make himself famous in future.

5. 東京に着いた時には囊中空しくなつて居ました。

I was penniless by the time I arrived in Tōkyō.

【同意句】 I was quite out of pocket when I came up to Tōkyō.

6. 彼は着物を賣拂つて宿錢を拂ひました。

He sold his clothes in order to pay his bills at the inn.

【同意句】 He disposed of his garment to settle his hotel bill.

7. 書物を賣れば多少の金は出來たのだが彼はそれはせなかつた。

Had he sold his books he could have gotten some money, but that he could not do.

【同意句】 If he would sell his books, he could raise some money, but he did not take such a step.

8. 彼の男は豪傑肌だから金のない位は平氣です。

Being a man of heroic nature, he is indifferent to any such thing as having no money.

【同意句】 Being a hero in disposition, he did not worry himself about the want of money.

9. 學者と云ふ者は金儲けの道には暗ゐものである。

Scholors are supposed to be ignorant of the art of money-making.

【同意句】 A man of learning is ignorant of the way to make himself rich.

10. 井上も無鐵砲だ前後の考へもなく洋行して仕舞つた。

I should say Inoue was rash; he has gone abroad with very little consideration for the future.

【同意句】 It was rash of Inoue to go abroad with no definite plan for the future.

11. 彼の男は渡米後途方に暮れて大變難儀をした相だ。

It was told that after he had gone over to America he had a terrible time, not knowing what to do.

【同意句】 I hear (they say) that after he

reached America, he found himself in the wrong box and had a hard time.

12. 彼の地の人々は見ず知らずの人々ゆえ事情を掬んでくれません。

The people in that place, being perfect strangers to him, would not sympathise with his circumstances.

【同意句】 All the people there, being strangers to him, did not help him at all.

13. 友人等が各五圓宛助けてくれました。

Some of my friends have helped me with 5 yen each.

【同意句】 Some of my friends gave me 5 yen each to help me.

14. 先生は地震の時にも自若として讀書して居られました。

I saw our teacher calmly read on even during the earthquake.

【同意句】 I noticed our teacher calmly reading even at the time of the earthquake.

15. 寢坊山が餘りよく寢て居ましたから揶揄始めました。

We began to tease him as the sleepyhead was sleeping like a top. (see note 16)

【同意句】 We began to chaff him as he was fast asleep.

16. これは面白い悪戯半分にやりたまへ。

This is jolly; try it just for fun.

【同意句】 It is amusing; do it half in fun.

17. オヤオヤ局面一變か、これやたまらない。

Oh, mercy, the things have been overturned. This is dreadful.

【同意句】 The table has turned; (see 9 の十八) this is too much for us.

18. 彼の男も餘程怒つたと見えて先方の無禮を許さなかつたよ。

I think that he got pretty mad, for he would not overlook the other fellow's insult.

【同意句】 I think he got very angry; he would not excuse his impudence.

19. 僕はナンノ彼の位な人物がと思つて居たから平氣だつた。

As I did not regard him very strong, I was absolutely unconcerned.

【同意句】 As I slighted him, I was not in the least disturbed.

20. 荒井は衣服を脱ぎ眼に物見せてくれんずとザンブと海に飛び込んだ。

Leaving off his clothes, he flung himself into the sea to show off his skill.

【同意句】 He undressed himself and sprung into the sea, to prove to them what a kind of man he was.

21. ソリャ面白いと數十人の見物が群がつて來た。

Thinking it a great excitement, several scores of people came out to see it.

【同意句】 Thinking it a great fun, a great many people gathered to see it.

22. 彼は淤泳の極意によつて難なく怒濤を乘切つて向ふの島根に達した。

After the manner of a skilful swimmer, he reached the island across, cutting past through the rolling waves.

【同意句】 By the art of swimming, he got to the island beyond through the high seas.

23. 冬の遊戯では雪投げが一番面白い。

One gets more fun out of snow-balling than any other sports for winter.

【同意句】 The snow-balling is best as a winter sport.

24. あの逃げて行く樣は蜘蛛の子を散らす樣であ

る。

How they are scared away in all direction.

【同意句】 They scattered like a nest of spiders.

25. 丁度善い時に金が着いた。

The money has come just at the right moment.

【同意句】 I have got the money just in the nick of time.

26. 彼の時彼の男は全く器量を上げた。

He has then for the first time shown his true metal.

【同意句】 He made an inprovement in his appearance at that time.

27. 甚だ失敬だが僕の好意だから受けてくれ玉へ。

Be so good as to accept this as my favour.

【同意句】 Kindly accept this as a token of my ~~good wishes~~. favor

28. ソンナ事は學生同士の好誼じやないか。

A thing like that is a common deed of friend-ship.

【同意句】 Such a thing is not an unusual deed among friends.

29. 就いては君に相談したいことがあるんだが聞いてくれるか。

Now I have something to consult you about, will yon listen to me?

【同意句】 I have something to take your counsel, kindly listen to me?

30. 國民の推擧によつてワシントンは大統領に就任した。

At the request of the nation, Washington ascended the official of president.

【同意句】 Urged by the voice of the people, Washington stepped into the Precident's chair.

31. 此山水の風光の美麗なること言語に絶して居る。

The beauty of this landscape is really beyond description.

【同意句】 It is difficult to find adequate words to describe the beauty of the view.

32. 將に敗れんとした我校の選手等は操艇の秘術を盡して終に勝を制した。

The picked team of our school at the point of defeat won the day by the use of the secret art of rowing.

【同意句】 Our best men just pulled the race out of the fire by thier skill in handling the oar.

33. 先生の盛名天下に傳はり各學校から競爭的に招聘して來る樣になつた。

His reputation has spread far and wide, and now all the schools are competing with one another to engage him.

【同意句】 His reputation is so wide spread that every school is eager to employ him.

34. 初めは口論だつたが終に腕力に訴へた。

First they disputed, then resorted to force.

【同意句】 From words they came to blows.

35. 百雷の一時に落つる樣だつたと云へば虛構の樣に聞へるが實際ソーだつた。

It may sound incredible to say that it was like the sound of 100 thunderblots striking all at once, but it was really so.

【同意句】 Incredible as it may sonud, it was as if 100 thunderblots had struck simultaneously.

36. 楠公の湊川の戰が文字通りの一騎當千の働らきである。

Nanko's struggle at the battle of the Minatogawa was in very deed a fight of one man against a thousand.

【同意句】 At the battle of the Minatogawa,

Nanko was one man contesting with a thousand enemies.

37. 學生日常の生活に就て見れば修養の辛苦は直に分かることでないか。

If you take note of a student's daily occupation, yon can easily understand the toil and hardship of study.

【同意句】 The penalties of study come home to one when one casts an eye over a student's time table.

38. 學生に美服は眞に無用の長物である。

Fine clothing is useless for a student.

【同意句】 Fine feathers do not become a student.

39. 要するに艱難は人を珠にするのである。

In short, trials purify and ennoble one's character.

【同意句】 Briefly, it is only by trials that one's character is purged of the dross.

第二章之部

1. 神を知るは知慧の始めだといふ古語がある。

There is an old saying : "To know God is the beginning of knowledge."

【同意句】 As the ancient sage said, "The fear of God is the beginning of wisdom.

2. 英語と日本語とは配語法が丸で顚倒して居る。

The syntax of the English language is just the opposite of that of the Japanese language.

【同意句】 The syntax of the English language and that of the Japanese language are just the opposite.

3. 世間が何と評しようが更に之を意とせず思ふ所を決行した彼の勇氣には感心する。

I admire him for his courage in acting decisively upon his own convictions, without minding the opinions of others.

【同意句】 I am struck with admiration at his courage in carrying out what he believes no matter what the world may say.

4. 毀譽褒貶は予の顧みる所でない。

I am utterly indifferent to the opinions of

the public.

【同意句】 I do not care a straw about the critisism of the world.

5. 試驗などをクヨクヨする輩は迚も大人物になれる見込はない。

Those who worry themselves about examination can never be expected to become great men.

【同意句】 No great man ever allowed himself to worry over examination.

6. 天を友とし人を相手にせぬのは偉人の心事である。

It is the privilage of a great man to look upon Heaven as his sole companion and not to take man seriously.

【同意句】 It is a great man who looks to God, not man, as his counsellor.

7. 人が何と云ふとも心さへ正しくば敢て己を辯解する必要はない。

Whatever the world may say, one need not explain one's self if one is upright in one's heart.

【同意句】 Though others may speak ill of you, you need not trouble to explain yourself

provided your own heart absolves you.

8. 聖者の德は薫風の如く人の心になびくものである。

The piety of a holy man like a fragrant odour attracts human hearts.

【同意句】 All men bow before a holy man's virtue.

9. 乃木大將の名は日本國中津々浦々までも響き渡つて誰しらぬ者もない。

The name of General Nogi has spread over the hills and far away, and every body knows it.

【同意句】 The fame of the late General Nogi has gone throughout the land, and there is none who is ignorant of him.

10. 乃木大將の死は終に彼をして軍神と呼ばしむるに至つた。

The death of General Nogi has made the world call him a God of the army.

【同意句】 The death of General Nogi has earned for him the appelletion of an army god.

11. 乃木大將の忠死を聞き遠近相率ひて彼の墓に參詣せんが爲幾萬人と云ふ人々が集つて來た。

Hearing of the loyal death of General Nogi,

several thousands of people have come from far and near to visit his grave.

【同意句】 Hearing of the noble death of General Nogi, thousands and thousands of people have gathered from all places to pay a visit to his grave.

12. 彼は大學者ではあるが其學問を鼻にかけるのが珠に疵だ。

He is a great scholar, but intellectual arrogance is his one defect.

【同意句】 His only defect is that he gives himself high airs on the strength of his extensive learning.

13. 彼は掌中の珠として大切にして居つた獨息子を亡くして失望の果自殺に及んだ。

He lost his only son whom he loved as the apple of his eye and the disapointment caused him to commit suicide.

【同意句】 His grief at the loss of his son, whom he treasured as the only arrow in his quiver, drove him to take his own life.

14. 一度軍人となつた以上は身命を國家の爲に献げたいとは彼が兼てよりの覺悟であつた。

Once he became a soldier, he had it in mind